

75-43

古城貞吉著



支那文學史

完



東京 經濟雜誌社發行

櫛



瑤

芳

護美



其邦大學序

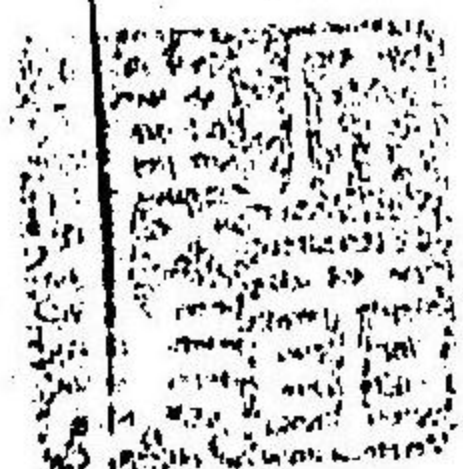
各國之史以文為教故
尚書之記年今三十年矣
乃知天學之浩無量矣
何可知也此世大學之序

其邦大學序

一

北方

護美



支那文學史序

各國之史以支那為最故
尚書之存記距今三千年矣
乃支那文學之浩瀟且繁
傳可知也近世文學之士匪

不知支那文學史之可修而未
 能有果否者其有以古城
 君以著者為藁文以益近來
 之佳編也頃者君來微予
 序予容之寢病來氣力

衰耗未適於枕筆祥福
 又書一言於卷端而返之
 君幸恕怠懶可也

明治丁酉之春

邦舟木於弦樞

支那文學史序

人類社會中有二大界，一曰物質界，一曰文學界。在物質界，帝王相將，勇士烈婦，賢奸智愚，續々輩出，或發揮天賦技能，以奏絕代偉勳，或狂奔一時名利，以博萬世冷笑，亦爲人間妙觀。而其事率簡易，序之不甚難，故古今修其史者，實不鮮矣。至文學界，詞客文人，儒釋黃老，諸子百家，觸物應事，或悲哀，或歡喜，或怒號，或罵笑，或諄々如諭蒙，或揚々如誇

榮其言高妙雄大皆有足使人歎服者故品評之也甚難殊以支那文學爲最然秦漢以前多雄篇大作譬如長松亭亭聳天鬱々可仰也至唐宋八家措辭整肅秩然有序譬如盆栽之樹固結緊縮一枝一葉皆成趣嗚呼是進乎退乎及近代考據學大起涉獵之廣搜索之密前代無比而至文之真趣反有不及焉者然則未可以此俄斷其消長也是以世間或有修文學史者未有以及支那文學

史者也我友古城貞吉君毅然自任之列叙支那文學上下三千年事迹萃精拔粹以考覈其所以推移消長之理終能成此書嗚呼可謂勉焉蓋本邦文學半屬漢文而漢文之淵源支那固不俟言也德川氏中葉以降文運大進考證之精韻致之逸有凌駕明清者而時或不爲無秘舶載書筐底詐爲已作以驚倒一時者故不知支那文學者未可共語本邦文學也今此書成矣學者輒得詳彼此

文學迭爲父子爲兄弟之情、而知所以益振
作之方法、則其裨益國家文運、非少小也。

明治三十年五月

田口卯吉

支那文學史序

我邦の文化は本と支那に得る所少しとせざるも、西洋の學術を引きて之れ
を入るゝに及んで、迥に支那に駕して上ほるに至れり、是に於てか我邦人
の支那を輕侮すること殊に甚しとなす、辨髮奴を以て目せらるゝは兒童す
ら猶ほ且つ之れを耻づ、況んや堂々たる五尺の男子に於てをや、事已に此
の如くなる以上は支那文學の如き亦一切吾人研究の區域外に放逐し去りて
可なるか、世の學者にして四書五經は已に腐敗せりと絶叫せるを見れば、
或は之れに答へて然りと云ふものもあらん、然れども其見解の妄謬なる、
少しく思惟せば、了知し得ること、甚だ難しとせざるなり、我邦の古書中
重要なるものは多くは漢文を以て編著せらる、然らざるものも法則を漢文
に取るを常とし、漢文の痕迹を留めざる所、殆ど之れあらず、是を以て支
那文學を研究するにあらざれば、我邦古來の典故は如何にして討尋するを

得ん、唯、此點より考察する而已にて、支那文學研究の必要は十分に認識すべき餘地あること復た疑を容れず、然れども尙ほ近く吾人に接する處より考察するに、吾人が日常思想を交換する機關たる文章は絶えて漢文に本づく處なきか、其文字は本と何人の發明に係るか、若し漢文を排斥せば普通の文章さへも綴り難かるべく、若し漢字を廢せば自己の姓名さへも記し得ざるべし、否、支那人を卑下する其論さへも支那人の恩惠によるにあらざれば爲すこと能はざるにあらずや、果して然らば如何に支那を輕侮するとも、支那文學の研究は到底廢するを得ず、又廢するを要せざるなり、假令ひ國字を一變して支那文學の支配を免るゝことあるも、支那文學は之れが爲めに其價值を失ふものにあらず、此事たる、希臘、羅馬、希伯拉、珊悉訖利多等の文學が千古不磨の價值を有すると何を以て異ならんや、殊に猶太人は西洋諸國にありては幾ど穢多の如くに輕侮せらるゝも、希伯拉の

研究が終りを告ぐべき時機を豫想するを得ざるなり、唯、支那文學は西洋人の未だ大に研究せざる區域に屬す、詩經の外、李白及び白樂天、蘇東坡等の詩は多少彼國に譯出せられたるも、古今三千年の文學を歴史的に考察するが如き、豈に彼等が容易に企圖し得る所ならんや、然れども支那人自らは元來概括力に乏しく、且つ今の學術界の状態如何を辨せざるが故に、支那文學史を著はすの必要を知らず、假令ひ之れを知るも、之れに應ずるの資格なきものなり、果して然らば支那文學史を著はすが如きは、我邦人自ら進んで此任に當らざるべからざるなり、社會事業の次第に複雑に赴くや、専門家にあらざるよりは、各家の全集を手にして翫讀するの餘裕なく、隨ひて又文學の如き、古今變遷の要領を知るの必要、日、一日より甚だしとす、是を以て近頃日本文學史を著はすものは二三之れあり、然れども未だ支那文學史を著はしゝものあるを聞かず、是れ一は我れを知るは彼れを知るよ

史 學 文 那 支

り急なるの意に出づと雖も、一は支那文學書類の浩瀚なる我邦の斷じて及ぶ所にあらざるが故に敢て此困難なる研究を爲すものなかりしに因るならん、然るに熊本の入古城貞吉君蚤に支那文學史を著はさんと欲し、屢其方法等に關し、余に就きて謀る所あり、後、數年を経て草稿の一部分を携へ來りて余に示す、余頗る其舉を賛し、尙ほ他日之れが完成を期せんことを勤む、已にして日清戰爭起る、君乃ち袂を揮ひて蹶起、朝鮮の京城に赴き、書を友人某に寄せて、曰く、今や男子爲すあるの時なり、請ふ日本刀を送れ、是れより軍に遼東に従はんと、後、音信暫く絶え、君の情狀如何を知らざりき、頃る偶、上海より書を余に寄せて、曰く、草稿正に成れり、今之れを印刷に付せんとす、請ふ爲めに序を作れと、幾もなく君の友人某其草稿を携へて來たる、余曰く、是れある哉、乃ち平生思ふ所を述べて、以て序となす、然れども余は此書を以て支那文學史の完全なるものとはせず、唯之

史 學 文 那 支

れに類する著書の絶えて世にあらざる時に當りて、君先づ之を公にするを多とす、君は此種の研究上に於て陳勝吳廣たりと謂ふべきなり、若し夫れ他人の著書中に就きて二三の缺點を指點するが如き、傍觀者に取りて甚だ容易なりとす、是れ如何なる著者も缺點なきこと能はざればなり、是故に著者の價值を知らんには二三の缺點を指點せんよりは寧ろ如何なる程度まで有益なる結果を生ずべきかを見ざるべからざるなり、余は此書の管に我邦の初學に便利なる而已ならず、又學術界の空處をも充たすの一助となるべきを信するなり、

明治二十九年九月十一日

井上哲次郎識

凡例

一余本無學、此の書、稿を明治二十四年の秋に起す爾來荏苒、歲月流れ易く貧病交、其の外を驅りて専心此の業に従ふ能はず、客歲征清の師出づるや又邊警を追ふて浪游を試み業を廢すること年餘、今や稿成る願ふに自ら誤謬獨斷の極めて多かるべきを知り私心甚く愧赧に堪へず若し幸に江湖博雅君子の是正を得ば固より願ふ所なり

一是書題して文學史と曰ふ然れども書中記する所、豈以て其の名に稱ふに足らんや唯、世未だ支那文學に於ける此種の著ありしを聞かす是余の奇を好む敢て空疎を願みずして此業を企てし所以なり然れども記する所何事ぞ、唯、多く古人の姓名を列記せしに過ぎざるのみ讀者以て點鬼簿と爲すを得ば則ち足れり

一古人書を著す多く微意あり司馬子長の史記に於ける題子成の外史に於けるか如き即ち是なり抑、余何人ぞ、豈敢て古人を望まんや唯、書中時に言はすして可なるもの及はすして足るもの、間、これなしとせず敢て意ありて之を爲すにあらす雖端偶、然るを致すのみ覽者請ふこれを察せよ

一余の本書を著す或人云ふ説の可否は姑らく論せず其の文例には定めて名文多からむと本説既に云

凡例

(一)

ふに足らず淺陋固より名文を選するの論議に乏し然れども余は務めて多くの文例を挿入せり敢て大方の觀に供せんと欲するにあらす幸に中學、師範兩校以下の參考に資することもあらは是古人の賜なり

一此書の編著に關して著者か涉獵參考せし書は無慮數百部の上に出つ今一一書目を掲げず蓋竊かに博に誇るの陋を恐むのみならず亦自ら斯の如きの材料を擁しなから是の如きの拙著を出せるを愧つればなり

一本著の爲めに終始力を材料の補給に盡されたるは龜井英三郎氏にして又特に少からざる贊助と注意とを與へられたるは井上哲次郎、田口卯吉の兩氏及郷里清浦、木下、佐々の諸先輩なりとす其他圖書を貸與して著者の業を助けられたるもの甚多し本書の成る特に之を記して永く感謝の意を表すと云ふ

明治二十九年六月

著者識

支那文學史目次

序論

一

支那國民 支那文字の性質 四國の境遇と文學との關係 政體及び儒教主義の影響 王家と文學 支那の文學者 繫結

第壹篇 支那文學の起源

第壹章 總論

九

上古の世態 三代の政治文學 周代文化の美 編中に敘する所の項目

第貳章 書契の起源及び文字の構成

一二

書契時代 蒼頡と文字の製作 六書及び其の概要 書跡

第三章 唐虞三代の沿革及び開化一斑

一五

堯舜禹湯及び武王周公の事業 三代の賢者 三代の國是 文藝と柔弱の關係

目次

(一)

第四章 周代の學制

周代學制の大成 學校及び教育 教育の要旨

教習の時期 成業の士

一八

第五章 諸子時代以前の文學

上古の詩歌 商頌 周詩周頌 尙書の文

二二

第貳篇 諸子時代

第壹章 總論

諸子時代と稱する時期 春秋戰國間の概況 當代文學の三期別、及び其の大較
文學發達の原因 當代文學の短評

二七

第貳章 儒家

第壹節 孔子及び五經 五經大意 春秋三傳及び論語
儒家大要 孔子の傳
第貳節 孔門の弟子

四一

六五

孔子の死後に於ける弟子の行業 諸弟子の小傳

第三節 孟軻荀卿及び其の著書 孟子及び其の學說 荀子及び其の學說 二子の文評、及び文例

第三章 道家

第壹節 老子及び其の書 道家大要 老子の傳記 學說 孔子との比較

第貳節 列禦寇、莊周及び其の書 列子と其の學說 莊子及び其の學說 二子の文章

第四章 墨家 墨翟及び其の書 其の學說一斑 其の文章

第五章 法家 法家大要 管仲、商鞅、申不害、韓非、及び其の書 管商韓三子の文例

第六章 名家

目次

名家大要 公孫龍、尹文、及び其の書 文例 一二七

第七章 兵家
兵家大要 孫武、吳起、尉繚、及び其の書 三子の文例 一三三

第八章 雜家
雜家大要 鄧析、慎到、鶡冠、鬼谷等の書 文例 一三七

第九章 賦家
賦家大要 屈原、宋玉、及び其の賦 騷賦の例 一四三

第三篇 漢代の文學

第壹章 總論 一四三

漢家の創業 武帝の治 董仲舒の對策 漢儒の學及び文籍 兩漢文學の大較
本編に叙する所の項目 一五四

第貳章 議論牀の文 一五四

賈誼、鼂錯、及び其の文 陸賈、董仲舒、劉安、及び其の著書 楊雄及び其の著書
東漢諸家 一七七

第三章 叙事牀の文

第壹節 正史 一七七

司馬遷、班固、及び其の史書 批評及び其の文例 一九六

第貳節 傳記 一九六

韓嬰、劉向、及び其の著書 文例 二〇〇

第四章 詔勅、上書、及び書牘牀の文 二〇〇

詔勅、上書、及び書牘の樂説 文例 二〇〇

第五章 漢代の韻文

第壹節 古詩及び樂府 二二三

樂府及び其の起源 樂府の解題 五言七詩、及び無名氏の十九首 蘇武、李陵
及び其の詩 七言詩及び柏梁聯句 二二三

目次

第貳節 辭賦……………二四二

司馬相如、及び其の他の辭賦家 辭賦の例

第四篇 六朝の文學

第壹章 總論……………二五八

六朝と稱する時期 魏の文學 清談家 南北朝間の學政一斑 南北風氣の異

同と其の文學との關係 六朝文學の特質 佛教の影響……………二六八

第貳章 六朝の詩……………二八六

建安の詩 晋代諸家の詩 南北朝諸人の詩

第三章 六朝の散文……………二九六

第壹節 著書の文……………二九六

(一)子類 (二)歴史類 (三)地理類 (四)詩文評類

第貳節 雜文……………二九六

六朝諸家の雜文 批評及び其の文例

第四章 六朝詞人傳

第壹節 鄴都の諸人……………三一四

第貳節 晋代の詞人……………三一八

第三節 南北朝の詞人……………三二八

第五篇 唐朝の文學

第壹章 總論……………三四〇

太宗の政策 十八學士 唐朝文學の淵源 經術と詩文との消長 天寶の亂

其の文學上に及せし影響 古文の復興 佛教の流布 文學發達の原因

第貳章 唐朝の儒學……………三四六

王家の獎勵 訓詁 陸德明、顏師古、孔穎達の小傳

第三章 唐朝の詩……………三四六

目次

第壹節 唐詩の概説 三五四

初盛中晩の詩風 唐詩と漢魏六朝との比較 詩人世次 三六〇

第貳節 初唐諸家 詩律の變 初唐四傑 陳子昂、及び其の詩 沈佺期、宋之問、及び其の詩 三七九

唐の詩例 三七八

第参節 盛唐諸家 杜甫及び其の詩 王維、孟浩然、高適、岑參、盛唐の詩運 李太白、及び其の詩 四三〇

及び其の他の詩人 諸家の作例 四三〇

第肆節 中晩諸家 韓愈、白居易、元稹、其他の詩人 諸家の作例 四四六

第四章 唐朝の散文 四四六

第壹節 唐文概説 陸贄の奏議文 史筆 四五一

時文及び古文 古文家 四五一

第貳節 古文家 四五一

(八)

第六篇 宋朝の文學

第壹章 總論 四九七

五季の暗黒時代 宋の建國と趙普の立策 宋朝の文臣政略 朋黨の起仆 四九七

科擧と文學 宋儒の講學と佛教との消息

第貳章 宋朝の儒學 道統の説 宋儒の學風 諸儒の學派、及び其の小傳

第三章 宋朝の散文 第壹節 宋初の文章と歐陽脩 歐陽脩の略傳 其の文章及び作例 五〇〇

柳開、程脩、及び尹洙

(九)

目次

(10)

第五節 三蘇
蘇洵の小傳及び其の文章 蘇軾の略傳 其の人品、及び文章 其の文例及び精
略 蘇軾の小傳、及び其の文 五六六

第三節 曾王及び其の作家 范仲淹、司馬光、及び李觀等の文 五七一

曾鞏及び王安石 其の文章 五七一

第四節 南宋諸人 謝枋得の小傳、及び文章 五七一

王十朋、呂祖謙、陳亮、其他の諸人 謝枋得の小傳、及び文章 五七一

第四章 宋朝の詩 五七五

第五節 蘇軾以前の詩 二姦の詩 五八二

宋初の詩 梅聖俞、蘇子美、及び歐陽脩の詩 二姦の詩 五八二

第六節 蘇軾の詩 五八二

東坡の詩風 諸批評 兄弟唱酬の作 作例 五九五

第三節 東坡以後の作家 陸務觀の小傳、及び其詩 四家の詩例 朱熹の
蘇門の六子 南渡後の四家 五九五

詩 文天祥の詩

第七篇 金元間の文學

第一章 總論

六〇八

此編に稱する所の時期 金元二朝の建國 金元文學の淵源、及び發達 蒙古字
と元朝文學との關係 二朝文學の概評 六〇八

第二章 金朝の文學者

第五節

元好問以前の作家

六一五

遼宋の舊人

燕英懷、李純甫、趙秉文、其他諸人の小傳

作例

第六節

元好問、及び其の詩文

六二二

元好問の地位

其の略傳

其の詩文

第三章 元代の文學者

六二九

趙孟頫と其の詩例

虞集の小傳

其の作例

楊載、范梈、及び揭傒斯と其の詩例

馬祖常、薩都刺、及び其の作例

儒學家諸人

楊維禎の小傳、及び其詩

目次

(11)

第八篇 明代之文學

目次

(三)

第壹章 總論

本編の時期 明朝の創業 太祖の性質 當代の儒風 文運の繁略 當代作者の病弊 王家の陋習、及び其の文學上に及せる影響 六四一

第貳章 明代の散文

第壹節 古文辭

宋濂及び其の文章 王禕、方孝孺の文 摸擬派の興起 王守仁、及び其の學問文章 唐宋派と摸擬派との對立 歸震川の文 文章の衰亡 諸家の作例 六四六

第貳節 經義即ち入股文

入股文の性質 其の起源及び發達 一代間傑出の作家文例 六六一

第三章 明代の詩

第壹節 國初の諸人及び其の詩

沈德潛の明詩評 劉基及び其の詩 高啓の小傳及び其の詩 作例 袁凱、楊基 六六五

及び其他の諸人 作例

第貳節 永樂以後の詩

楊士奇と蘇閣林詩 李東陽、及び其の詩 七子の徒、及び其の詩 作例 楊慎、薛惠諸人 李燾龍、王世貞、及び其の一派の詩 作例 明末の詩、及び作例 王世貞の明詩評 六七五

第九篇 清朝の文學

第壹章 總論

清朝の起源 世祖の興學 蒙古字及び翻譯 聖祖の文學獎勵及び書籍編纂 康熙乾隆間の文運 其の發達の理由 嘉慶以來の世運と文學 六八九

第貳章 清朝の文章家

國初の二大家 侯方域の小傳、及び其の文章 方域に對する清人の評語 魏禧と其の文章 汪琬と其の文章 王猷定と其の文章 顧炎武の小傳 日知錄中の精粹 姜宸英と其の文章 朱彝尊の小傳及び文章 邵長蘅と其の文章 方 六九九

目次

(三)

目次

苞の小傳、及び其文 桐城派の文 袁枚の小傳、及び其文 嘉慶以後の諸人
當代の文例

第三章 清朝の詩家

錢謙益と其の詩 吳偉業及び其の詩 南施北宋の詩 陳其年及び尤洞 王士禛
禛と其の詩 朱竹垞の詩 顧亭林の詩 趙執信、及び查慎行と其の詩 厲鶚、
袁枚、蔣士銓、趙翼諸人 張問陶及び其他の諸人 作例數篇

七二〇

支那文學史目次終

支那文學史

古城 貞吉 著

序論

支那は東洋の古國なり其の國を建てしことは遠く三千年の前に在り隨て其の制度文物も亦夙に開け
て其の盛を極めたり然れども興廢常なく變故轉瞬、盛なるもの以て衰へ蠻野なるもの以て起り
應朝の沿革、毎て其の端なきか如く一起一仆、相沿ふて故轍を再做し而して其の文化の夙開せし
の亦竟に中絶し絶して發達の運に向はず誰か思はむ今日彼の營々として蕃殖蔓延せる夥多の人口は
少くとも血肉を此の古國の前聖なる堯舜治下の後裔子孫に承け其の開化は嘗て自國の制度の下に發
達し其の政治は嘗て模範を他の外國に採らず其の文學は自國の學者の講究に成り其の言語文字は其
の國人の考案製出に係るものならむとは

此の奇異なる古國民は亞細亞の廣大なる最要部分を占領して其の祖先の血統骨格を遺傳し其の祖先
の流風遺俗を繼續し以て今日に至れるなり其の間には時に或は王朝の革命を閱し又或は異人種の侵
入なきにしもあらずりしも異人種の血肉、習慣は日を逐ふて同化し革命の波動は之を反正して嘗て

障害を一社會一國民たるの上に及さず故に其の奉して人事を節文するものは猶是古聖前王の制作に象り其の誦して子弟を教訓するものは猶是二千年前に朽敗せし往哲の經典に係り曾て疑義を古人の教訓に挾まず又曾て一刷新を社會の構架に試みんことを思はず其の保守的性質は循々として敢て非常輕快の行爲を好まざるも財利に徇ふに至りては勇往奮進、湯火を蹈み身命を犠牲にするも猶且つ以て之を避けざらんとす故に其の一國民としては頗る其の統一を缺きしことこれなきにみらざりしも個人としては其の利を逐ひ富を計るに活潑慧敏なるは正に彼の猶太人に似るものあり是特に今世に於ける支那人を觀て以て說を立つるにみらざりして其の先天的營利の人民たるは後世の天國視したる堯舜時代の人民に淵源するものあるを見るなり

吾人の今筆する所は此の古國の文學史なり然れども吾人は今一般に東西の文學を考へて之に定義を下すことを爲さず直に此の古國上下三千餘年間に發達變遷して幾多の詞人文才を生出したる概畧を踴躍の間に留めんと欲するのみ蓋此の古國には自ら此の古國の文字文章ありて一種固有なる文學の姿態を爲せば亦必らず一種の記述を要す今夫試に其の文章詩歌を構成する所の文字を諦視せよ日月動植の品彙匹儔、多くは皆其の形狀に象りて其の文字を構成するものなり縱令ひ其の全く然らざるものあるも或は鳥聲金音、直に其の音聲を稱するものあり又或は意匠を以て考察想見し得べきもの

ありて其の文字なるものは畢竟一種の繪畫と稱するに適當せり故に支那文學に於ける文字の排列、即ち所謂詩歌文章なるものは自ら是一種の繪畫の排列聯合せられたるものに外ならざるなり故に之を一種の美術的文學として把玩せむには山川花鳥、風雲煙火、直に目、其の物を睹て心、之に感觸するの思ありて頗る奇異の興味少しとせず是支那の文學に於て獨得なる性質を有する所にして恐らくは他國の文學に在りては此の如きの消息に遠からむ果して然らば支那の文學者なる者は其の詩歌文章に堪能なると同時に又一方に於ては一種の畫家たるの名譽を荷ふ者と云はざるべからず文字既に斯の如し而して更に四圍の境遇、山川風土の形勢、人俗好尚の異同等よりして一國の影子を造成して其の文學上に照映するものあり蓋支那の國を置くや亞細亞大陸の最大要部に在りて高山大河、域内に連亘貫流し其の土は廣漠遼遠にして南北、其の風氣を一にせず東西、其の俗尚を同くせず今試に南北を以て之を衡るに西北の風は渾厚にして其の失や猛悍なり東南の俗は偷惰なれども其の得や和平なり故に古より以來、西北は強を以て勝てども多く之を亂に失し東南は治を以て陸なりしも多くは之を弱に失せり此れ則ち風俗の各、得失あるなり且夫西北の人は直を以て開ゆれども其の失や狠なり東南の人は詐、多きも其の得や易なり故に古より以來、西北の政は多く嚴を以て平を致し江南の政は多く寬を以て治を爲せり此れ則ち人民の各、得失あるなり且つ西北の地は峻山高

險多く東南は湖沼淼漫、耕種に便にして田疇相望む是に於てか西北は財に裕かなるも亦饑を患ひ東
 南は食に足りて貧に苦む此れ食貨の各得失あるなり一得一失、是の如くにして其の文學上に影響す
 る所、西北は詞氣貞剛にして音韻鏗爾たり而して東南の文學は雍容和雅、濟々たる治平の音、毎に
 此地より發す然れども鶯花吟嘯、流連荒亡して哀歌怨音、喉珠宛轉の間に迸出するもの、亦毎に江
 南の煙雨楊柳の境に在りとす然らば則ち山川南北、人情強弱の因りて影響を文學上に及ぼすもの
 亦以て寡きにあらす蓋し支那の詩歌文章の殊に山川風露の氣に富む所以のもの、全く其の長江大河
 高山峻嶺の闕域に起伏貫通するもの多きに因る彼の蜀道の險、江南の景の如き、毎に幾多の詩人墨
 客に好材料を供給せし所にして李白、杜甫より以下東坡、石湖の徒、率ね嘗て一遊涉を試みざるは
 なく或は細雨、驢に騎りて劍門を過きり或は半夜、句を探りて吳船の中に餘寫せるか如き又或は武
 昌樊口幽絶の處に春朝秋夜、四時の景を賞せるか如き、無心の風煙は好個の文人韻士を醜弄一番じ
 て其の腦漿を攪亂せしめたるなり吾人は是に於てか將さに言はむとす支那文學の精采は殆んど山水
 煙景の着想に存す

に與へたるなり蓋し儒教の支那上下數千年の人心に向て銷磨すへからざる性質を感得せしめたるこ
 とは固に論なく而して之に由りて養成感得せられて少しく文字ある者は必らず先づ臺閣仕進の志を
 懷き假令ひ實際に於て治國平天下の志無きにもせよ少くとも治國平天下の實を擧げ得る所の政府の
 官吏たるを以て無上の名譽と爲し一身一家の光彩を添ゆるに足るとせしとは亦決して疑ふべからず
 且つ其の政体は始終君主專制にして君主の意思は畢竟國家の意思として存在する所なるか故に民間
 に賢能長者を遺して覬覦の念おらしむることなからんと欲し一長一能ある者は務めて之を政府に收
 用し利祿以て之を繋ぎ名爵以て之を釣り以て野に遺賢なきを盛世の事と爲せり故に隨て讀書文字の
 徒は政府に集りて其の文學は自ら一種の上流的產物と爲り其の章奏議論の散文に發するもの多くは
 條理暢達、儒雅切實を以て時用に中ると爲し其の雅頌鼓吹の詩歌に顯はるゝものは雄渾正大を以て
 臺閣的氣象ありと爲して之を推稱し殊に唐宋以來、士を取るの法、専ら科擧に由りしかば官途利祿
 を思ふの人心は自ら此の香餌の下に喰嚼して相集り以て月桂を攀んと欲せり是に於てか治國平天下
 の儒教主義は忽ち一轉して射策仕進の段階と爲り竟に其の文學に科擧應制的の詩歌文章あるに及べ
 り而して各種の題下に於て毎に一種の政教的思想の活動せるものありて自ら貴族的傾向を帯びたり
 故に若し田園稼穡桑麻牧畜等の民家日常の光景を寫し民人の適意歡樂と逸情野興とを記するものを

稱して平民的文學と云ふを得は支那の文學は最も貴族的文學の傾向あるものと云はざるべからず。且夫其の文學の盛衰する毎に王家の盛衰興廢と相表裏し王家の最盛時代には其の文學も亦概ね隆興の運に屬して雄才錦腸なる學者、踵を接して輩出し詞華言葉、鬱鬱陰森として盛茂すれども一旦王家の衰亡するに臨みては其の文學も亦凋殘零落に歸して寒煙荒草、文園を没し鬼語怪調、空しく飛騰して衰朝の最後を送るもの、歷朝の文學に於て俱に然りと爲す且つ其の盛衰する所以のもの亦王家の獎勵如何に歸して其の種類姿態を爲す所以、亦毎に王家の好尚勸進に出で其の時代の感化を受けざるもの少しとす唐朝の詩に於ける宋朝の文に於けるか如き即ち是なり而して其の文たり詩たるに論なく王家の獎勵好尚する所以のもの或は其の政略に出づるものあり又或は其の遊玩に出づるものありと雖も要するに其の詩人文士なる者は一種の翰墨癖に富み殆んど其の生命の一半を擧げて之を吟咏揮灑の間に放過するものたらずんばむしろ而して此の翰墨癖ある詩人文士の多數は一方に於ては風流閑人たるの觀あると同時に又他の一方に於ては履歷を仕途に有する縉紳官吏たる者なれば其の文學の貴族的傾向多くして又其上流社會の賞玩の具たること豈亦偶然ならんや。斯の如く支那の文學は儒教主義の要素に由りて政治道德的の文言に富み又其の所謂詩人文士なる者は輕裾緩帶、儒雅名士の風ありて其の吐く所は瑤音玉章、其の著す所は錦繡文なれば轉々其の社

會人民の道德名譽を想望するに堪へたるも翻て其の社會人民の實情を察するに決して想望するか如くならずして仁義道德の言、忠節廉耻の行は畢竟其の社會人民に珍重せらる丈け其半面の實情を察するに足るなり故に若し唯單に語言文字を以て仁義道德を想望せば恐くは四方萬國、支那の右に出づるものなかるべし然れども事實は之を容るざれば則ち其の文學者なるものは文字を以て空しく世道を黽織するも實効を以て其の社會人民を教化せるは甚多しと爲さざるなり是に於てか吾人は又將に云はむと欲す支那の所謂詩人文士なる者は多くは是一種の誇張的文學者たるを免れざるなりと

是に由りて之を觀れば支那文學は或る觀察に於ては保守的國民たり又或る觀察に於ては唯利主義の種族たる支那國民の間に發達したるものにして四國の境遇と遭際の時代とは之をして種々なる形狀姿態を爲さしめ或は風土自然の感化よりして山水煙景的の着想に富み或は王朝政治の影響よりしては貴族的傾向を増し又或は世運の治亂興廢に因りて其の盛衰消長を爲し又或は人心の嗜好愛玩に由りて其の種類姿態を形成せしこと甚少しとせず而して其の所謂文學者なるものは或は一種の誇張的文學者たるものあり又或は半面には雜書期會の間に執筆せる政府の官吏にして他の半面には雲を見、山を樂みて塵俗の外に超然たる風流閑人の觀を爲すものあり而して其の著作の上には於ては或

る意味に於ける一種の繪畫を出せる名譽を荷へるなり故に若し文學を以て其の社會人民の性質好尚を觀るに足るとせば此の社會人民の性質好尚程又奇異なるものあらざるべし意ふに支那在來の歴史家は嘗て意を此に致さざりしが故に其の歴史なるものは單に王家の年中行事、戰爭の記録、若しくは天災地妖の怪事記たるか如きの觀を爲せし所以ならむ吾人の意、亦單に一代の文學を擧げて當時の社會人心を窺はむと欲するにあらずと雖も此の意、亦これなしとせざるなり

吾人か支那文學を概觀するもの、譬此の如し古人は由て以て更に其の文學の變遷を追ふて聊か叙述する所あらむと欲す然れども此の業、畢竟古人の殘骸を檢して生時の面容笑聲を髣髴の間に索めんと欲するものにして恰も彼の博物學者が前世界巨獸の骨片を得て其全形を品模するか如く轉、其の容易ならざるを覺ゆ然りと雖も上下三千年の殘骸、空しく遺棄して人の收むるなければ吾人不才と雖も爲りに香を燒きて其の遺骨を拾ひ聊か以て其の生時を想はむと欲す若夫姿態風神の如何と其の逸情妙緒とに至りては竊に恐る、時に或は古人を臨ぶものこれなきを保せざるを然れども幸に以て其の笑貌聲容の一半を髣髴の間に留むることを得は吾人の願、即ち足る矣。

第壹編 支那文學の起源

第壹章 總論

吾人は今歴史的に支那の文學を叙述せんと欲するに當り、先づ其の上古に遡りて、當時の世態を一瞥し、然る後に之れか起源、及び發達の歩趨を討尋せざるべからず。

何人も能く知れるか如く、支那は東洋の古國なり、其の人文の開けたる、遠く五千年の前に在りて、今日文明を以て東西に雄視する、歐西諸國の如きは、未だ全く人文の起るべき微光をたも認る能はず、其の山澤には、虎豹豺狼、毒蛇惡蠅の族、窟宅して、咆哮吞噬せし頃に、此古國に在りては、既に宮室、衣服、婚嫁、送葬の常事より、君臣上下の制に至るまで、不完全ながらも社會的旅裝を爲して、人文發達の途に上れり、而して黃帝時代に於ける、不完全なる繪畫的文字の創製は、端無く文學の萌芽を發生して、遂に支那に於ける、一種の形繪的文學の起源を爲せり。

然れども時猶ほ草創に屬して、如何なる聲色の詩歌、先づ起り、又如何なる形骸の文章、存在せしかを知らず、又其の發達の順序に於ても、如何なる事情に遭遇して、如何なる經過を爲せしやを知らずと雖も、意ふに書契創製の當時に在りては、社會の狀況も最も單純なりしかは、單に文

字を以て、一種の意味を有する事物の符號と爲せしに過ぎざるべし、而して社會の進化、日一日より更に開明に向ふに及びて、日常萬般の人事、亦漸くに繁く、其思想意識の事物に觸發して現前するもの、亦漸くに粗より細に入り、豪蕩より純粹に進み、唐虞の際に於ては、社會の組織、大に發達して、思想文字の作用を假ることも、亦一層其度を増進し、隨て新字の製造も亦續々起りて、其の詩歌、文章の發達を助けしこと、愈々少からず、降て夏殷の際に及びては、其政治は封建世襲の制、既に成り、其の風俗は、全く野蠻の陋習を出て、其の文學、亦大に觀るべきものあるに及び、然れども當時才學、衆に秀つる者は、概ね登用せられて其位に在りしか故に、野に遺賢を見ず、隨て文學の士、亦自ら上に集りて、其の文學は、政治的文學の特色を帯ひたり、獨り夏殷の文學に於てのみ然りと爲すにあらす、支那歷代の文學、多くは此傾向を有せざるはなく、蓋亦其の政體に伴ふの結果たるに外ならず。

夏殷の文學は、此の如くにして發達せり、周に及びては、風華愈々開けて、既に絢爛の境に入り、特に周公の天下を制馭するや、文華を尙ひて柔優禮節の風を起し、同姓を親んで本支百世の基を爲し、諸侯を封建して七十一國を立てしか、同姓の國を得るもの五十三國に至る、是に於てか、封建の制、益々完備して、朝廷の大典儀式より、列國の會同、交際に至るまで、之を結ぶに親和を以て

し、之を制するに禮文を以てせしかば、其の影響する所、隨て亦文運發達の因と爲れり、是に於てか、其の官制には、周官の美ありて、凡百の政綱畢く舉り、其の文學には、爾雅の編纂ありて、文字の考索を助けたりしかば、其の賢士大夫は、文采彬彬として、從容儒雅、恭敬揖讓の節あり、其の野人には、敦厚溫和、風韻の作ありて、文運上下に洽く、學風四方に靡して、前古未曾有の盛觀を現出せり、而して其の季世に及びては、風雨亂飛、禮文益々繁くして、頽勢愈々回すべからず、其の以て天下を制馭せし所以のもの、却て自ら困蹶を取るの資と爲り、積衰積弱、絶えざること絲の如く、諸侯環峙して敢て救はず、先王の遺制、地に墜て復た行はれず、竟に戰國擾亂の世と爲る、而して其の文學は獨り益々爛熟の境に入りて、大に其の形質を改めたり、諸子時代以前に於ける、社會、文學發達の概要、略々此の如し、吾人は更に下章に於て、

第一 書契の起源、及び文字の構成

第二 唐虞三代の沿革、及び開化一斑

第三 周代の學制

第四 諸子時代以前の文學

等に分つて聊、敘述する所あらむと欲す、然れども上古悠遠にして、今其の詳細を悉くす能はず、此

編叙する所最も略に從ふ。

第貳章 書契の起源、及び文字の構成

凡太古鴻濛の事は、各國の史乘を案するに、概ね均しく、荒唐不稽の説多く、半神半人の異蹟を傳へされは亦必らず半首蛇身の人を存し、其智能の群類に超出する者は、或は天啓を受くると稱して、直に君牧の任に居るあり、或は五色の石を練りて天極を補ふと云ふものあり、又或は空中を飛行すること輕鳥の如き者あり、或は猛獸を叱咤し雷電を驅逐して、威風を馳する者あり、此の如きの類、各國の神代記に於て、均しく散見する所にして、適、以て太古未開の状況を窺ふに足る、降て書契時代に至り、人智漸く發達して、其の思想の文字に顯はるゝもの、意匠の事物に存するもの、亦隨て單純より複雑に移り、始めて粗笨なる詩歌類、出て、文學の微光を發するもの、東西概ね然らざるはなし、故に今支那文學の起源を尋んには、亦必らず太古の開化に於て、其の書契時代に入りしは、果して何の時に在りしやを考へざるべからず。

蓋太古の傳説に據れば、今より大凡五千年以前に當りて、支那人民を統御せし君牧に、三皇氏あり、第一を伏羲と云ひ、第二を神農と云ひ、第三を黃帝と云ふ、伏羲氏天地鳥獸の文を觀察して八卦を

書し、結繩を作りて記號符形の端を起せりと云ふ、然れども、當時猶未だ成形の文字あらす、意に其の所謂八卦なるものは、唯單に形象を畫したる符號にして、之に賴りて事物の吉凶禍福を判せしに過ぎざるべし、黃帝の時に及びて、其臣に蒼頡と云ふ者あり、(西曆紀元前二千七百年代)始めて文字を製す、其形狀構成は、今復た之を詳にすること能はざるも、支那に於ける書契の起源は、蓋此時に在りしに似たり、意に當時人文漸く發達して、衣服、家屋、耕作等の業より、互市、交通、及び其他凡百の制度に至るまで、設令ひ未だ完全の域に達せざりしにもせよ、當時の状況に應じ、其必要の度に伴ふて發達せしことは、後世治化の道、一に皆黃帝の時に完成せしか如くに思惟する者あるを以て之を知るべし、此の如きの状況なりしか故に、亦必らず思想を表章して、感情を發露するに適當なる記號、若しくは文字の發明あるに至るは、自然の順序にして、蒼頡の文字は、果して其人の發明に係るや否や、頗る疑ふべきものありと雖も、要するに文字の發明ありしは、全く此時代に在りと断定するも、亦甚、過誤にあらざるべし。

然れども、上古悠遠にして、水火星霜、幾たひか變し、今其の當時の遺文を尋んと欲するも、亦曾て片言隻字の荒渺斷碑にたも存するを見ず、蒼頡の文字、空しく其名を留めて其形象を知らず、意に當時の文字は、多くは象形文字にして、直に一種の繪畫たるに過ぎざりしのみ、且又一代一時

に許多の文字を創製せしにあらすして、必らず時を逐ひ世を累て、改定添加せしものなること、亦決して疑ふべからず。

周初に及びては、殆んど各種の文字、製造せられたりと見へ、地官、保氏の職に六書を以て國子に教ふるの文あり、漢の鄭康成、之を註して象形、會意、轉注、處事、假借、諧聲の六を爲せり、蓋此六者は、支那に於ける造字の基本たるものにして、所謂象形とは、直に諸物の形跡に象りて、之を畫成せるもの、〇(日月)の如き即ち是なり、會意とは、人意を會合し、比類合韻、以て指撝を見はするの、人言を信と爲し、止戈を武と爲すか如きの類、即ち是なり、轉注とは、類を建て首を一にし、文意相受け、左右相注するもの、考老の如き即ち是なり、處事とは、視て聽るべく、察して意を見らるべきもの、上下本末等の如き即ち是なり、假借とは、一字兩用、聲に依りて事を託するもの、令長の類是なり、諧聲とは、即ち形聲にして、事を以て名と爲し聲を取りて相成するもの、江河の水を以て形と爲し、工可を以て聲と爲すか如きの類、即ち是なり、而して支那文字の多くは此諧聲より成る。

以上の六分類は、支那立字の根本として四萬有餘の文字を構成する所なり、其書跡は代を追ふて變改し、古文、奇字、篆書、隸書、繆篆、蟲書等の異跡あるに及べり、篆に大篆あり、小篆あり、大篆は周の宣王の太史籀の作る所にして、戰國以來、嘗之を用ひたり、小篆と隸書とは、秦の始皇の時、程邈の作る所、古文は蝌斗の文字にして、孔子の壁中より出てしもの、奇字は即ち古文にして、跡を異にするものなり、而して繆篆は、其文屈曲纏繞、印章を摹するに用ひ、蟲書は蟲鳥の形を爲すものにして、幡信に書するに用ひたり、後世書に篆、隸、楷、行、草、宋の六跡あり、而して楷、行、草の三跡、最も世に行はる。

第三章 唐虞三代の沿革、及び開化一斑

吾人は既に前章に於て、書契起源の黄帝の世に在ることを叙したり、今又書契以後に係る、王朝の沿革を概叙して、開化の次第を窺はざるべからず。

黄帝の後に君牧の位に居りし者を、顓頊、高辛と曰ふ、高辛の子を帝堯と爲す、其の天下を有つたを陶唐と曰ふ、堯の化、親族百姓に及ぶ、是の時に當りて、洪荒朴略の風、漸く變じて、文明の化、正に開け、昔日の穴居野處せしもの、則ち宮室あり、汗樽瓢飲せしもの、則ち器用あり、皮革を以て跡を蔽ひしもの、則ち衣裳あり、而して其生民は既に游牧遷徙の故習を出て、土着耕食の域に入りしか故に、政府には則ち日月星辰の度を推測して、民に春秋收種の時を教ふるの言あり、

是に於てか、人民日に播殖して、泰平の治、大に起る、時に民間に舜と曰ふ者あり、堯其の仁徳あるを聞き、舉て其才を試み、後堯に天下を禪る、舜の徳號を有虞と云ふ、有虞氏亦其徳を明かにして、善才を舉用し姦人を遠けしかば、四岳百官、各其職を盡して、治化益々揚れり、是の時、既に典樂の職あり、音樂を以て子弟を教育せしか如き、尤も後世の欽羨して措く能はざる方なりとす。右堯舜の時を唐虞の世と云ふ、唐虞の後を三代と爲す、三代とは、夏殷周の三朝を云ふ、夏の始祖を禹と爲す、禹嘗て有虞の時に當り、天下の洪水に遭ひ、山岳を經營し、水土を平けて功あり、即ち其國土を分て九州と爲し、又其土地を三等に區別して、貢租の制を定めたり、然れども天下方さに洪水の後を承けたれば、務めて生民を安樂撫育して、勤儉忠厚の政を行ひ、學校を設けて倫理を明かにし、巡狩、朝會を爲して、立極垂統の實を舉げたりしかば、利用厚生、文明の具、漸くに具り、制度文物も亦之に伴ひて、少からざる進歩發達の途に向へり、夫の尙書典謨の文の如きは、蓋し全く當時史臣の手に成りしものなり、此の如くにして、禹の子孫、國を享くること十七君、四百五十八年にして、殷の世と爲る、殷の政は、質樸にして敬を尙ひしか、其賢者には伊尹、咎單、伊陟、傅説、微子、微仲、比干、箕子、膠鬲の徒ありて、前後に輩出し、以て其治化を賛けたり、特に箕子の洪範九疇を述へしか如き、洵に彝倫の叙つる所にして、最も當時の政教を窺ふに足る、殷祚二

夏...
殷...
周...

十八君、六百四十四年にして、亦革命に遭ひ、周の武王、兵戈を以て其國を奪ふ、武王弟あり周公旦と云ふ、賢明智略に富む、兄を佐けて家國を建立し、夙夜王事に勤勞して敢て懈らず、王崩するに及び、嗣王を輔佐し、夏殷の二代に鑑みて、一代の制度を定め、禮文を起して大に政徳を修めたり、蓋し夏は忠を以て國を立て、殷は質を尙ひたりしか故に、周は則ち二者に鑑みて、更に文を以て一代の國是と爲し、其の生民に教へし所以のもの、亦二に禮文華美の上に在りて、揖讓進退、威儀動作に至るまで、皆禮法度數の範圍を出ること能はず、是に於て古來忠質を以て養成し來りたる精神上に、更に美華を開て、文學の美、亦斐然として起り、郁々たる文章詩歌、朝野に遍滿し、名賢の士、隨て前後に輩出し、武王十人の治臣より、史佚、鬻熊、召虎、方叔、尹吉甫の倫の如き、皆以て一代の妙選たるべき者なり、故に唐虞三代の際に於て、文物典章の美を言ふもの、必らず最後の王朝を以て、其の集成を稱す。

此の如く太古醇樸の風、代を以て遷り世を追ふて變せしもの、蓋し社會の進化に於て、必らず此の如くならざるべからずと雖も、文明の弊は、毎に流れて華奢輕窳に陥り、華奢輕窳、毎に亂の端を爲す、今夫唐虞聖堯の民は、姑らく論せず、夏殷の民の忠厚質樸なる、其俗、鬼神を敬して賢者を尙ひ、以て其業に勵む、並に是勤儉力行の民なり、周に及びて、繁文縟禮を以て剛毅果敢の民を馴

擾し、強剛制し難きの氣を去りて、優柔和易の俗と爲せり、而して華奢輕寃、積衰柔弱の風、早く既に周室開國の始に於て定る所あり、然れども一長一短、弊の出つる所は、即ち美の存する所にし、其文學上に於けるや、彫藻優雅、頓に長足の進歩を爲せしこと、復た夏殷の比にあらす、故に蘇轍亦嘗て之を論して云く「詩之寬緩而和柔、書之委曲而繁重者、皆周也、而商人之詩、駁發而嚴厲、其書簡潔而明肅、以爲商人之風俗」と是正に其文學の異同を稱するものにして、並に以て其民性、風俗を察するに足る。

然らば則ち文明の華奢と相待ち、華奢の靡麗柔弱と相關する所以、世變を觀るの士、當さに以て心を留むべし、而して操觚翰墨の士、亦以て輕浮文學の逕路を杜絶して、大に斯文の光輝を發揚することを思はざるべからず。

第四章 周代の學制

支那の上古に於ける、學校の組織制度は、今を得て詳にし難しと雖も、虞舜の時には、既に學校の設けありたり、其名を庠と言ふ、而して大學を上庠と爲し、小學を下庠と爲せり、夏には庠と云ひて、大學を東庠と爲し、小學を小庠と爲し、郷學を敝と云へり、商には學と稱して、大學を右學と

爲し、小學を左學と爲し、郷學を序と云へり、周に及びて、之を兼て更に四學を並建す、是に於て、虞庠北に在り、夏序東に在り、商學西に在り、而して當代の學は、南而して其の中央に在り、他の三學は之を環る、之を命して膠と云ひ、又た辟雍、成均、澤宮とも云へり、故に周人の學校は、有虞氏以來の學制を案して、修めて之を兼用せしもの外ならざるなり。

周人は上記の如き學校を設けて、庶老を虞庠に養ひ、國老を夏序に養へり、而して商校にては樂祖を祭り、澤宮にては、貢士を擇んで、大射の禮を行ふこととし、又國に出征、受賑、獻賦等の大事あるときには、必らず此に於て之を執行せり、蓋は大學の制にして、王世子、王子、群后の世子、郷大夫元士の嫡子、及び凡國の俊秀皆之に入ることを得たり、而して師氏之に教ふるに、三徳、三行を以てし、保氏は養ふに道を以てして、之に六藝、六儀を教へたり、三徳とは、至徳、敏徳、孝徳にして、至徳を以て道の本と爲し、敏徳を以て行の本と爲し、孝徳を以て逆惡を知ると爲せり、三行とは孝、友、順の三行にして、孝行は以て父母を親み、友行は以て賢良を尊ひ、順行は以て師長に事るを云へり、六藝とは、禮、樂、射、馭、書、數にして、六儀とは祭祀、賓客、朝廷、喪紀、軍旅、車馬の容を云へり、其の國學に於て子弟を教へし所以の重なるもの此の如し。

又諸侯の國にては、大抵當代の學を立て、稍其規模を損減せしか如し、而して其制、水を環ら

して半壁の狀の如くにせしか故に、之を泮宮と稱せり、又郷州に在りては、二十五家を閭と爲して、閭に塾あり、五百家を黨と爲して、黨に庠あり、一萬二千五百家を州と爲して、州に序あり、皆各其子弟を萃めて之を教育せり、而して之か師と爲りて其任に當りし者は、大夫の既に致仕して家に歸老せるものなりしか故に、德行、道藝より、朝廷、官職の事に至るまで、皆其身を以て之か模範と爲りて、之を嚮陶せしなり、是其郷州に於ける小學制度の大槓なり。

此の如くにして、其の子弟を教ふるに、四時同一の業を以てするにあらざりて、各其時期を以て學ぶ所を異にせり、故に春は誦し夏は終して、秋には禮を學び冬には書を讀ましめたりと云ふ、而して學に就くの年齢は、八歳にして始めて小學に入りて、室家長幼、洒掃應對の節を知り、二十にして冠して大學に入り、先聖の禮樂を學び、朝廷、君臣、上下の等を知り、七年にして小成し、九年にして大成して、始めて仕途に上ることを得たり、蓋當時未だ一科専門の學あらざり、士は全才を尙ひて、實才實學を務めたりしか故に、上は智仁聖義、中和の士より、下は一技一曲の才に至るまで、養はざる所なく、其の朝夕の聞見して服習せし所、一として當時の家國を治むる所以にあらざるはなく、其才行皆己に素定して用るに足るあり、故に一旦取りて以て、公卿大夫、百執事の選に備ふるときは、更に復た聞習することを待たずして、直に其職に中ることを得たり、意ふに當時政

治の隆なる、賢者は其位を得て、不賢者は自ら其下に在り、四海一堂、上下相犯さざるに出つるも、蓋亦未だ曾て學制の能く當時の社會に適合したるものあるに由らすんはあらず、然らすんは、天下、何の世にか奇才なからむ、而して後世蓬蒿の下、寧ろ偃蹇抑鬱の士を窮死せしむるあるを聞くも、曾て其才を盡して其器を成すを見ざるは、未だ曾て其學制の社會人俗に適合せざるものあるに職由せずんはあらず、若夫讀書講談、徒に空理を説き、幽玄に入りて、龍辯誇博の資と爲し、口舌、用ひ盡して、事功、却て雲煙の如きものは、抑後世の事にして、蓋亦古制にあらざるなり、然りと雖も、古今人情時俗を一にせず、古制必らずしも今に適せず、今制、亦豈に古時に優る所なからむや、要は人才を抑死せしめずんは、則ち學校の政舉ると云ふべし。

第五章 諸子時代以前の文學

支那上古の文學に於て、如何なる種類の文學、先つ其端を發せしか、頗る明徴を考へ難しと雖も、凡各國の文學に於て、必らず韻文先つ起りて、而して後に散文、漸く發達の途に上るを觀れば、支那の文學も、亦必らず此逕路を通過せしとなるべし、然れ共確實なる上古の文籍の今猶存在するもの、詩書之二書を除くときは、殆んど絶無に屬すれば、果して如何なる、詩歌、俚謠の先つ當時の

粗樸なる口角より迸出せしや、吾人は殆んど其の考ふへからざるを悲む。
 帝王世紀に載する所の瓊瓊歌、尙書大傳の卿雲歌の如き、皆唐虞時代の作と稱すれども、用字、着筆、頗る古意に似す、意ふに必らず後人の補作に係るものならむ、然れども舜典に『詩言、志、歌、永言、聲、依、永、律、和、聲』と云ふを見れば、少くとも此時代以前に在りて、既に詩歌の發達を認めざるへからず、故に瓊瓊、康衢、卿雲等の諸歌の如きも、或は當時此種の歌謠ありて、口誦傳播せしを、後人始めて之を文字に上せしものか、又或は古意を取りて新辭を作り、以て亡逸を補ひしものか、二者或は其一に居らむ、要するに唐虞時代の作にあらざること、殆んど疑ふへからざるに似たり。

上古の歌謠の今に存して最も確實なるものを、商頌五篇と爲す五篇共に皆殷代の作にして、四言句より成れる神歌なり、其の篇目を、那、烈祖、玄鳥、長發、殷武と爲す、那は其先祖成湯を祀るに用ひ、烈祖は湯の玄孫たる中宗を祀るに用ひ、玄鳥と殷武とは又其玄孫たる高宗を祀るに用ひ、長發は天を祭る(大禘)に用ひたる樂歌なり、五篇皆辭義嚴肅にして清峻なり、今下に掲ぐる所は、乃ち其の殷武篇なり、意ふに、此篇時代に於て、當さに諸篇の後に在るへきも、其の詞義の明確なるに至りては、詢に古代の神歌として、最も生色あるものと云ふべし。

據彼殷武、舊伐、荆楚、深入、其阻、哀荆之旅、有、截其所、湯孫之緒、維女荆楚、居國南鄉、昔有成湯、自、彼氏羌、莫、敢不、來享、莫、敢不、來王、曰商是常、天命多辟、設、都于禹之績、歲事來辟、勿予禍適、稼穡匪、懈、天命降監、下民有、嚴、不、僭不、濫、不、敢怠遑、命、于下國、封建厥福、商邑翼翼、四方之極、赫々厥聲、濯々厥靈、壽考且寧、以保、我後生、陟、彼景山、松柏九々、是斷是遷、方剛是虔、松栢有、榘、旅楨有、閑、寢成孔安、

周代に於ける詩歌の美なるもの、一にして足らず、詩三百篇の如き、概ね皆此時代の作に係るものにして、其句法篇幅は、長短更に定なしと雖も、大要四言句を以て、當時の體と稱するを得へし、而して其詞の溫柔敦厚なるは、自ら周詩の特色たる所にして、後世詩を以て教を立つるの意、蓋亦此に原本するならむ。

詩に風、雅、頌の三體あり、雅に又大雅、少雅の別あり、其說第貳編に出つ、今下に掲ぐる所は、即ち大雅、文王篇なり、此篇文王能く天の命を受けて周邦を建立せしを言へるものにして、蓋亦當時の詩人の之を歌詞に作りて、其事を述へしものなり、意ふに、此篇の成る、當さに周室成功の初に在るへし、而して其の辭の雍々正大なる、讀者當さに三復して之を知るへし。

文王在上、於昭、于、天、周雖、舊邦、其命維新、有周不、顯、帝命不、時、文王陟、降、在、帝左右、

々文王、令聞不已、陳錫哉周侯、文王孫子、文王孫子、本支百世、凡周之士、不顯亦世、世之不顯、厥猶翼翼、思皇多士、生此王國、王國克生、維周之禎、濟々多士、文王以寧、穆々文王、於緝熙敬止、假哉天命有商孫子、商之孫子、其麗不億、上帝既命、侯于周服、侯服于周、天命靡常、殷士膚敏、裸將于京、厥作裸將、常服黼黻、王之蓋臣、無念爾祖、無念爾祖、聿脩厥德、永言配命、自求多福、殷之未與師、克配上帝、宜鑒于殷、職命不易、命之不易、無遏爾躬、宣昭義問、有虞殷自天、上天之載、無聲無臭、儀刑文王、萬邦作孚、

讀者試に上段掲出の商頌を取りて此篇に比較せば則ち知らむ周詩の寛緩にして和柔なると商詩の駢發にして嚴厲なると蘇轍の言果して人を欺かざるを、周頌の作は、當きに周室成功の後、即ち周公攝政、成王即位の初に在るへし、是の時に當り、天下方に太平を致して、周室の德聲、漸く洽く、是に於てか頌聲即ち作ころあり、清廟、維清、維天之命、以下の諸篇、蓋實に當時の作に係るものなり、今下に掲ぐる所は、其の清廟篇にして、文王を祀るの神歌なり。

於穆清廟、肅雝顯相、濟々多士、秉文之德、對越在天、駿奔走在廟、不顯不承、無射於人斯、

下に掲ぐる所は、國風、野有死麕篇なり、此篇の作も、亦當きに周初に在るへし、其本事は、蓋紂

の世に當り、天下大に亂れて、彊暴相凌ぎ、淫風、俗を成せども、唯二南の地は、文王の化を被ること特に深きか故に、亂世に當ると雖も、猶能く無禮を惡めりと云ふ、此篇の意、蓋貞女無禮を理むの辭たるなり、

野有死麕、白茅包之、有女懷春、吉士誘之、林有樛櫟、野有死鹿、白茅純束、有女如王、舒而脫兮、無感我帟兮、無使尨也吠、

以上例擧せし所の諸作、皆春秋戰國以前の作に係るものなり、周詩の美なるもの、詩三百篇の外、猶數多の逸詩あり、殊に岐陽の石鼓詩の如きは、論者以て宣王中興の際の作に係ると稱す、其文今悉く讀むべからずと雖も、必らず文學上雄大の光價を有するものなり、之を要するに「治世之音、安以樂、其政和、亂世之音、怨以怒、其政乖、亡國之音、哀以思、其民困、」讀者更に詩三百篇を把りて一再翫せば、則ち亦此に發する所多からむ。

諸子時代以前に於ける韻文の一斑は、上述の如し、而して其の散文に在りては、往古嘗て三墳五典八索九丘の書あり、春秋の時に、楚の左史倚相と云ふ者、猶能く之を讀めりと稱すれども、其書今復た存せず、說者云ふ、三墳、五典は三皇五帝の書にして、八索、九丘は八卦と九州の事を紀せしものなりと、其說亦多く疑ふべきに似たり、今存する所の最古の書籍を以てすれば、蓋尙書に如く

ものなければ、吾人は直に尙書本文を擧げて、其古を思はざるべからず。
尙書の事は第貳編に出れば、爰には略して云はず、唯其文の最古なるものを典謨の文と爲す、二典、三謨、禹貢等の諸篇の如きは、蓋夏史の手に成るものにて、其辭氣の古雅にして麗々たる、洵に上代の文たるを知る、禹貢に至りては、紀律森然として條理見るべく、百代叙述の文、蓋昔此より出づ、周禮、殷盤の文は、信屈聱牙なりと雖も、之を虞夏に視れば、時代既に下りて、渾々瀟々の氣更に古に異なるものあるを見る、其他の諸篇、皆商周間の書にして、假令眞偽相混するにもせよ、古を窺ふに於ては、最も寶愛すべきの金鍵なりとす、下に出す所は「大禹謨」の末節なり「大禹謨」は虞史の述ふる所にして其の君臣間の情意と嘉言善政とを叙するものなり、

正月朔旦、受命于神宗、率百官、若帝之初、帝曰、咨禹惟時、有苗弗率、汝徂征、禹乃會群后、誓于師、曰濟々有衆、咸聽朕命、盡茲有苗、昏迷不恭、侮慢自賢、反道敗德、君子在野、小人
在位、民棄不保、天降之咎、肆予以爾衆士、奉辭伐罪、爾尚一乃心力、其克有勳、三旬、苗
民逆命、益贊于禹、曰、惟德動天、無遠弗届、滿招損、謙受益、時乃天道、帝初于歷山、
往于田、日號泣于旻天、于父母、引膠祗載、見替腹、變々齊慄、替亦允若、至誠感神、矧茲有
苗、禹拜昌言、曰兪、班師振旅、帝乃誕敷文德、舞于羽于兩階、七旬有苗格、

第貳篇 諸子時代

第壹章 總論

此編に於て諸子時代と稱する時期は、歴史上にて、普通に春秋戰國と稱する際より、秦の末に至る凡五百七十餘年間の文學を總稱するものなり、蓋歴代の文士、諸子を以て目すべきもの、特に此の時代にのみ限るべからず、清儒の所謂六經以外に説を立つる者は、皆諸子なりと雖も、當時老莊孟荀以下の諸傑、各、其流派を爲して、互に相辯難攻撃し、以て大に其氣節を吐きしかば、諸子の精華全く此の時代に鍾まれるの觀あり、故に吾人は姑らく諸子時代を以て之を稱し、且つ聊か當時の社會一斑を概舉して、諸子百家の斯くの如く、多く踵を接して、一時に輩出せし所以を叙せむと欲す。

周室第十三世の君主を平王と稱す、其の前世幽王、犬戎の難に遭ふて、驪山の下に弑せらる、平王其變に堪へずして都を東に遷し、因て東周と號せらる、其の四十九年は、魯の隱公の攝位元年なり、孔子春秋を修めて筆を此に始む、是の時に當りて、周室の威令復た行はれずして、王迹地を掃ひ、列國各、其政令法度を異にし、或は詐力を以て仁義を假る者あり、或は甲兵を起して、人の地を奪

諸子時代 總論 (二八)

ふ者ありて、所在に多く、陵夷逡巡して、威烈王の際に至りては、勢々浪々として、復た云ふに忍
 ひず、臣を以て君を伐つ者あるも、以て異と爲さず、子にして父を弑する者あるも、以て虐と爲さ
 ず、天子は徒に空名を諸侯の上に建て、以て九鼎の主と爲れるも、統一の實、絶ゆること既に久し
 く、彼の三晋の強梁にして其君を弁髦にし、其國を瓜分せしか如き、是正さに天誅の宜しく加ふ
 く、王法の決して貸さざるべき所なるに、周の天子は之を討すること能はざるのみならず、又命し
 て諸侯と爲し、以て之を寵秩せり、是所謂門を開て盜を揖するものにして、綱紀の壞亂せる、蓋周室亦
 自ら之を始めたるなり、是の時に當りて齊楚燕趙韓魏の六國並ひ峙ちて其雄を稱し、攻伐呑噬、互に
 其機を窺ふ、而して秦は夷狄として諸侯に排斥せられて、中國の會盟に與ることを得ず、孝公憤を
 發して其政度を修め、商君之を佐けて、重刑峻法、以て其俗を一變し、仁義、用ゐず、禍詐相商ふ
 りて、其民既に戰鬪攘奪の事に狂る、是に於てか、天下の形勢、亦大に一變し、山東山西の戰士、
 亦雲の如くに起りて、電光の舌を揮ひ、波濤の辯を馳せて、今日は合縱を説て秦を孤にし、明日は
 連衡を説て以て六國を臣とせんとなす、而して七國の諸侯、既に遊談徒歩の口舌に醜弄せらるること
 久しく、秦勢獨り日に強大にして六國益々振はす、周祀既に絶え、六王亦畢りて四海竟に一と爲る、
 然れども秦詐亦久しからず、其の以て子孫帝王萬世の業と爲せしもの、一朝にして、内墜近親、馬

鹿の臣に紊亂せられ、寇盜亦四方に起りて、中原復た争鹿の場と爲り、一轉して威陽三月の煙と爲
 りて、帝業全く陸沈せり、此間の歲月、短しと爲さず、而して始終之を貫きしものは、興亡攘奪の
 事に過ぎず、是を此時代に於ける世變の大梗と爲す、而して當代の文學は、全く此の世變の間に發
 達して、其形質姿態を爲せしものなり。

以上概念せし所、固より當時の社會一斑に過ぎず、而して其の文學は、此の社會の機運と相待て發
 達し、互に因と爲り果と爲りて、社會の活動を致せしものなれば、其變遷も亦自ら社會の變遷と相
 伴はざるを得ず、唯之を一般の文學の多く世の昇平と相伴ふて發達するに比すれば、頗る奇異の現
 象たるに似たり、然れども活動の社會は、能く活潑の文學を産出するものなれば、其文學の活潑な
 るは、畢竟當時の社會の活動せるに歸せざるべからず、今其の變遷の序を追ひ、分て三期と爲すを
 得へし、第一期は春秋の際にして、當時周室の制度、既に破壊に屬せしと雖ども、古聖先王の遺範
 軌轍、猶ほ存するものありて、其の賢能長者たる者、亦能く彬彬として博雅君子の風あり、且つ當
 時列國の會同朝盟に於て、使臣の來往聘問する者必らず辭令を善くして侮を禦き、古詩を誦して其
 意を示し、以て術を樽俎の間に析り、因りて國威をして九鼎太呂より重からしむるを、第一義と爲
 せし類、文學を以て、之を大にしては國家を輔弼し、之を小にしては以て交際之具と爲せしに似

たり、殊に鄒の子産の辭令に於ける、吳の季札の博雅に於けるか如き、或は婉曲を以て其才を顯はし、或は明晰を以て其長を見せり、其他衛の蘧伯玉、晋の趙孟、叔向、齊の管仲、晏嬰等の倫の如き、皆能く中に得る所ありて事に應じ、以て其位に在りて其政を謀り、下民を率ゐて其の向ふ所を知らしめたり、而して其文學、猶能く揖讓迫らざるの概あり、是の時に當りて、孔子は聖人の徳を懷き、龍鳳の章を含みて、其位を得ず、空しく世道の陵夷して、綱紀の頽敗せるを嘆し、文武周公の舊制を想望して、一意、偏に之を尙慕し、其の既に絶えたるを繼ぎ、廢れたるを擧げて、周室盛時の舊觀に復せしめんことを欲せり、則ち前聖の遺範を補修し、其源を開ひて其流を疏通し、天下を周遊して一世の木鐸と爲り、以て千古儒學の洪基を立てたり、時に楚に老子あり、亦國家の日に混亂して、大道の益、壅塞するを見て、慨然として遺世の志あり、其意に以爲らく天下の日に紊亂せるは、畢竟世網の密にして、禮法度數の繁縟なるか爲めなり、蓋太古の俗、醇樸にして、人心亦純一なりしか故に、大道自然に行はれて、群類無爲の境に逍遙し、爭奪生せず、機心起らず、以て各其生を盡くすことを得たり、則ち天下の亂端を塞ぎ、禍詐陰險の源を杜絶せむには、虛無を旨として、嬰兒の畜に復歸するに如かすと、遂に書五千餘言を著はす、而して其說亦當時の人心を聳動して、之に歸向する者、甚多く、是に於てか、始て道家なるものありて、儒家と對立して、一は反面

より社會を救濟せんとし、一は正面より世道を匡正せんと欲せり、故に更に之れを極言すれば、一は飽迄世間に在りて世間を謀り、一は出世間を以て世間を謀りし者と云ふべし、此の如く其の目的物たるものは、同じく世間に存せしにも拘らず、其の執りし所の方法に至りては、全く反對の地に在りしか故に、末流の徒、漸く起りて、流派軋轢の源を開くに及べり、而して後世諸子百家の原本する所、曾て一家の系統を承けざる者なく、其の儒を以て父とするにあらざる者は、必らず道を以て母と爲し、道にあらざる儒にあらざる者は、亦必らず道儒の間に生じたる雜種兒たるに過ぎず、是孔老二聖の道儒の開山たると同時に、諸子百家の大祖たる所以なりとす、然れども二聖の當時に在りては、未だ全く流派の組織を形成するに及はず、隨て第二期の爛口焦舌、互に辯難攻讞、駁破排闢して、自他の派別を嚴にせしか如くならず、孔子の嘗て禮を老子に問ひしか如き、則ち他山の石、以て其壁を琢きしを見るべし、是二聖の至境、安詳自在にして、些個の芥蒂なきに由るべしと雖も、亦未だ曾て當時の社會人心の更に其の甚しきに達せざるものありしに歸せすんはあらず、故に此期の文辭を見るに、憂世惻怛の言に乏しからざるも、沈痛悲憤の文少く、氣鋭の雄偉光明なるもの多きも、激楚號哭の詞に富まず、之を要するに髣髴の間に於て、猶能く三代揖讓の遺意を想見するに足るもの、當に以て第一期文學の特色と云ふべし。

第二期は、重に戰國の際にして、此時期に在りては、全く諸子流派の組織を形成し、齊魯の郷に儒家多く、荆楚の地に道家多し、是孔老二聖の流風遺徳、其の然るを期せずして、自ら其本土に存し、因て後起の俊傑を得て、益々其の派別を嚴にせしか爲めなり、此時に當りて、儒家に孟軻、荀卿ありて、或は仁義を敷衍し、或は禮樂を詳論し、又或は人性の善惡を辨して、大に儒學の精華を發揮せり、而して道家に於ては、莊周、列禦寇の徒出て、老子の意を繼ぎ、更に恍洋自恣、以て己に適するの言を馳せて、虛無幽言の旨を闡明せり、蓋道に莊列あり、儒に孟荀ありて、孔老未發の緒論を繼ぎ、其の邊幅長短を裁し、且つ之に施すに潤色を以てし、西派の組織全く成る、而して其の才學長短を比較すれば、莊の才は孟に過ぎて、荀の學は列を凌げり、然れども孟の氣は莊の匹にあらす、列の意は荀の及ぶ能はざる所なり、而して其の文辭に至りては、南華第一、七篇第三而して列と荀とは又其次なり、之を要するに四子の道儒に於ける、嚴として中興の祖たるべき地位を有するものなり、其他、名法楊墨等の諸家ありて、五角林立して、亦思想界に一戰國を立てたり、而して法家の雄を申不害、韓非の徒と爲し、世呼んで申韓の學と云ふ、其學法術峻刑を以て民を治むるの本と爲すか故に、刻薄寡恩の譏を免るへからざるも、民をして法を畏れて罪を犯さしめんと欲するの意、具さに以て見るを得べし、名家には惠施、尹文子、公孫龍等あり、其學名實相實むるを

主とす、其意に以爲らく名は實の實なるか故に、名の在る所、必らず其實を以て之を賣めざるべからずと、因りて其學の傾向する所、名實異同の穿鑿に涉り、龍辯堅白の辭に至りて、其弊己に極る名家の學、本と法家と別派なり、然れども世多く刑名を以て之を連呼するは、蓋亦互ひに相近き所あれはなり、此の如く社會の狀況、日に益々策々として、法治刑名の域に進行するに及び、一方に於ては、人類相愛の理、全く絶えんとするを憂ふ者あり、出て、兼愛の説を主張すれば、又其説に頓抗して自利の主義を立つる者あり、楊朱、墨翟即ち是なり、而して楊の學は、一身の爲めにするを以て主義とせるものなるか故に、一毛髮を抜めて天下を利することをも之を爲さず、墨は兼愛を主義とするか故に、苟も天下を利するに足らば、頂を摩して踵に至るも亦將に之を爲さむとせり、二者の説の極端なること固より論なし、然れども其説の一時に盛なりしことは、孟軻の所謂楊墨の害は禽獸毒蛇の害よりも甚しとて、之を開きしを見ても、以て其大較を知るを得べし、又兵家あり、孫武、吳起等之れか魁たり、二人同じく當時の諸侯に軍師として、屢々三軍を總帥して、功を攻城野戰に立て、以て其の控御機變の術を究明し、竟に一家を爲せり、尙此の外に騷人あり、屈平、宋玉の徒を以て開山と爲す、屈宋同じく楚國に生れて、辭章詩賦の才に富み、比興惻怛、變風變雅の遺意を得て、巧に賦章を作爲し、以て一種の新體辭を出せり、所謂楚辭即ち是なり、而して當時

代に於ける純然たる文學の新現象としては、必らず重を之に置かざるべからず。以上列舉せし所の諸家、皆其説の主持者たるものにして、各、旗幟を一方に樹て、天下に呼號せり、而して末流附隸の徒、亦紛々として天下に遍く、其の聞く所を是とし、其の信する所を尊て、互に辨難改擧し、他説を開き、異論を排して、相壓せんを欲し、瓜蔓繁衍、天下を通して諸子流派の組織を形成し、畛域盡然として復た越ゆべからず、所謂諸子百家九流の別なるもの即ち是なり、然れども其の學說文辭の文學史上に記載して價值あるものに至りては、百家九流、豈に悉く然りと爲さんや、之を要するに、常期の文學は、雜駁爛熳にして、等しく混戰紛爭の中に在るものと云はざるべからず、之を譬ふるに、第一期の文學は、風後半開の花の如く、花瓣間、傷害せらるゝものありと雖ども、猶未だ春光の老ひざるものあり、當期の文學は雨中春樹の爛熳たるか如く、濃豔露重くして、披拂參差の概なきにあらざるも、凋落眼に在りて、明朝の暎を貽とせざるを得ず、然れども花を賞するは落花の前を好しとす、蓋其の落花を賞するにあらざして、意は春光寂寞人事流鶯、感慨多少の間に在るなり、然らば則ち文を品するもの、亦豈爛熟頹唐の境を以て佳と爲さざらむや、其の感憤憤悽の韻、慷慨激烈の辭は、以て當時社會の荒涼迴暮に感すべく、莊列の曠恣、孟荀の齊整より、墨子の譎怪、屈平、宋玉の哀怨號愴、一として爛熟頹唐の境に出て、限無きの神趣を合

まざるはなし、是を第二期文學の大較と爲す。

第三期は、秦代の文學にして、其の觀るに足るべきものは、泰山、瑯琊以下の刻石文あるに過ぎず、蓋秦は、文學上に一大厄難を與へたるを以て有名なる彼の焚書坑儒の事ありて、文學の種子を殄滅し、且つ其の祚運も亦永續せず、隨て一新文學の起るべき餘地を遺さざりしなり、後世先秦の文學と稱するは、多くは吾人の所謂第二期文學を稱するものなり、故に若し之を極言せんには、秦は六國を殄滅せしと同時に、六國の文學を殄滅せしものと云ふべし、蓋新鮮なる文學は、新鮮なる治世の原野に於て收獲するを得べきか故に、秦代一統の後にして、焚書坑儒の厄を見ずして、益々周季に發達せし文學の根本を培養して、其の枝葉を扶持し、以て其亂世的文學を變して、治世的文學と爲したらんには、猶其の政治上に古來未だ曾て適用せざりし郡縣の新制度を施行して、天下の耳目を一新したるが如く、文學上に於ても亦必らず一大雄偉の新現象を生出して、古今に照映せしこと、決して疑ふべからず、惜むべきは、事此に出でずして、適、發達の運に向ひし文學も、未だ全く老衰の域に入らざるに、中道にして疾風枝を折り、暴雨花を落して、天折零碎に歸せしめたり、之を譬ふるに血氣方に剛壯なる青年有爲の男兒か、一朝疾なくして不虞の災難に斃れたるか如く、天命未だ竭きざるに、人事既に革まれるの觀ありて、其の愛惜すべきに足ること、更に甚しきものあり、

嗚呼秦は特り天下の黔首を鋒鏑の下に殺せしのみならず、亦道好個の文學兒を、黒烟猛火の中に焚燒し盡せるなり、應報必らずしも遠きにわらず、其の所謂千萬世の業を遂げ得ざりしこと、豈亦偶然ならむや、是を第三期の大較と爲す、而して當期の最も記憶に存すべきものは、唯空しく焚書坑儒の一事に在るのみ。

右列叙せし所のもの、略々當代文學の傾向を示せしに似たり、而して當時の社會は、何如にして上記の諸子文學を現出せしめたるか、是正さに讀者の喜んで聞かんと欲する所なるべし、蓋何の社會と何の時代とを論せず、文學の起るは、決して當時の社會を離れて單行するものにわらず、其の社會の現象は、即ち其の文學の影子と爲りて之に照映するものなれば、當代に於ける諸子文學の發達も、亦其の社會の必要と狀勢とに應じて發生したる一現象に過ぎざるなり、今其の原因の重なるものを舉れば、左の五點に歸約せらるゝに似たり。

(一) 禮法儀式の崩壞せしこと。既に前に於て叙述したるか如く、周室の盛時に當りては、大小の綱紀悉く張りて、禮義三百、威儀三千以て社會の秩序安寧を維持したり、此の如く法網森嚴にして、繁文縟禮、舉足下足、皆節度あるの世に在りては、人心の自由次第に萎縮し、頭を畏れ尾を顧みて、局促たる摸型の中に制限せられ、曾て活動雄邁の氣を起すこと能はざるに至るは、自然の傾向にして、古今

東西の史上に於て其例を見るに難からず、近くは我が舊幕の末路の如き、即ち是なり、然るに、一たび社會の秩序破壞して、綱紀禮法、其紐を解くに及んては、其の眠れるものにて覺め、其の靜著せるものにて活動し來りて、忽ち愉快自由の境界に逍遙するを得、隨て思想言論の自由なる、思ふて言ふべからざる所なく、言て制縛する者あらず、恰も韜を脱するの鷹の飛翔自在、空に躍ち野に飛ぶか如く、其の俊氣健力、復た宿昔在韜の比にあらず、是周季社會の變動に遭ふて、其の文學の一頓進せし所以の第一原因なり。

(二) 救世濟民の急なりしこと。周網既に解けて社會に一王の制裁なく、奸豪譎越、分れて十二列國と爲り、一變して七雄の割據と爲るに及び、朝暮に聞く所は矢石干戈の音、見る所は伏屍流血の慘のみ、而して生民の塗炭に苦むこと亦既に久しく、是に於てか、志士仁人は生民を水火の中に救ふて、其の倒に懸るを解かんとせり、而して其方法としては、或は辯舌を掉ひ、或は著書を以てして、盛に救世濟民の意を述べたり、孔老孟荀韓墨の學、一として亦此意に出でざるなし、而して其の所見の同じからざる、均しく濟世の意に出でても、其の方便を異にして、竟に百家流派の別を生ぜり、是周末文學進歩の第二原因なり。

(三) 人才登用の容易なりしこと。上述の如く救世濟民の急なると同時に、當時の諸侯中に於ても、

亦能く民を愛し惠政を施す者は、賢君明主と稱せられて、人心之に歸服し隨て疆土亦増加するの觀ありしか故に、各國亦盛に賢才異能の士を延て、其政を問ひ、其祿位を與へて、之を優遇せり、是に於てか、賢才異能の士、利器を抱て、空しく社會の下層に沈淪して、曾て知己なきを嘆せし者も、一躍して或は一國の卿大夫たるを得、或は諸侯の賓師たることを得て、其の懷抱する所を行ひしかは、一才一藝に長する者は、以て身を青雲に致すの資と爲し、今日は匹夫徒談の人たるも、明日は紫綬を繫ひ、金印を帯ひて、志を駟馬輕裘に壯んにすること亦難きにあらざ、而して爵祿名位を欲するの人情は、益々才藝に名あらむと欲し、國を富まし土を拓かんと欲するの君主は、愈々人才を得んことを務めて、二者の間に於て、既に需用、供給の權衡を得たりしか故に、學術才藝、依りて亦發達せり、是文學進歩の第三原因なり。

(四)列國の相對峙せしこと。列國の相對峙して互に干戈を以て疆場を相周旋せしと同時に、其器械兵具の精粗、財貨の聚散より、邦治の良否、人才の多寡に至るまで、互に競争して相下らざらむとし、一方に於て、寶玉の車の前後十二乗を照らすものを有すと誇れば、他方に於ては、四疆を守て敵兵を千里の外に卻くるの忠臣ありと答へしか如き、皆一として競争を事とせざるはなく、是に於てか、其の文學に於けるも、亦謙らず知らずの間に相競進せしこと、猶彼の希臘時代の列國間に

於ける文學の競争の如く、大に其の進歩發達を助けたり、且つ當時天下一君の時にあらざりしか故に、士の仕て自ら進まんと欲する者、其の周に於て不可なるときは去て魯に之き、魯に於て不可なるときは去て齊に之き、楚に之き鄭に之きを得たるの情況なりしか故に、隨て交通往來の便を得て、列國文學の異同を察し、益々以て相下らざらんと欲するの念を鞏固にせり、是列國競争の結果よりして、其の影響を文學上に及ぼし、因て其の進歩を促したる第四の原因なり。

(五)流派競争の猛烈なりしこと。上記列國間の競争、獨り猛烈なりしのみならず、學者間に於ける、思想、學說の競争、亦行はれて、互に相駁撃して之を壓倒せんと欲し、敢て人後に落ちるを甘せざりしか故に、一人ありて奇異の說を出せば、又一人ありて其上に凌駕せんと欲して、荒怪破天の論を立つる者あり、是に於てか、百家の雜說、沓至疊出して、愈々文學の發達を來たせり、而して其の個人的競争の生ずるは、異當時列國の競争よりして人才を要し、人才を要するよりして更に其の奇偉個傑の士を選擧せしの結果に歸せしはあらず、之を要するに、志士仁人、眞に社會の紊亂せるを嘆して、之を救濟せんと欲する者、異端の前に當り、怪詭の路を塞くを圖て、其道を明にせんと欲するの結果は、自ら學派の競争を來たさるゝからず、而して非凡なる偉人學者の輩出して、互に其所見を同ふせざる、適、以て其競争を激烈ならしめたるに外ならず、是亦文學發達の

第五原因なり。

以上列舉せし所の五點は、周季文學の發達を促したる原因中の重なるものなるべし、若し更に其の他の小原因を數ふれば、亦應に數多あるべしと雖も、吾人の觀る所を以てすれば、之に歸約せらるるを覺ふ、今夫試みに支那文學史上に於ける當代の文學を觀るに、創始の時代、既に去りて、方々に建設の時代に在るものと云ふべし、孔子の儒學に於ける、老子の道家に於ける、楊朱、墨翟、申韓諸人の其學に於ける皆一として建設の時代に在らざるはなし、而して其の裝飾、彫藻の細觀に至りては、更に後代を待ちしものあるに似たり、且つ諸子百家各、其の所説を異にせしと雖も、其文學の種類を別つときは、楚辭の獨り其の調を異にするのみにして、百家均しく同一種類の散文的たるを免れず、是殿堂、門廡、各、其の觀を異にするか如くなるも、其の用材に至りては、未だ曾て相同しからずんばあらず、而して其の構造の或は石材を用ひ、或は煉瓦を用ひて、一大寶塔を造みしを見ざるは、是吾人の憾を當代の文學に遺す所以なり、然りと雖も、其結構、規模の壯觀は、全く後代の標本を此に取る所にして、其の片材裝束を得るも、以て優に異代の名稱と稱せらるに足れり、然らば則ち當代文學の價值、其れ亦以て知るを得べし、豈以て珍重せざるべからむや。吾人は既に上段に於て、當代の文學の三期に區別せられ得ることを云へり、然れども、今此區別を

用ゐずして、更に諸子の派別に隨ひ、下章に於て、儒家、道家、墨家、法家、名家、兵家、雜家、及び騷賦家等の順序を以て、一一概叙する所あらむと欲す、蓋是諸家の面目を想見するに於て、尤も便利なるを以てなり、若夫れ諸家各人の時代の前後は、諸家中に於て更に其の輩出の前後に従ふ。

第貳章 儒家

第一節 孔子、及び五經

吾人は、既に前章總論に於て、儒家の概要を叙し、併せて孔子を以て其の元祖と稱せり、然れども孔子も亦決して自意を以て儒學の一派を構成せしにあらざりて、其の淵源せし所は、遠く孔子以前に在りて、孔子は唯之を整頓して、大成の業を遂げしに過ぎざるなり、故に孔子も亦曰く『述而不作、信而好古』と、其意殆んど此の如きのみ、然らば則ち又聊、其の淵源する所を考へて、其の性質を知らざるべからず。

蓋儒家者流は、本と司徒の官より出つ、司徒の官は、邦の教化を掌れるものなり、周禮を按ずるに太宰の職に『師以賢得民、儒以道得民』と云ふ、又司徒の職に『聯師儒』の文あり、師儒とは、道藝を以て郷里に教ふる者の稱にして、古は致仕の賢者、多く退て其の郷里の子弟を教育せしなり、

而して其の重に徳行を以て、一郷一閭の標識と爲り、摸範と爲りて、衆子弟を薫化せし者を稱して、師と云ひ、又其の六藝を以て、子弟を教習して、揖讓讀誦の事を授けし者を稱して、儒と云ひしに似たり、然れども、當時全才の君子を尙ひしか故に、其の師たり儒たる者、皆文に六經の中に遊んで、意を仁義の際に留め、遠くは堯舜を記述し、近くは文武を憲章して、身を立て已を行ひ、以て經世有用の才を成さしめんと欲せしなり、故に司馬遷云ふ『儒者以六藝爲法』と班固も亦云ふ『古之儒者博學乎六藝之文』と、即ち是なり、孔子に至りて、聖人の徳を懷て其位を得ず、以て施用に術なく、是に於てか詩書を論次し、禮樂を修起し、又春秋を作りて王法に當てしか如き、皆一として理想を往古に取らざるはなく、且つ其の子弟の從遊する者、數千人、各其の器に隨て才を成し、以て身を立てしめしもの類、直に古の所謂師と儒とを兼て、子弟を教化せし者なり、而して其意、常に堯舜、文武、周公の舊制を尋て往古の黄金時代を再出せしめんと欲するに在りしか故に、其の學の性質、全く治國濟民の意に過ぎず、而して其方法たるや、人倫父子の至情に本て、君臣朋友の信義に至るものなり、故に堯の徳を稱しては、則ち曰く『大哉堯之爲君也、唯天爲大、唯堯則之、巍巍乎其有成功也、煥乎其有文章』と、周を稱しては則ち云く『周監於二代、郁々乎文章、吾從周』と、而して其の自ら言ふや、或は文王既に没して文茲に在らざるやと云ひ、又或は吾復た夢

にたも周公を見すと云ふか如き、其の祖述せし所、以て見るを得へし、此の如く孔子は、堯舜、禹湯、文武、周公以來の遺範に因りて、其學を修明せしと雖も、純然たる一派の儒風を開きしに至りては、全く之を孔子の力に歸せざるべからず、是吾人の孔子を以て儒學の元祖開山と稱するに躊躇せざる所以なり。

孔子は名を丘と云ひ、字を仲尼と云ふ、魯の襄公の二十一年十一月を以て、魯の昌平郷の陬邑に生る、即ち今まの山東省沂州の地なり、我紀元を以てすれば第百十年にして、綏靖天皇の三十年に當り、西曆を以てすれば紀元前五百五十一年にして、殆んどサイロスの立て波斯王と爲りし時代に當り、其先は宋人にして微子の後なり、父を叔梁紇と云ふ、紇老めて後、顔氏の小女と婚して、丘尼に降り孔子を得、三歳の時に紇死す、孔子兒たりし時、嬖戯するに常に俎豆を陳ね禮容を設く、年漸く、長するに及びて聲名自ら起る、魯の大夫孟僖子病て將に死せんとする時、其の嗣の懿子を誡めて云く、孔丘は聖人の後なり、吾聞く聖人の後、世に當らすと雖も必らず違者あらむと、今孔丘年少くして禮を好む、其れ違者ならむか、吾乃ち没せば汝必らす之を誦とせよと、是に於て懿子魯人南宮敬叔と往て禮を學ぶ、其の貧しきか爲めに嘗て季氏の吏と爲る而して料量平かなり、司職の吏と爲りて畜蕃息せり、己にして遊歴を始め魯を去りて齊より宋術に至り、陳蔡の間に困みて魯に反

る、南宮敬叔魯君に言ふて孔子と與に周に適んことを請ふ、魯君之に一乘車、兩馬、一豎子を與へて周に適かしむ、此行に於て老子を見て禮を問ふ、辭し去るに及び、老子之を送りて云く、吾當貴の者は人を送るに財を以てし、仁人は人を送るに言を以てすと聞けり、吾當貴なること能はず、仁人の號を竊みて子を送るに言を以てせむ、曰く聰明深察にして死に近づくは、好んで人を議する者なり、博辯廣大にして其身を危ふするは、人の惡を發く者なり、人の子たる者は、以て己を有することなく、人の臣たる者は、以て己を有するおとなしと、蓋老子の意、滔々たる天下の人機を見、難に先つて其微を察し、以て明哲其身を保つ能はず、或は明察酷求して人の是非を論し、其の心術に入り、其細行を析て之を議し、以て深仇の後に隨ふを知らず、或は術を設け辭を弄して、陰險峻刻、人の隱事を發き、人の秘密を窺ひ、以て自ら多智と爲して、既に其身の危地に頻するを知らざる者あるを憫み、事に依り宜しきに從て、之を一世の泰斗たるへき孔子に洩らせしものなるへし、是に於て、孔子周より魯に反り、弟子益々進む、孔子年三十六の時、魯國亂れて魯公齊に奔る、孔子亦齊に適て其の太師と樂を誦り韶樂の音を聞て三月の間、肉の味を知らざるに至る、是の時、齊の景公政を孔子に問ふ、孔子の曰く君君たり、臣臣たり、父父たりと、景公大に喜て云く、如し君君たりと、臣臣たりと、父父たりとす子子たりとすは、粟ありと雖ども、吾豈に得て之を食はんやと、遂に尼谿の

田を以て孔子を封せんとせしに、在朝の諸臣之を沮む者多くして、實行せらるること能はず、聖人も亦た左右昵近狗鼠の徒を如何ともすること能はず、遂に行りて魯に反へる、是の時に當り、魯の宰臣等、驕傲を恣にして陪臣國政を執り、大夫より以下、皆僭越して正道に離る、孔子是に於て仕へずして、退て詩書禮樂を修めて明道の意を寓す、而して弟子の從遊する者彌衆く、遠方僻境より至りて樂を受くるもの踵を接す、後定公孔子を用て中都の宰と爲す、一年にして四方皆之に則る、遂に司空を経て大司寇に至る、定公の十年に齊と和好して夾谷に會す、孔子、相の事を攝行す、乃ち定公に勸めて云く、臣聞く文事ある者は必らず武備あり、武事ある者は必らず文備あり、古者諸侯疆を出るには必らず官を具へて以て從ふ、請ふ左右の司馬を具せむと、定公之を諾し、齊侯に夾谷に會す、壇位を爲り、土階三等、會遇の禮を以て相見る、揖讓獻酬の禮畢りて、齊の有司、四方の樂を奏せんとするに及び、孔子趨り進んで言て曰く、吾兩君の好會を爲すに、夷狄の樂、何を用ふることを爲さむと、倡優侏儒の戲樂を奏せんとするに及び、復た趨て云く、匹夫にして諸侯を榮辱する者は罪當さに誅すへしと、齊侯懼れて嘗て侵せし所の魯の地を返へして其過を謝せり、定公の十四年、孔子五十七、大司寇より相の事を攝行す、是に於て、大夫少政卯を誅して政を亂るの罪を正す國政を興かり聞くこと三月にして魯國大に治まり、商賈價を飾らす、男女行く者、塗を異にす、齊

人懼て云く、孔子政を爲せば魯必らず覇たらしむ、覇たらしは吾地最も之に近し、必らず先づ并せられんと、是に於て女樂を遣くる、季桓子之を受けて三日まで政を聽かず、又郊して脰俎を大夫に致さず、孔子遂に行りて屯に宿す、歌ふて云く、彼の婦の口、以て出て走るへし、彼の婦の謁、以て死敗すへし、蓋優なる哉游なる哉、維れ以て歳を卒へんと、遂に衛に適て、子路の妻兄、顔淵の家を主とす、衛の靈公、孔子に粟六萬を致す、居ること十月にて或人之を靈公に譖す、乃ち去て將さに陳に適んとして匡を過く、孔子の狀、陽虎に類す、陽虎嘗て匡人を暴す、匡人は於て孔子を圍む、拘せらるること五日、顔淵後れ至る、子の曰く吾汝を以て死せりと爲せり、顔淵云ふ子在ます、回何ぞ敢て死せむと、圍益々急なり弟子懼る、子曰く文王既に没して文茲に在らずや、天の將さに斯文を喪さんとするや、後死の者、斯文に與かること得ざるなり、天の未だ斯文を喪さんるや、匡人其れ予を如何せむと、遂に去ることを得て、復た衛に反りて、蘧伯玉の家を主とす、靈公の夫人に南子と云ふ者あり、辭柄を設けて孔子を見んと欲す、孔子辭謝す、已むを得ずして之を見る、靈公又夫人と同車して出て、孔子をして次乗たらしめて市上を過く、孔子之を醜とし、吾未だ徳を好むこと色を好むか如き者を見すと云つて衛を去る、是に於て、曹を経て宋に適き、弟子と禮を大樹の下に習ふ、宋の司馬桓魋と云ふ者、孔子を殺さんと欲して其樹を抜く、子曰く天、徳を予に生ず、桓魋

其れ予を如何せむと、去りて鄭に適き、弟子と相失して獨り郭の東門に立つ、鄭人子貢に謂て曰く、東門に人あり、其類は堯に似て其項は皋陶に類し、其肩は子産に類す、而して腰より以下は禹に及はざること三寸、纍々として喪家の狗の如しと、子貢實を以て孔子に告ぐ、孔子欣然として笑て云く、形狀は未なり、喪家の狗に似るとは果して然らむと、遂に陳に至りて司城貞子の家を主とす、居ること三歳にして去りて衛に反る、道に蒲を過く、蒲人之を止む、弟子公良孺と云ふ者、勇力あり、謂て云く吾昔夫子に従て難に匡に遇ふ、今又此に於てす、命なるかな、吾寧ろ闘ふて死せむと、劍を抜て之に合す、蒲人懼れて孔子に衛に適くことなきを盟はしめて之を出す、孔子遂に衛に適く、子貢か云く盟に負くを得べきやと、孔子の曰く要盟は神の聽かざる所なりと、衛の靈公、孔子の來るを聞き、喜て郊迎す、然れども公老めて政に怠り、遂に孔子を用ゐず、孔子喟然として歎して云く、苟も我を用る者あらは菘月のみ、三年乃ち成功あらむと、晋の趙氏の家臣佛肸と云ふ者、中牟を以て畔き、孔子を召ふ、孔子往かんと欲す、子路か云く、由之を夫子に聞く、其身親ら不善を爲す者には、君子其國に入らずと、今佛肸親ら中牟を以て畔く、子往かんと欲するは何ぞやと、孔子の云く、是の言あるかな、堅きものは磨すれども磷せず、白きものは涅すれども淄せずと云はすや、我豈に匏瓜ならんや、焉んそ能く撃て食はざるを得むと、然れども竟に往くことを果さず、將らば

西の方なる趙簡子を見んとし、河に至りて、其の賢太夫實鳴犢舜華の死するを聞き、河に臨て歎して曰く、美なるかな水、洋々乎たり、丘か此を濟らざるは命なるかなと、反りて亦遊伯玉の家を主とす、既にして行りて復た陳に如く、季桓子將に卒せんとして、其嗣康子に必らず仲尼を召へと遣言す、康子乃ち孔子を召はんと欲せしに、其家臣之を止む、康子乃ち再求を召ふ、孔子の曰く、魯人求を召ふ、之を小用するにあらず、將に大に之を用ゐんとするなりと、陳に在り歸を思ふて云く、歸らんか歸らんか、吾黨の小子狂簡斐然として章を成す、之を裁する所以を知らずと、子貢、孔子の歸思あるを知るや、再求を送り、因りて誠めて云ふ、即ち用ゐらるれば夫子を以て招くを爲せよと、再求既に去る、而して孔子は陳より蔡に遷り、又葉に如く、此の際、屢々避世隱者の流に逢へり、時に楚國より人を使はして孔子を聘す、陳蔡の大夫之を畏れて相謀りて與に徒役を發して孔子を野に圍みて、行くことを得ざらしめ、糲を絶つこと七日に至る、從者疲頓して能く起つことへし、而して孔子は講誦絃歌して曾て衰えず、子路、子貢の徒、交々慍ふる色あり、子路か曰く、君子も亦窮することあるか、孔子の曰く、君子固に窮す、小人窮すれば斯に濫すと、子貢に謂ふ、賜、汝は予を以て多く學べ之を識る者と爲すか、予一以て之を貫くなりと、乃ち更次に子路、子貢、顔回を召して問うて曰く、時に兕にあらす虎にあらす、彼の曠野に率ふと云へり、吾道非なるか、吾何を

ぞ此に於てするぞ、是に於て三子の答ふる所に因りて、更之に垂示せしこと次の如し。
 意者吾未仁耶、人之不我信也、意者吾未智耶、人之不我信也、(子路)
 (孔子曰) 有是乎、由、譬使仁者而必信、安有伯夷叔齊、使智者而必行、安有王子比干、夫子之道至大也、故天下莫能容夫子、夫子蓋少貶焉、(子貢)
 (孔子曰) 賜、良農能稼、而不能爲穡、良工能巧、而不能爲順、君子能修其道、綱而紀之、統而理之、而不能爲容、今爾不修爾道、而求爲容、賜、而志不遠矣、
 夫子之道至大、故天下莫能容、唯然夫子推而行之、不容何病、不容然後見君子、夫道之不可修也、是吾醜也、夫道既已大修而不用、是有國者之醜也、不容何病、不容然後見君子、(顏回)
 (孔子欣然而笑曰) 有是哉、顏氏之子、使爾多財、吾爲爾宰、
 是に於て、子貢をして楚に至りて狀を通せしむ、楚の昭王、師を興して孔子を迎ふ、然る後に免るゝことを得たり、昭王將に魯社の地を以て孔子を封せんとせしに、亦沮む者ありて乃ち止む、既にして昭王亦卒す、楚人接輿伴はり狂して、歌ふて孔子を過きりて曰く。
 鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫兮、來者猶可追也、

已而已而、今之從政者殆而、孔子車を下りて與に言はんと欲せしに、趨り去りて、復た言ふことを得ず、是に於て孔子楚より衛に反る、時に年六十四にして、魯の哀公の六年なり、是の時に當り、冉求、季氏の將帥と爲りて齊の師に郎に克つ、季康子軍旅の事を誰に學ひしと問ふに及び、之を孔子に學ぶと云て、暗に子貢か送別の意に應ず、康子乃ち幣を以て孔子を迎ふ、孔子魯を去りてより凡十四歳、是に至りて乃ち其生國に反る、時に年六十八、頽然たる一老翁なり、哀公、季子等交、政を問ふ、然れども終に孔子を用ゆる能はず、孔子も亦仕ふることを求めず、則ち退て編著の意あり、是の時に當り、周室式微にして、禮樂は廢れ、詩書は缺けたり、孔子乃ち三代の禮を追迹して、書傳を序す、上は唐虞の際より起りて、下は秦繆に至る、其の禮に於けるや、曰く夏の禮は吾能く之を言へども、杞は徵するに足らず、殷の禮は吾能く之を言へども、宋は徵するに足らず、足らば吾能く之を徵せむと、而して夏殷の損益する所を觀て、其變を察するや、云く周は二代を鑑み郁々乎として文なるかな、吾は周に従はむと、其の樂に於けるや、嘗て魯の太師と樂を聳りしか如き、又嘗て琴を師襄子に學ひしか如き、其神に於て已に先づ發明する所あり、故に云く吾術より魯に反りて、然る後に樂正しく、雅頌各其所を得たりと、而して詩は則ち古詩三千を刪りて其重複するものを去り、以て禮義に施す

へきを取れり、又晚に易を喜みて之を把弄し、韋編三才ひ絶つに至る、云く我に數年を假して易を學ひしめは、以て大過なかるべしと、是に於て専ら子弟の教育に任し、文行忠信の四を以て之に教ゆ、弟子三千餘人、身六藝に通ずる者、七十有二人に至る、哀公の十四年西の狩に隣を獲たり、孔子の曰く、吾道窮すと、魯の史記に因りて春秋を作り、筆すべきは則ち筆し、削るべきは則ち削る、子夏の徒、一辭を贊すること能はず、自ら言ふ後世、丘を知る者は春秋を以てし、丘を罪する者も亦春秋を以てせむと、是の時に當りて、孔子齡正さに高く、從游の弟子も亦或は散して諸侯に仕へ、或は存没一ならず、其の最愛の三弟子中、顔回は病に死し、子路は衛の亂に斃れて、人事落莫の感は、疑もなく孔子の胸懷を刺衝せり、且つ其の一子の鯉も、孔子に先ちて世を謝し又室家の以て其の老を慰むる者もなく、殆んど秋山葉落ちて滿目凄慘の觀に似るものあり、而して哲人の凋零せんとする、天亦之を如何ともすること能はず、竟に七十三歳を以て哀公の十六年四月己丑の日に卒せり、其の臨終の狀得て詳にし難しと雖も、檀弓の記する所に據れば、

孔子蚤作、負手曳杖、稍搖於門、歌曰泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎、既歌而入、當戶而坐、子貢聞之曰、泰山其頽、則吾將安仰、梁木其壞、哲人其萎、則吾將安放、夫子殆將病也、遂趨而入、夫子曰、賜、爾來何遲也、夏后氏殯於東階之上、則猶在阼也、殷人殯於兩楹之

間、則與「賓主夾之也、周人殯於西階之上、則猶賓之也、而丘也般人也、予疇昔之夜、夢坐奠於兩楹之間、夫明王不興、而天下其孰能宗予、予殆將死也、蓋履疾七日而沒、

檀弓の文、此の如し、然れども「泰山頽」の歌、恐くは聖人の詞にあらす、其の稱して哲人と云ひ、以て梁木泰山を比と爲すか如き、聖人豈に此の如きの妄を爲さむや、今姑らく疑を存して一説に備ふ、唯其の老病を以て上記の年月に卒せしことは、甚確實なりと爲す、魯の城北の泗上に葬る、弟子皆心喪すること三年にして相談れて去る、唯子貢獨り家側に廬すること凡六年にして、然して後に去る、弟子及び魯人等往て家に従て家する者、百有餘室、因て命けて孔里と曰ふと云ふ、孔子鯉を生む、字は伯魚、孔子に先て死す、伯魚偁を生む、字は子思、即ち中庸の著者なり。

孔子の略歴は略上の如し、而して其の一代の聖人として、支那千古學者の宗たること固より論なし、故に子貢、有若、孟軻等の諸子皆云ふ、生民ありしより以來未だ孔子の如きはあらすと、蓋其教化の人に存するもの千歳愈々新なるか如く、以て其の風俗、習慣を爲し、以て其の好尚、氣質を養成して、精神上に一種の消磨すへからざる極印を銘せしに至りては、釋氏を除くの外、何人か果して能く孔子に似る者ある、然るに彼の釋氏は、一種の宗教的信仰の府と爲りて人心を結合せしも、孔子は然らず、唯單に現世に於ける日常彝倫の大道を説て、曾て幽界不可思議の事を談せず、而して

猶能く千古に辨耀せること此の如し、吾人は於てか益、孔子の大なるを見る、今夫東西の人類、其の種族を異にし、道徳習慣、亦其の趣を同ふせずして、所見の一ならざる、互ひに相驚怪する所のもの多しと雖ども、苟も天の覆ふ所、地の載する所、既に人類あれば、何の處にか父なきの子あらむ、而して彝倫の源、既に此に開く、孔子の教、蓋此の本源より流出して、人世の社交事物の間に動作する、恰當の義を説きしに過ぎざるなり、是の故に、君臣、父子、朋友、夫妻の關係より、奴僕、儲夫の約束等に至るまで、皆之を人性の至情に本つけざるはなく、其の仁と曰ひ禮と曰ひ、孝悌忠信と曰ふもの、亦皆人性に存するものを證明せしに過ぎざるなり、論語二十篇の文は、其の言行録なり、試に之を一掃せば、其の君臣の義、父子の親、昆弟の愛、朋友の信を説くもの、一として彝倫に本けて、其の至情を推さざるはなく、施みて、政治法度の事に至るまで、全く同一の根源より出て、之を擴充せしものにあらざるなきを見るべし、是儒教の簡易明白、非常驚くべきの談少くして、之を用ひて愈々喝きざる所以なり、而して孔子は平素之を以て子弟を教育し、其の方法の如きは、直に日常接物の際に於て、事に應じ機に觸れて、格言的の垂示を與へ、復た科程を設け系統を立て、其の業を授けしにあらす、且つ其教育の特質たる點は、其の實行的なるに在りて、彼の西哲の高遠深遠の理論を爲して、實行に疎なるか如きの類にあらす、而して孔子は躬親ら之れか實

踐者を爲りて、其の摸範を示せしなり、故に諸弟子も亦能く其の一舉一動に着目して、之を苟もせざりしことは、論語郷黨の篇を見ても、最も其の周到なるを知るべし、其他書中に散見するものにして足らず、之を要するに、孔子の學は、躬行實踐を旨として、社會の秩序を整頓するを目的と爲し、而して之を日常彝倫の際に本つけしものに過ぎざるなり、西人動もすれば曰ふ、孔子の學は獨斷的なりと、何ぞ知らむ、天倫の際に至情に出て、復た些個の理窟を雜えざるを、若し夫れ父子理窟を稱して、或は兒童は父に養育せらるゝの權利ありと云ひ、或は父母は其兒を鞠育するの義務ありと云ひ、以て其の關係を説くこと、財貨の貸借、報酬を見るか如くにし、入りては夫妻の別なく、出ては君臣の義を見ず、滔々として個人の私情にのみ之れ徇ふものは、夷狄禽獸の道なり、而して多くは是孔教の化、未だ至らざる所の處に在り、然れども彝倫の人に於けるは、其の至情に出つ、日月未だ地に墜ちずんば、斯教豈に通く五方を照らすの時なしとせむや、今左に其の編纂筆削に係る五經の大義を略叙し、併せて其の言行録たる論語を繫て、篇辭の一端に備ふ。

五經とは、詩、書、易、禮、春秋の五書を稱するなり、又六經或は六藝の稱あり、六經とは、上記の五經に加ふるに樂經を以てするものなれども、清儒の説に遵へば、古未だ樂經の一書あらざるなり、四庫全書總目に云く「沈約稱、樂經亡於秦、考諸古籍、惟禮記經解有樂教之文、伏生尙書大傳、

引「碎離舟張四照、亦謂之樂、然他書均不云、有樂經、大抵樂之綱目具於禮、其歌詞具於詩、其鏗鏘鼓舞、則傳在伶官、漢初制氏所記、其遺譜、非別有一經爲聖人手定也、」と六藝とは、箋註家多く六經を以て之を解すれども、古の所謂六藝とは、詩書禮樂射御書數の六を稱するものにして、六藝を六經と解するは、後世の事なり、故に支那古文學の以て見るべきものは、全く上記の五經に在りとす、而して此等の諸書中に於て、詩書の二書は、全く孔子以前の文學に屬するものにして、他の三書も、亦孔子前後の文學に屬するものなり、禮記經解篇に云く「孔子曰、入其國、其教可知也、其爲人也、溫柔敦厚詩教也、疏通知遠書教也、廣博易良樂教也、潔靜精微易教也、恭儉莊敬禮教也、屬辭比事春秋教也、故詩之失愚、書之失誣、樂之失奢、易之失賊、禮之失煩、春秋之失亂、其爲人也、溫柔敦厚而不愚、則深於詩者也、疏通知遠而不誣、則深於書者也、廣博易良而不奢、則深於樂者也、潔靜精微而不賊、則深於易者也、恭儉莊敬而不煩、則深於禮者也、屬辭比事而不亂、則深於春秋者也、」是果して孔子の言に出るや否やは、未だ容易に斷定すべからざるものありと雖ども、諸經の大要は此に於て概見することを得べし、且つ此等の諸經、多くは孔子の手定、若しくは筆削に係るものなれば、儒學の基礎たる最重經典は、洵に五書の右に出づるものなし、故に司馬遷の孔子を贊する辭に「自天子王侯、中國言六藝者、折中於夫子」

と云ふもの、以て孔子の儒學に於ける地歩と、上記諸經の孔子に於ける關係とを見るべし。

詩 詩經は、支那古代の詩集にして、孔子の手定に係るものなり。漢書藝文志に云く「書曰、詩言志、歌詠言、故哀樂之心感、而歌詠之聲發、詠其言謂之詩、詠其聲謂之歌、故古有采詩之官、王者所以觀風俗、知得失、自考正也」と蓋古采詩の官ありて四方の詩を采徴し、其の民俗土俗に因りて政治の汚隆を鑒みたるなり、禮記王制に「天子五年一巡狩……命大師陳詩、以觀民風」と云ふもの即ち是なり、此の如くにして採集敷陳せし所の詩、甚多く、孔子の時に至りて、古詩三千餘篇あり、隨て亂雜衰充して、其の治化に益なきもの、亦甚多かりしかば、孔子乃ち其の重複せるを削去して、禮義に施すべきものを取存し、定めて三百十一篇と爲せり、而して其餘存せしもの重に周代の時にして、旁ら商代の作に及べり、然るに内六篇は秦火に遭ふて之を亡せしか故に、今現存するものは、三百五篇に過ぎざるなり、按するに詩に六義と云ふことあり、風、雅、頌、賦、比、興、即ち是なり、風とは猶ほ風の行て草の偃すか如く、上は以て下を化し、下は以て上を刺ることあるの意にして、文を主として諷諫す、而して言ふ者罪なく、聞く者戒むるに足る、故に風と云ふなり、雅とは王政の由て廢興する所を言ふものなり、而して其の小雅、大雅と區別せらるる所以は、政に大小あるを以てなり、故に小雅に於ては、宴享の樂を述べ、大雅は朝會の樂を述ぶ

るなり、頌とは盛徳の美を形容して、其成功を神明に告ぐるものなり、而して賦は、直に其事を叙し、興は、物に托して詠を起し、比は、物を引て例を比するの謂にして、詩に賦、比、興あるは、猶布の緯あるか如く、以て風、雅、頌の經を織るなり、又四始と云ふことあり、一説には關雎を風の始と爲し、鹿鳴を小雅の始と爲し、文王を大雅の始と爲し、清廟を頌の始と爲すか故に、之を四始と云ふと曰ひ、又一説には、風なり、小雅なり、大雅なり、頌なり、人君此の四者を行へば、則ち興り、廢せは衰ふ、蓋王道興衰の由る所なるか故に、之を四始と云ふと曰へり、又風雅に正變あり、西周の盛時に當りて、善政美俗、四方に遍く、其歌詠に發するもの、亦其の正を得たるも、成康沒して頌聲衰み、王澤竭きて變風變雅漸く作くる、蓋亦事變に違して、其の舊俗を懷ふの餘に出づるなり、今試に其の正變を分ては、次の如し。

正 風 周南、召南の二十五篇

正 雅 小雅 鹿鳴より菁莪に至る諸篇

變 風 邶、鄘、衛、魯、齊、秦、魏、豳の諸篇

變 雅 大雅 文王より卷阿に至る諸篇

既に上に叙したるか如く、詩に六義、四始、正變等ありと雖とも、要するに、其詞は、善惡美刺に出て、其教は溫柔敦厚の旨に歸し、其義は思、邪なしの一言に蔽はる、是儒學の詩を用る所以の大要

なり、而して詩の章句は、子夏より傳はり、漢に至りて、分れて四家と爲り、毛公の學最も顯る。書 書經は、古代の布告命令彙纂にして、典、謨、訓、誥、誓、命の六體より成る、而して其の筆者は當時の史臣にして、之れか編纂者たる者は、亦孔子なり、孔子編纂の當時には、猶其の詩を刪定せしか如く、流風美制の以て後世の法と爲すべきもの、百篇を次叙せしと雖とも、秦火に遭ふて、殆んど其の半を亡せしのみならず、亦大に其の混亂を來せり、是に於てか、書に古文、今文の二種あるに及へり、史記儒林傳に云く「孝文帝時、欲求能治尚書者、天下無有、乃聞伏生能治、欲召之、是時伏生年九十餘、老不能行、於是乃詔太常使掌故翟錯往受之、秦時焚書、伏生壁藏之、其後兵大起、流亡、漢定、伏生求其書、亡數十篇、獨得二十九篇、即以教于齊魯之間、學者由是頗能言尚書」と所謂今文尚書即ち是なり漢書藝文志に云く「古文尚書者、出孔子壁中、武帝末、魯共王壞孔子宅、欲以廣其宮、而得古文尚書、及禮記、論語、孝經、凡數十篇、皆古字也、孔安國者、孔子後也、悉得其書、以考二十九篇、得多十六篇」と是古今文の二書共に壁中より出づるなり、而して其の尚書と稱するは、蓋伏生の加ふる所にして、孔安國は上古の書なるか故に、尚書と稱すと云へり、今現存する所の書經の文は、古今文を合して一と爲せるものにして、眞偽頗る混淆せり、清儒に至りて考據旁索頗る之を摘抉せり、然れども、支那最古の文を窺はむと欲せば、亦

必らず此間に於てするにあらざれば、其れ將た何くに於てか之を求めむ、而して上代の風俗政治、君臣遭遇の一斑等、亦勇踴の間に於て參見することを得へし、是書の最も珍とすべきに足る所以なりとす。
易 易は卜筮の書なり、孔門易を用ること諸經の先にあらず、後世理氣を言ふ者、引て聖門第一の書と爲し、以て五經の首に置く、蓋古にあらざるなり、唯其書、義理の寓する所あるを以て、把玩するに堪ふべきと爲すのみ、故に孔子の易を愛玩せしも其の晩年に在りて、論語二十篇中其の易を言ふものは「假我數年以學易、可以無大過矣」の一語に過ぎず、而して其の雅言せし所は、詩書執禮のみなれば、聖門に易を用ひしこと、決して後世の如くならず、且つ其の卜筮の書なるの故を以て、秦火に免かれしを見ても、漢以前に在りて、如何に此書の概観せられしかを察するに足るへし。
 易の著者は、一人一代にあらず、傳へ云ふ、伏羲始めて八卦を畫し、以て神明の徳を明にし、以て萬物の情を類す、因て之を重て六十四卦と爲し、三代に及ぶ、而して夏には連山と云ひ、殷には歸藏と云ひ、周には之を周易と云ふ、蓋交易變易の義に取る、而して其の卦辭は文王の作る所にして、文辭は周公の作る所に係る、孔子又更に彖辭、象辭、繫辭、文言、序卦、說卦、雜卦等を作る、之を十翼と云ふ、即ち今の易經是なりと、然れども十翼の果して孔子の手に成りしやに至りては、頗る疑な

き能はざる所なり、唯盈虛消息は、理の自然に出るものにして、理の見るべからざる所、聖人數に即て之を觀、因て象を立て之を著せるなり、故に四庫總目に云く『象也者理之當然也、進退存亡所由決也、教也者理之所以然也、吉兆悔吝所由生也、聖人因卜筮以示教如『是焉止矣』』と以て聖門に易を用るの意を知るべし、左に八卦の名目形象を掲ぐ、

乾 ☰ (天、陽、剛、健)

震 ☳ (雷、動、助、萬物者)

坎 ☵ (水、滯、瀆、雨、陷、潤、萬物者)

艮 ☶ (山、徑、路、止、終、萬物、始、萬物者)

巽 ☴ (木、風、入、撓、萬物者)

離 ☲ (火、日、電、麗、燥、萬物者)

坤 ☷ (地、陰、柔、順)

兌 ☱ (澤、說、悅、萬物者)

禮 禮の意義たる、蓋事の體を得るの謂にして、其の制作の精意を推すときは、人事を節文する、同時に從容安詳の修養を要すること、固より論なし、而して之を習ふには、亦必らず禮容度數の間に於てせざるべからず、然るに孔子の時に於て、夏殷の禮は已に微するに足らずと曰は、當時の所謂禮とは、重に周代現行の禮文度數を稱せしものなるべし、周の禮書に、周禮、儀禮及び禮記等あり、周禮、儀禮の二書の原本は、共に周公の作る所と云ふ、蓋周禮は、禮の綱領たるべきも

のにして、其の儀法度數は、則ち儀禮を本經と爲すべし、禮記は寧ろ其の義疏たるものと云ふべし、而して吾人の五經の一部として、爰に記載するものは、實に此の義疏に在りとす。

禮記は、孔子の弟子、及び後學者の記する所にして、或は其の聞く所を撰じ、或は舊禮の文を録し、或は變禮の文を録し、又或は仁義を兼記し、得失を雜序するものなり、其書秦の火に遭ひ、漢の時、其眞偽雜出す、隋書經籍志に據れば、共に二百十四篇ありしを、戴德其の煩重を刪り、合せて之を記して八十五篇と爲せしものを、大戴記と云ひ、戴聖又大戴の書を刪りて、四十六篇と爲せしものを、小戴記と云ふ、漢末に馬融、小戴の學を傳へ、又増して四十九篇と爲せりと、然れども四庫全書總目には、今の四十九篇は實に戴聖の原書なりと云へり、其說從ふべきに似たり、其文純駁一ならず、義の淺深異同も、亦爾未だ言ひ易らざる雖ども、筆意間、高古勁健なるものあり、檀弓中庸諸篇の文の如き、最も覆誦すべきに堪ると爲す。

春秋 春秋は、魯の史記の名にして、孔子の筆削に係るものなり、隱公の元年に起りて哀公の十四年に終る、其間十二公二百四十二年、天下の事變を擧げて一部の史籍中に褒貶黜陟す、其文辭は約にして其旨は博し、漢志に曰く『周室既微、載藉殘缺、仲尼思存前聖之業、乃稱曰夏殷之禮、杞宋不足徵也、以魯周公之國、禮文備物、史官有法、故觀其史記、據行事、仍人道、因與以

立功、就敗以成、假日月以定、歷數、辨朝聘、以正禮樂、有所褒諱貶損、不可言見、口授弟子、弟子退而異言、左丘明恐弟子各安其意、以失其真、故論本事而作傳、明夫子不以空言說經也、』と孟子も亦嘗て云ふ、世衰道微にして邪說暴行、作ることあり、臣其の君を弑する者これあり、子其の父を弑する者これあり、孔子懼れて春秋を作ると、孔子筆削の意、以て見るべし、然れども賞罰は天下の公なり、春秋は天子の事なり、孔子聖人の徳を懐くと雖も、苟も其位なければ、亦是匹夫布衣の徒のみ、匹夫布衣の徒を以て、二百四十二年、天子南面の權に託して、天下の是非褒貶を行ふ、是孔子の必らず其職を免る能はざる所なりとす、故に孔子も亦自ら後の我を知る者は春秋を以てし、我を罪する者も亦春秋を以てせむと見て、之を甘受せり、是春秋の一書、實に孔子心血の澀く所にして、又名教の順りて成する所なるを以てなり、然らば聖人の世道人心に於ける微意、實に此書に存すと云ふも亦更に不可なかるべし。

春秋に、左氏、穀梁、公羊の三傳あり、左丘明、孔子に親炙して春秋を受け、以て其筆削の意を窺ひ、遂に其の本事を論じ、微顯闡幽、以て其大義を發揮せるものを左氏傳と云ふ、而して其の事を叙する明晰にして簡潔、特に其辭令を屬するの婉曲にして嫺雅なるに至りては、洵に史家千秋の逸響と稱する所なり、穀梁傳は穀梁俶の撰する所、俶字は元始、一名を赤と云ふ、春秋を子夏に受け

て其傳を作る、其文辭、左氏に及はずと雖も、亦自ら筆意勁健なるものありて、誦讀するに堪へたり、故に後世柳子厚好んで穀梁を讀み、以て其文の規矩を此に取れりと云ふ、公羊傳は公羊壽の撰する所にして、齊人胡毋子都、其業を助けて之を成せり、壽は漢の景帝の時の人なり、初め子夏、春秋を公羊高に傳へ、高又其子平に傳ふ、平の子地、地の子敢、敢の子は即ち壽なり、曾父子相傳て其説を守る、壽に至りて始めて書に筆して之を傳ふ、公羊氏の書即ち是なり。春秋の三傳、共に皆孔子筆削の意を發揮するものにして、殆んど其の註釋と稱するに適當せり、然るに春秋の一書、本と魯國の史乘に據りて、名教の意を寓せしものなるか故に、其の註釋たる三傳も、亦遂に一種の史牒たるを免るべからず、特に左氏の事を叙するか如きは、直に當時の本事に據りて、簡妙の文を行ひ、以て編年史牒の源を開けり、故に後世史牒を云ふ者、必らず左傳、史記と並稱す、尙此時代に於て、叙事文の最も觀るべきもの、國語、戰國策等あり、國語は春秋の外傳にして、亦左氏の筆定に係ると云ふ、戰國策は其筆者の主名を得ず、意に亦當時健筆の者、諸國の記録に據りて、其の事實を真叙せしものなるべし、司馬遷の史記を作る、直に其文を採録して編を爲せし處甚多し、兩書共に文辭崢嶸にして奇氣多く、而して國策の文、較國語の上に出るに似たり、眉山父子の時勢を揣摩して利害を論するもの、蓋亦此に原本すと云ふ、春秋三傳を叙するに當り、

姑らく當時の敘事文を云ひ、以て國語、國策等の書を附見すること此の如し。
 以上詩書易禮春秋の外に於て、特に聖門第一の書と稱すべきは論語なりとす、論語は孔子の言行録
 なり、漢志に云く『論語者、孔子應答弟子時人、及弟子相與言、而接聞於夫子之語也、當時弟
 子各有所記、夫子既卒、門人相與輯而論撰、故謂之論語』と、此書の作者、及び名義は古來衆訟
 の紛々たる所なれども、亦上記漢志の文を以て其案を斷すべし、秦火の後、漢に至りて、古論、齊
 論、魯論の三種本あり、篇幅長短互に相同しからず、今行本は本と魯論に據りて、三論を合併した
 るものなるか故に、其の篇數は魯論の舊に沿へども、其の文字は全く三論より出でたるものなり、
 蓋論語の一書は、孔子の容貌氣象より平生の言行舉動に至るまで、皆載せて篇章の間に在るか故に、
 孔教の大要、亦此の間に於て參見することを得べく、殊に其言句の温順にして玉の如く、簡明にし
 て意味の悠遠なる、切實にして含蓄の深きに至りては、洵に聖人の聲貌を見るに足るなり、左に其
 の數語を附出して佩服に便にす。

三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也、
 士志於道、而耻惡衣惡食者、未足與議也、
 見義不爲、無勇也、

行己有耻、使於四方、不辱君命、可謂士矣、

舉直錯諸枉、能使枉者直、

志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁、

人能弘道、非道弘人、

鄉愿德之賊也、

放鄭聲、遠佞人、鄭聲淫、佞人殆、

飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴於我如浮雲、

老者安之、朋友信之、少者懷之、

過而不改、是謂過矣、

不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇、

歲寒然後知松柏後凋也、

第貳節 孔門の弟子

孔子聖人の徳を懷て其時に遭はす、退て子弟を教育す、是に於て、弟子門に及ぶ者、三千餘人、身
 六藝に通ずる者、七十有七人、皆異能の士なり、而して其の最も著る者、德行には顔淵、閔子騫、

冉伯牛、仲弓、政事には、冉有、季路、言語には、宰我、子貢、文學には、子游、子夏の徒あり、曾共に厄に陳蔡に従ふ者なり、世之を孔門の十哲と稱す、十哲の列に在らざれども、亦德行を以て著る者、曾參あり、孔子既に没して、七十子の徒、散して諸侯に遊び、大なる者は卿相師傅と爲り、小なる者は士大夫に友教す、又或は隠れて見れざる者あり、或は子弟を教授する者あり、故に子張は陳に居り、澠淵子羽は楚に居り、子夏は西河に居り、子貢は齊に終ふ、而して聖門の學亦四方に播せり、今其の最も重なる弟子の姓名言行を概記して、小傳を立つ。

顔回 は魯人なり、字は子淵、孔子より少きこと三十歳、孔子嘗て之を稱して曰く「賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、回也如愚、退而省其私、亦足以發、回也不愚、」と、年二十九にして頭髮盡く白く、竟に蚤死す、或は云ふ死する時、年三十二、と孔子之に哭して慟す、曰く吾回ありしより門人益々親めりと、哀公好學の弟子を問ふに及び、對て曰く、顔回と云ふ者あり、學を好みて怒を避さず、過を忒たびせざりした、不幸短命にて死して、今や則ち亡しと、其の孔子に愛惜せられたること此の如し、蓋孔門第一の君子たるなり。

閔損 字は子騫、魯人なり、孔子より少きこと十五歳、孔子の曰く「孝哉閔子騫、人不問於其父母昆弟之言」と季氏、子騫に費の宰たらしめんとせしに、之を辭して云く、若し重て來りて我を

召す者あらば、必らず去りて汝水の上に在らむと、其の汗君の祿を食むを辱しとせざることを此の如し。

冉耕 字は伯牛、魯人なり、德行あり伯牛惡疾あり、孔子往て之を問ひ、隔より其手を執りて、命なるかな斯人にして斯疾ありと曰て、甚之を痛惜せり。

冉雍 字は仲弓、伯牛の宗族なり、孔子より少きこと二十九歳、孔子之を稱して云く、雍や南面せしむべしと。

冉求 字は子有、魯人なり、孔子より少きこと二十九歳、孔子の曰く千室の邑、百乘の家、求や其賦を治めしむべしと、嘗て季氏の將帥と爲り、鉞を齊の師に用ひて之に克つ。

仲由 字は子路、一の字は季路、卅人なり、孔子より少きこと九歳勇力を好みて志氣愴直なり、衛に仕て其難に死す、死する時、敵人撃て子路の纒を斷つ、子路が曰く、君子は死して、冠免せずと、遂に纒を結んで死す、孔子衛の亂を聞き、曰く嗟乎由や死せむと、已にして報至れば、子路果して死せり、孔子之に中庭に哭す、蓋其の之を親しめること太た重きなり、嗚呼父子情あり、師弟誼あり、孔子にあらざれば誰か子路の性行を知らむ、便佞、門に入らず、狂簡、堂に上る、孔門の俊士多き所以、嗚呼以て之を知るべし、左に孔子の子路を稱せし語、數則を費す、

自吾得由、惡言不聞於耳、

片言可以折獄者、其由也與、

衣敝緼袍、與衣狐貉者立而不耻者、其由也歟、

道不行、乘桴浮于海、從我者其由與、

宰予 字は子我、魯人なり、嘗て晝寝ぬ、孔子朽木糞土を以て之を譬む、齊に仕て臨菑の太夫と爲る、史記に云ふ、田常と亂を作して其族を夷せらると、然れども諸儒多く以て之を疑ひ、以爲らく田常闕止と寵を争ふて、闕止を殺す、闕止の字を子我と云ふ、因りて宰予と相誤りしものならむと此説最も信すべきに似たり。

端木賜 是衛人なり、字は子貢、孔子より少きこと三十一歳、言語を以て著る、孔子嘗て瑚璉の貴器を以て之を品せり、性、人の美を揚ぐるを喜みて、人の過を匿くす能はず、又靡靡を好みて時と轉貨す、嘗て魯衛に相となりて、家に千金を累ね、卒に齊に終ふ、

言偃 是吳人なり、字は子游、孔子より少きこと四十五歳、文學に長す、嘗て魯の武城の宰と爲り、絃誦を起して之を治む、孔子莞爾として笑て云ふ、鷄を割くに焉んぞ牛刀を用んと、既にして又云ふ、前言は之に處るのみと。

卜商 字は子夏、衛人なり、孔子より少きこと四十四歳、孔子既に没して後、子夏、西河に居りて、教授す、魏の文侯其の賢なるを聞き、之に師事して國政を諮問せり、而して經書の傳、多くは子夏よりす、子夏老て子を興ひ、哭して明を失す、曾參之を弔ひ、哭して且つ責む、子夏杖を投して拜して曰く、吾過てり、吾過てり、吾群を離れて亦已に久しと謝して之に服す、子夏の後に、田子方あり、子方の後、流れて莊周と爲る、蓋亦分派の變なり。

顓孫師 字は子張、陳人なり、孔子より少きこと四十八歳、孔子に従ふて厄に陳蔡に遭ひ、因りて行はるゝことを問ふ、孔子の曰く『言忠信、行篤敬、雖蠻貊之國一行也、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉、立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡、夫然後行』と、子張之を紳に書す。曾參 是南武城の人なり、字は子輿、孔子より少きこと四十六歳、孔子以て能く孝道に通すと爲し、之に業を授けて孝經を作ると云ふ、嘗て云ふ夫子の道は忠恕のみと、然れども其質の遲鈍なりしことは、孔子の言に於て之を見るべし、中庸の著者、子思は孔子の孫なり、子思の學、曾子に出つ、而して子思の門實に孟軻を出せり、是亦門流の系統なり。

澹臺滅明 是武城の人なり、字は子羽、孔子より少きこと三十九歳、狀貌甚惡し、既に業を孔子に受け、退て行を修む、行くに徑に由らす、公事にあらざれば卿大夫を見ず、南遊して江に至る、弟

子三百人、取予去就を設けて、名譽諸侯に施す、孔子の云く、貌を以て人を取らば、吾之を子羽に失す。

宓不齊 字は子賤、孔子より少きこと四十九歳、孔子之を稱して『君子哉、魯無君子、斯惡取、斯』と云ふ。

原憲 字は子思、魯人なり、或は云ふ宋人と、孔子より少きこと三十六歳、嘗て恥を孔子に問ふ、子曰く『國有道、穀、國無道、殺恥也』と、孔子卒して後、憲隠れて草澤の中に居る、子貢衛の相と爲り、恥を結び騎を運ね、藪藪を排きて憲か窮處を過く、憲、敝衣冠を擲けて子貢を見る、子貢か云く、夫子豈に病むか、憲か云く『吾聞之、無財者謂之貧、學道而不能行者謂之病、若憲貧也、非病也』と、子貢慙ちて懼はすし去り、終身其言の過きたるを恥とせりと云ふ。

公冶長 は齊人なり、字は子長、嘗て事を以て累泄に遭ふ、孔子以て其の罪にあらずと爲し、其の子を以て之に妻はす。

南宮括 字は子容、魯人なり、孔子之を稱して『君子哉若人、國有道不廢、國無道死於刑戮』と依て、其兄の子を以て之に妻はす。

公皙哀 字は季次、齊人なり、獨行君子の徳を懷て、義、苟も當世に合はす、蓬戸完からず、粗

食厭かず、遂に以て草廬に窮死せしも、未だ嘗て節を屈して人に仕へず、故に世以て季次、原憲と併稱すと云ふ。

顔無繇 字は路、顔回の父なり、孔子より少きこと六歳、父子嘗て各、時を異にして孔子に事ふ。

曾點 字は皙、曾參の父なり、嘗て二三子と孔子に侍して其志を言ふ、孔子喟然として吾は點に與せむと云て之を嘆せり、語は論語先進の篇に在り。

商瞿 字は子木、魯人なり孔子より少きこと二十九歳、孔子易を瞿に傳ふ、瞿は楚入野瞿子弓に傳ふ、或は云ふ、子弓は子夏の門人なりと、子弓より遞傳して、菑川の人、楊何に至る、何は易を治ると以て、漢の中大夫と爲る者なり、漢代専門の學出る所、此の如し。

高柴 字は子羔、齊人なり、或は云ふ衛人と、孔子より少きこと三十歳、衛に仕ふ、孔子嘗て云ふ『柴也愚』と。

漆洵開 字は子開、家語に云ふ、字は子若、蔡人なり、孔子より少きこと十一歳と、孔子、開に仕を勸む、對て曰く『斯之未能信』と孔子悦ぶ。

樊須 字は子遲、孔子より少きこと三十六歳、魯人なり、或は云ふ齊人と、嘗て農稼の事を孔子に請ふ、孔子、老農老圃に如かずと云て之を却く。

有若 字は子有、魯人なり、孔子より少きこと十三歳、或は云ふ三十三歳、其狀貌最も孔子に似たりと、嘗て云ふ『禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、小大由之、有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也、因不失其親、亦可宗也』と。

公西赤 字は子華、孔子より少きこと四十二歳、巫馬施字は子旗、孔子より少きこと三十歳共に魯人なり、而して其語亦同じく論語中に散見す。

右史記、及び家語の弟子傳に據り、之を經傳に參して、且つ省略に従ひしものなり、但七十子の名姓籍里、一一之を列せざるは、敢て甲乙を其間に置くにあらず、古人日に違ふして、其言行事蹟の以て徴すべきものなければなり、然れども、七十子の徒、生て聖人に親炙し、賢者は其の大なるものを知り、不賢者は其の小なるものを知り、事業德行、各其才器を成せり、意ふに七十子の徒、賢なりと雖ども、夫子に遇はずんば、其れ將た誰にか適從して其志を成さむ、嗚呼聖人出てずんば、介士益々孤なり、吾人は孔門の弟子を叙するに及び、益々聖賢君子の遇ひ難きを嘆するなり。

第三節 孟軻、荀卿、及び其著書

孔子既に没して、七十子の徒、亦漸く世を去り、天下方に戰國の時代と爲りて、復た意を仁義の實際に致す者あることなし、是の時に當り、二大儒あり、前後に續出して、仲尼の緒論を承けて、一

家の説を立てたりしかば、儒門の風光、一時に新なることを得たり、而して儒學中興の名譽は、端なく二儒の冠上に落ちたり。

孟軻は字を子輿と云ふ、鄒人なり、鄒は即ち今の山東省の一地方にして、孔子の生邑を距ること遠からざる所なり、其の生卒年月、得て詳にすべからずと雖ども、或は云ふ、西曆紀元前三百七十一年に生る、而して希臘の賢人プラトンの死せしは、實に其二十三歳の時に在りと、其先は魯の公族孟孫氏に出つ、孟子幼にして父を喪ふ、其母賢なり、能く孟子を訓して成立する所あらしめたり、孟子既に長して梁を子思の門人に受く、道既に通して梁に適く、梁の惠王、其言に驚き、竟に用る能はず、齊に適き宣王に遊事して卿と爲る、然れども亦遂けずして去る、是の時に當りて、秦は方に商君を用ひて、國を富し兵を強くし、楚魏は吳起を用ひて、戰勝て敵を弱まし、天下方に攻伐を以て爲し、從衡を以て策と爲せり、而して孟子は唐虞三代の徳を述べて、社會の頽波を回さんと欲せしか故に、往く所に於ては皆以て迂遠にして事情に通せずとせられて、方柄圓鑿遂に世に容れられず、是に於て退て萬章の徒と詩書藝文を談論し、仲尼の意を述て孟子七篇を作る、其の卒せし年月の確實なることは詳ならざれども、或は云ふ西曆紀元前二百八十八年に八十四歳を以て卒せりと、又或は云ふ周の二十二年に卒せりと。

孟子の學は、全く其の理想を孔子に取りしものにて、其の出處行藏も亦全く孔子を追蹤せしものに似たり、孔子天下を周流して遂に知音に遇はず、退て名教を筆削の間に専す、孟子も亦諸侯列國の間に客遊し、用ひられずして書を著はす、其意、曾仲尼に私淑するものなり、而して其の志氣、直に以て孔子に接して、儒門の繼承者たることを自信せるものなり、故に其の言に云く、

五百年必有王者興、其間必有名世者、由周而來、七百有餘歲矣、以其數、則過矣、以其時、考之、則可矣、夫天未欲平治天下也、如欲平治天下、當今之世舍我其誰也、

と、其の自信せること此の如きか故に、苟も孔子儒門の教と馳背するものあるを見れば則ち以て異端邪説と爲して之を開けり、是の時に當り、楊朱、墨翟の言盛に天下に行はれて、其の勢欲の猛たること、殆んど儒教の上に出づるものあり、而して孟子の之を惡みしことは、亦蛇蝎寇讐も當ならず、以て之を能く言て楊墨を距く者にあらずと、是に於て、一半の心力を犧牲として之に當り、以て其の絶滅を庶幾せり、而して其の立論の正大なる、固より醇理に遠からずと雖ども、其の矯々焉として、奇想、天外より來りて、筆端に光世陸離たるに至りては、時に矯論龍辯に流るゝの嫌なしとせず、故に當時に在りて、既に孟子辯を好むの稱あり、而して孟子は更に復た之を辯して云く、

予豈好辯哉、予不得已也……聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱墨翟之言盈天下、天下之言、不歸楊則歸墨、楊氏爲我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無父無君、是禽獸也、楊墨之道不息、孔子之道不著、吾爲此懼、閑先聖之道、距楊墨、放淫辭、邪說者不得作、作於其心、害於其事、作於其事、害於其政、聖人復起、不易吾言矣、我欲正人心、息邪說、距放行、放淫辭、豈好辯哉、予不得已也、

と、亦以て孟子の才氣甚、高として辯博淹貫の概に富むを想見すべし、而して其の辯を好むの機に至りては、之を辭せんと欲して、益辭すべからざるもの、孟子の竟に孟子たる所以にして、其の才氣毎に先づ之れか害を爲せはなり、而して孟子の孔子と聖賢其地を異にし、才徳其器を同ふせざる所以、蓋亦此の一間に在るなり、故に程頤亦云く『孟子有英氣、才有英氣、便有圭角、以孔子之言比之、如水與水精、非不光、比之玉、自是有溫潤含蓄氣象、無許多光耀也』と、蓋亦中るに似たり、然れども、其の聖門に功あるに至りては、遠く荀子の上に出るものあり、今其の學說の特に前人未發の緒論を闡明せしものを擧れば、第一、仁義の說、第二、養氣の說、第三、良心の說、第四、性善論、第五、王霸の辨等是なり。

仁義の說は、孟子一生の本領にして、其の學說の大綱たるものなり、蓋孟子以前に仁義の定名なき

孟子の學は、全く其の理想を孔子に取りしものにて、其の出處行藏も亦全く孔子を追蹤せしものに似たり、孔子天下を周流して遂に知音に遇はす、退て名教を筆削の間に寓す、孟子も亦諸侯列國の間に客遊し、用ひられずして書著はす、其意、皆仲尼に私淑するものなり、而して其の志氣、直に以て孔子に接して、儒門の繼承者たることを自信せるものなり、故に其の言に云く、

五百年必有王者興、其間必有名世者、由周而來、七百有餘歲矣、以其數、則過矣、以其時、考之、則可矣、夫天未欲平治天下也、如欲平治天下、當今之世舍我其誰也、

と、其の自任せること此の如きか故に、苟も孔子儒門の教と馳背するものあるを見れば則ち以て異端と邪説と爲して之を闢けり、是の時に當り、楊朱、墨翟の言盛に天下に行はれて、其の勢微の猛なること、殆んど儒教の上に出づるものあり、而して孟子の之を惡みしことは、亦蛇蝎噬蟹も當ならず、以て爲らく能く言て楊墨を距く者にあらざれば、聖人の徒にあらざると、是に於て、一半の心力を犧牲として之に當り、以て其の絶滅を庶幾せり、而して其の立論の正大なる、固より醇理に遠からずと雖ども、其の矯々焉として、奇想、天外より來りて、筆端に光世陸離たるに至りては、時に矯論龍辯に流るゝの嫌なしとせず、故に當時に在りて、既に孟子辯を好むの稱あり、而して孟子は更に復た之を辯して云く、

予豈好辯哉、予不得已也……聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱墨翟之言盈天下、天下之言、不歸楊則歸墨、楊氏爲我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無君無父、是禽獸也、楊墨之道不息、孔子之道不著、吾爲此懼、閑先聖之道、距楊墨、放淫辭、邪説者不得作、作於其心、害於其事、作於其事、害於其政、聖人復起、不易吾言矣、我欲正人心、息邪説、距跛行、放淫辭、豈好辯哉、予不得已也、

と、亦以て孟子の才氣甚、高くして辯博淹貫の概に富むを想見すべし、而して其の辯を好むの職に至りては、之を辭せんと欲して、益辭すべからざるもの、孟子の竟に孟子たる所以にして、其の才氣毎に先づ之れか害を爲せはなり、而して孟子の孔子と聖賢其地を異にし、才徳其器を同ふざる所以、蓋亦此の一間に在るなり、故に程頤亦云く『孟子有_二些英氣_一、才有_二英氣_一、便有_二圭角_一、以_二孔子之言_一比_二之、如_二氷與水精_一非_二不_一光、比_二之玉、自有_二溫潤含著氣象_一、無_二許多光耀_一也』と、蓋亦中るに似たり、然れども、其の聖門に功あるに至りては、遠く荀子の上に出るものあり、今其の學說の特に前人未發の緒論を闡明せしものを擧げは、第一、仁義の說、第二、養氣の說、第三、良心の說、第四、性善論、第五、王霸の辨等是なり。

仁義の說は、孟子一生の本領にして、其の學說の大綱たるものなり、蓋孟子以前に仁義の定名なき

支那學史

にあらす、周禮の六徳に其目あり、老子の書に大道廢れて仁義ありと稱するの類、既に當時に於て、仁義の定名ありしを見る、然れども其の學說として、儒門に普通せらるゝに至りては、之を孟子の功に歸せざるべからず、論語二十篇、孔子は唯單に仁の一字を説けり、蓋孔子の所謂仁なるものは、其の意義、亦頗る廣く、單に仁の一徳を掲げて、萬善の統會と爲すか故に、其の意義よりすれば、孟子の所謂仁義なるものも、亦未だ嘗て其中に合著せすはあらず、而して孟子の義の一字を補足して、其の意義を細説せしは、畢竟新意を以て古義を注釋せしに過すと雖ども、後起の前輩を祖述する、必らず此の如くならざるべからず、是孟子の孔子を祖述して、大に儒學に力ある所なりとす、義氣説は、孟子義氣の工夫を説きしものにて、之れが根底たるものは、亦其の學說の總綱たる義理上の配合に歸着す、其の大要に謂ふ、凡心を動かさざるの道は、勇を養ふに在り、而して勇に或は刺客必勝を主とするものあり、或は力戰無懼を主とするものあり、然れども是血氣の勇のみ、士君子自ら天勇あり、其志を守り其氣を養ふて、俯仰正大、天地の間に磅礴するもの、是君子の心を動かさる所以なりと、因て更に浩然の氣なるものを説出す、其言に曰く、

敢問夫子惡乎長、曰我知言、我善養吾浩然之氣、敢問何謂浩然之氣、曰難言也、其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間、其爲氣也、配義與道、無是倏也、是集義所生

者、非義襲而取之也、行有不慊於心、則餒矣、

と、而して其の文章上に於ける、前後の排列布置より、造語字句の精に至るまで、妙に其曲を盡せり、蓋亦七篇中有數の一大文字にして、又其の最も精采あるものと云ふべし。

良心説、及び性善論は、孟子の學說に於て最も互に相聯繫するものにて、皆其の天然に出て、人爲を假らざる自家の固有に屬するを稱するなり、其の言に曰く、

人之所不學而能者、其良能也、所不慮而知者其良知也、孩提之童、無不知愛其親也、及其長也、無不知敬其兄也、親親仁也、敬長義也、無他達之天下也、

と、是其の良知良能の解にして、良知は其の知より云ひ、良能とは其行より稱す、而して其の本體たるものを良心と爲せり、後世陽明王氏の學の由て出る所、實に此に在るなり、此の如く學ひず慮らずして得る所を以て本然の善と爲し、因て更に之を推廣して云く、

人皆有不忍人之心、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心、非所以內交於孺子之父母也、非所以要譽於鄉黨朋友也、非惡其聲而然也、由是觀之、無惻隱之心、非人也、無羞惡之心、非人也、……惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心、智之端也、人之有是四端也、猶其有四肢也、

と、是其の性善論の本く所に於て、更に之を断して云く、仁義禮智は外より我を鑠かすにあらす、我之を固有するなりと、告子と云ふ者あり、人性本と善悪なく、猶ほ滯水を東に決せば東に流れ、西に決せば西に流るゝか如しと云ふ、孟子即ち更に之を轉下して云く、

水信無分於東西、無分於上下乎、人性之善也、猶水之就下也、人無有不善、水無有不_レ下、今夫水搏而躍之、可使過頽、激而行之、可使在山、是豈水之性哉、其勢然也、人之可使爲不善、其性亦猶是也、

と、蓋性善の思想は、從來支那に在りて人心に存せざりしにはあらず、詩に「天生蒸民、有物有則、民之秉夷、好是懿德、」と云ひ、中庸に「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教、道也者不可須臾離也」と云ふか如き、又孔子の「性相近、習相遠」と云ふもの、多少性善説の傾向なきにあらざるも、明に之を確言して學説と爲せしは、洵に孟子に在りとす、而して儒門に性を言ふ者、千歲遂に易ふべからざるの至論と爲せり、是亦孟子の儒教に大功ある所以の一なり。

王霸の辨は、孟子の學説を世務の上に實行せしめんと欲するに當りて、當時社會の崇拜せる五霸功利の隱見を破りしものなり、故に齊の宣王の齊桓晋文の事業を問ひしに對しては、「仲尼之徒、無道桓文之事者、是以後世無傳焉、臣未之聞也、無以則王乎」と云へるか如き、尤も其の政治上に懷

抱せる、王道主義を實行せしめんとしたるか故なるを見る、而して其の王霸の別を言ふや、曰く、

以力假仁者霸、霸必有大國、以德行為仁者王、王不待大、湯以七十里、文王以百里、以力服人者、非心服也、力不勝也、以德服人者、中心悅而誠服也、

と、而して五霸を言ては三王の罪人と稱し、更に一轉して當時の諸侯を目しては、五霸の罪人と云へり、其論の峻鑿峭健なること、自ら孟子獨得の家言にして、痛切、言ふべからず、而して孟子の王を崇む霸を卑んするを以て、政治意見の大綱と爲せしこと、蓋亦此の如し意ふに當時戰國雄長を争ふの時に際し、諸侯君主、日夜の經營する所、心志の注ぐ所は、富國強兵の事なり、而して孟子の所謂王道なるものは、輒ち仁政を發して德澤を施し、以て民と休息せんと云ふに過ぎず、是其の言ふ所は善しと雖ども、其の方法に至りては、未だ其の空漠たるを免る能はず、而して其説の當時に容られずして、却て迂濶と稱せられし所以、洵に此に在るなり。

以上の數者、孟子の學説中に在りて、最も見るべきものなり、今夫七篇を、通覽するに、奇論卓説、特に一二を以て之を數ふべからず、殊に其文の俊爽にして、英氣筆端に溢る處、直に以て遺老の面目を想見すべく、大言小言、辨詰自在、亦一として其才を見ざるはなし、其の大文に在りては、齊桓晋文の章の如き、何等の器局、何等の層折、何等の波疊變化ぞ、小品に在りては、齊人有一妻一妾の

章如き、亦何等の輕妙、何等の巧趣と、殊に其譬喩を設くるの巧なるに至りては、洵に亦孟子一家の獨得と稱すべく、挺を以て人を殺すと刃を以てすると異なるわると問ふて、更に難するに政を以てするに如何と云ふか如き、巧辨究追、洵に夷の思ふ所にわらざるなり、之を要するに、孟子は其の學問に於けるよりは、寧ろ其氣概を以て勝てるなり、故に其文に於けるも、亦其の深奥馴雅なるよりは、俊爽簡勁を以て勝てるなり、後世韓退之、蘇老泉等の文、皆孟子より得來るものなり、而して二子の文、亦勁直にして奇氣あり、流に酌て其の泉源を思はし、孟子の文の愛重すべきもの益々以て之を知るべし。

荀卿は趙人なり、名を況と云ふ、漢人、宣帝の諱前を避けて孫卿と曰ふ、嘗て業を師臂子弓に受く、齊の宣王の時、來りて稷下に遊ぶ、是の時に當り、齊王正さに賢を好むの名を馳せて、賓客を稷門の下に集む、是に於て、騶衍、淳于髡、慎到、環淵、接子、田駢、騶奭の徒、先づ至る、而して荀卿の齊に至りしは、稍之に後れたるか如し、故に田駢の徒、皆已に死して、荀卿最も老師たり、是に於て三たひ祭酒と爲る、後齊人、荀卿を讒する者あり、乃ち去りて楚に適く、春申君以て蘭陵の令と爲す、春申君死して荀卿廢せらる、因りて蘭陵に家す、意ふに此際子弟を聚めて之を濳陶せしめらむ、而して李斯の嘗て其の弟子と爲りしも、亦此際の事なるべし、荀卿既に家居して、洵世の政、亡

國亂君、相屬して、大道の遂げざるを目擊し、又鄙儒曲拘、猜謗俗を亂りて、巫祝機祥の説、盛に行はるゝを嘆して、禮樂道德の旨を推し、書數萬言を著せり、所謂荀子の書即ち是なり、而して其の經歷の、孔子、孟子と相似ること、殆んど一轍に出るか如きもの、蓋道を懐く之士、時の坎壞に遭ふて、其志を伸はすこと能はされは、亦必らず書に筆して、之を來者に告げ、以て其道の身後に行はれむことを庶幾へはなり、其の生卒年月の詳なることは、得て記すべからざるも、孟子と殆んど其時を同ふして、稍之に後れて、蘭陵に卒せるに似たり、故に蘭陵に葬ると云ふ。

荀子の學も、亦全く舜禹孔子の教を祖述するものなり、其書三十二篇、禮文を綴緝し、典章を紀載して、禮を崇ひ學を勸むるの意を明かにせり、其中、最も駁雜の府と爲りて、口實を後世に假せしものを、非十二子、及び性惡の兩篇なりとす、非十二子篇に曰く、

略法先王、不知其統、猶然而材劇志大、聞見雜博、案往舊造說、謂之五行、甚僻違、而無類、幽隱而無說、閉約而無解、案飾其辭而祇敬之、曰此真先君子之言也、子思唱之、孟軻和之、世俗之滯猶將儒嚙々然不知其所非也、遂受而傳之、以爲仲尼子游爲茲厚於後世、是則子思孟軻之罪也、

と、是荀子の子思、孟軻を刺りし所にして、後世子思、孟軻を崇宗する者、愈多きに及び、荀子を

指斥する者、益々多きを加えし所以なり、然れども其の當時に在りては、子思、孟軻も亦荀卿の曹倂たりしのみ、而して所見の相同しからざる、之を非とするに於て、何の不可かこれあらむ、清儒則ち之を朱陸の相非とするに比す、洵に當論と云ふべし、荀子は此の如く、子思、孟軻以下を歴抵して、之を非難せりと雖ども、其の孔子を崇宗せしは、猶ほ孟子の孔子を祖述せしか如し、故に其言に云く、

今夫仁人將何務哉、上則法舜禹之制、下則法仲尼、子弓之義、以務息十二子之說、如是則天下之害除、仁人之事畢矣、

と、是尤も荀子の學の本く所を見るべきものなり、意ふに當時戰國辨難の時なれば、紛々たる雜說異論の其の政に益無くして、其の事に害あるもの、一にして足らず、墨翟、宋餅、慎到、田駢、惠施、鄒析の徒より子思、孟軻に至るまで、其學醇駁一ならず、其の説く所を以て當時を律するに、利害亦相半するものあり、故に苟も自ら其方寸に得る所ありて、之を信するの厚き者、誰か自家の説を發揮して、其の事業に施行せられんことを庶幾せざらむや、荀子の如き、蓋亦是のみ、而して其の人性の惡なるを説くや、曰く、

人之性惡、其善者偽也、今人之性、生而好有利焉、順是故爭奪生、而辭讓亡焉、生而有疾、惡

焉、順是故殘賊生、而忠信亡焉、生而有耳目之欲、有好惡色焉、順是故淫亂生、而禮義文理亡焉、然則從人之性、順人之情、必出於爭奪、合於犯分亂理、而歸於暴、故必將有師法之化、禮義之道、然後出於辭讓、合於文理、而歸於治、用此觀之、然則人之性惡明矣、其善者偽也、

と、是荀子の性惡説の理由とする所にして、其の所謂偽とは虚偽の偽にあらずして、猶ほ人為と云ふか如きの意なり、荀子亂世に生れて孟子性善説の後に在り、人心の日に機巧に流れて、問學修爲の月に疏なるを見、慨然として性惡の意あり、以爲らく人々性善の説を恃み、其の自然に任せて學を廢せば、放逸邪僻、至らざる所なく、天下の治化、益起らずと、是に於てか、性惡の説を立て、性の恃むへからざるを云ひ、以て力を先王の教に勉めしめむと欲せり、故に曰く、

凡性者天之就也、不可學、不可事、禮義者聖人之所生也、人之所學而能、所事而成者也、不可學、不可事、而在人者、謂之性、可學而能、可事而成、在人者、謂之偽、是性偽之分也、

と、是尤も荀子の學の禮義法度を修めて、治化を致さんと欲するの意を見るべし、之を要するに、孟子の性善を言ふは、其の初に復らしめんことを欲すればなり、而して荀子の性惡を唱ふるは、其

の惡を改めしめんと欲すればなり、立論相同しからずと雖とも、其の用意に至りては、未だ曾て相異らざるなり、世の聒々たる者、概皆耳食の徒のみ、其意を察せずして、聲に依りて之を咎む、吾人は荀子の爲めに其の冤を悲まざるを得ず。

荀子の後世に非難せらるゝは、全く非十二子、性惡の兩篇に在ること此の如し、而して荀子の兩篇に於ける意、亦上述の如しとすれば、其の兩篇ある、亦決して荀子を累すに足らず、唯其の詞義の過當なる、以て荀子の瑕疵と爲すも爾餘の諸篇に於て、豈に更に見るべきものこれなしとせんや、勸學篇に曰く、

學不可已、青出之藍而青於藍、冰水爲之、而寒於水、木直中繩、而曲中規、雖有稿暴、不復挺者、輒使之然也、故木受繩則直、金就礪則利、君子博學、而日參省乎己、則知明而行無過矣、故不登高山不知天之高也、不臨深谿、不知地之厚也、不聞先王之遺言、不知學問之大也、于越夷貊之子、生而同聲、長而異俗、教使之然也、

と、其言何等の正大と、而して人生教學の最も必要なる所以、此間に躍々たり、蓋荀子の學の本く所、先王の禮法に準據して、其の非禮非法を塞ぎ、以て聖人君子の地に到らしむるに在り、故に隨て學を勸めて教化を厚ふし、以て其邪を閉ちて其善を勸めざるべからず、其の所謂「蓬生麻中、不扶

而直」とは、教學の効を稱するものなり、孟子は學問を以て放心を求むるの道と爲せり、而して荀子は學問を以て心を放つ地のなからしめんとせり、是二儒學風の異同なり、又荀子の最も卓見と稱すべきは、天變祲祥の説を成さずして、更に天人の際に於て、至當不易の論を爲せしこと是なり、其の天論篇に曰く、

天行有常、不爲堯存、不爲桀亡、應之以治、則吉、應之以亂、則凶、疆本而節用、則天不能貧、養備而動時、則天不能病、脩道而不貳、則天不能禍、故水旱不能使之饑渴、寒暑不能使之疾、妖怪不能使之凶、本荒而用侈、則天不能使之富、養略而動罕、則天不能使之全、倍道而妄行、則天不能使之吉、

と、是の時に當りて、祲祥妖怪の説、大に行はれ、騶衍、騶奭の徒、隨て無稽荒唐の辭を馳せたりしかは、一時談天術、彫龍奭の諛語あるに至れり、而して人智の未だ開けざる、理を見るの明なく、凡天地陰陽の變化災害を擧げて、人事の吉凶禍福と相聯繫するものと思惟し、日月の蝕を觀ては、輒ち君徳の缺くるあるを云ひ、山鳴り石隕ちては、輒ち鬼神の冥怒に出つるを爲せしに、荀子は則ち其の妄誕不稽を闕て、天行自然の常ありて、人事吉凶の之に關せざるを論とし、更に之に申ぬるに、人妖の最も畏るべきを稱して云く、

星墜木鳴、國人皆恐、曰是何也、曰無何也、是天地之變、陰陽之化、物之罕至者也、怪之可也、畏之非也、夫日月之有蝕、風雨之不時、怪星之無見、是無世而不常有之、上明而政平、則是雖並世起、無傷也、上闇而政險、則是雖無一至者、無益也、夫星之墜、木之鳴、是天地之變、陰陽之化、物之罕者也、怪之可也、畏之非也、物之已至者、人妖則可畏也、楛耕傷稼、耘耨失穢、政險失民、田稼穢惡、糴貴民饑、道路有死、夫是之謂人妖、政令不明、舉措不時、本事不理、夫是之謂人妖、禮義不脩、內外無別、男女淫亂、則父子相疑、上下乖離、寇難並至、夫是之謂人妖、

と、其言の痛快なる、直に以て禪讓家の口を間執して、其頂門に礙するに足れり、誰か云ふ、荀子故らに奇論を立て、異なることを求むと、若夫蘇賦の荀卿論は、其意固より荀子に在らずして、王介甫に在るなり、世人未だ其意を察せず、動もすれば東坡一時輿論の言を以て、荀子の獄を斷せむとす、豈是先儒に對するの篤論ならむや、抑孟荀は匹偶なり、韓愈の孟子を崇ふと雖ども、猶能く孟荀と併稱す、而して孟に於ては則ち云ふ、醇乎として醇なる者なりと、更に荀に於ては則ち云ふ、大醇にして小疵ありと、韓氏は文に深き者なり、其の見る所、亦豈難據する所なからむや、嗚呼吾人之を知れり、荀子をして時に激語なからしめは、「醇乎醇」の稱語は、蓋孟子に於てせずして、必ら

す荀子に被りしこと久しきを、要するに、荀子は洵に周末の大儒にして、其の才氣は固より孟の下に在りしも、其博學なるに至りては遠く孟の上に出たりと云ふべし。

今試に孟荀二子の文を取りて之を讀むに、荀の冗蕪多きは、孟の簡潔なるに及はざるも、理を説くの精密にして詳熟なるに至りては、孟の遜色ある所なり、故に若し單に其の文を品せば、孟荀本と同日の論にあらず、孟子七篇の文字は、俊爽簡勁、昔錦繡の文なり、而して荀子の文は美惡相半して其の喜ふべき處は、雅麗に在れども、其の厭ふべきは只漫なるに在り、蓋文章は、才の使にして氣の馬なり、故に才以て之を出し、氣以て之を驅るにあらざれば、必らず好文字を成すこと能はず、而して孟は才氣に富み、荀は學問に長ず、是其の文の優劣する所なり、今夫市井の豪賈、海陸百萬の富を擁し、慧眼鋭視、糴糶其の時を得、廢舉其の機に中り、或は一擲千金の豪を擲はして俠骨の香に誇り、或は片言一諾の信に依りて、市井積聚の貨物を左右するもの、賈人の才氣なり、而して孟子の文、以て之に似るあり、田園春耕に多事にして、南山種豆の時を違えず、朝に露を踐て耘耨に疲れ、夕に星を戴て牛羊と與に歸り、以て麥熟の秋を待ち、粒を積んで倉裏實ち、菽麥溢れて水旱に驚かざるもの農夫の富なり、而して荀子の文、以て之に似るあり、讀者若し之を疑はば、二子の書、具さに在り、請ふ更に就て之を見よ、

魚熊之章 (孟子告子篇)

魚我所欲也、熊掌亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚而取熊掌者也、生亦我所欲也、義亦
 所欲也、二者不可得兼、舍生而取義者也、生亦我所欲、所欲有甚於生者、故不爲
 苟得也、死亦我所欲、所惡有甚於死者、故患有所不辟也、如使人之所欲莫甚於生、
 則凡可以得生者、何不用也、使人之所惡莫甚於死、則凡可以辟患者、何不爲也、由
 是則生、而有不用也、由是則可以辟患、而有不爲也、是故所欲、有甚於生者、所惡、
 有甚於死者、非獨賢者有是心也、人皆有之、賢者能勿喪耳、一箪食、一豆羹、得之則
 生、弗得則死、噉爾而與之、行道之人弗受、蹴爾而與之、乞人不屑也、萬鐘則不辨禮義、
 而受之、萬鐘於我何加焉、爲宮室之美、妻妾之奉、所識窮乏者得我與、鄉爲身死而不受、
 今爲宮室之美、爲之、鄉爲身死而不受、今爲妻妾之奉、爲之、鄉爲身死而不受、今爲
 所識窮乏者得我、而爲之、是亦不可以已乎、此之謂失其本心、

富國篇 (荀子)

持國之難易、事強暴之國難、使強暴之國事我易、事之以貨寶、則貨寶單、而交不結、約
 信盟約、則約定、而畔無日、割國之錙銖以賂之、則割定、而欲無饜、事之彌煩、其使人愈

甚、必至於資單國舉、然後已、唯左堯而右舜、未有能以此道得免焉者也、譬之是猶
 使處女嬰寶珠、佩寶玉、負戴黃金、而遇中山之盜、雖爲之逢、雖視、訓、要、撓、捫、君虛屋妾、
 由將不足以免之、故非有一人之道也、直將巧繁拜請、而畏事之、則不足以持國安身、
 故明君不道也、必將修禮以齊朝、正法以齊官、平政以齊民、然後節奏齊於朝、百事
 齊於官、衆庶齊於下、如是則近者競親、遠方致願、上下一心、三軍同力、名聲足以暴
 之、威強足以捶管之、拱揖指麾、而強暴之國莫不趨使、譬之是猶烏獲與焦撓、捫也、故
 曰事強暴之國難、使強暴之國事我易、此之謂也、

第三章 道家

第一節 老子及び其著書

既に前章總論に於て略叙したるか如く、道家の元祖を老子と爲す、其の道、虛無を以て旨と爲し、其
 の身を行ふや、清淨自持して、濟ふに堅忍の力を以てし、柔を以て剛を制し、退を以て進を爲せり、
 後世神怪の迹、多く道家に草附して、或は黃老の道と稱すれども、是其の支旁末流の徒、故らに其道
 を神祕にせんと欲して、迹を黃帝に托するものに過ぎざるのみ、豈道家の本旨ならむや。

老子は楚の苦縣の厲郷、曲仁里の人なり、姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡して聃と云ふ、周の守藏室の吏なり、孔子周に適き、將さに禮を老子に問はんとす、老子の曰く、子か言ふ所のものは、其人と骨と皆已に朽ちたり、獨り其言在るのみ、且つ君子、其時を得れば則ち恕し、其時を得ざれば蓬累して行る、吾聞く其言は深く藏めて虚しきか如く、君子は盛徳ありて容貌愚なるか如しと、子の驕氣と多欲と態色、淫志とを去れ、是皆子の身に益無し、吾の以て子に告る所、是の如きのみと、孔子去りて弟子に謂て曰く、鳥は吾其の能く飛ぶを知る、魚は吾其の能く泳ぐを知る、獸は吾其の能く走るを知る、走る者には以て罔を爲すべく、泳ぐ者には綸を爲すべく、飛ぶ者には罾を爲すべし、龍に至りては、吾其の風雲に乗して天に上るを知る能はず、吾今日老子を見るに、其れ猶龍の如きかと、老子道徳を修め、自ら隠れて名無きを以て務と爲す、周に居て、其の衰ふるを見、乃ち去りて關に至る、關の令尹喜云ふ、子將さに隠れんとす、疆ひて我の爲めに書を著せと、是に於て、老子乃ち書上下篇を著し、道徳の意を言ふこと五千餘言、去て其の終る所を知る莫しと云ふ。

老子の事迹は、其詳なること得て考ふべからず、右に記する所は、直に史記の文に據るものなり、其他諸書に雜出するもの甚多きも、多くは荒唐不稽なり、後漢書襄楷傳に云ふ、老子西域に入り浮屠と爲る、天神遺るに好女を以てせしも、堅く卻けて受けず、曰く此但草蕪に血を盛るのみと、又齊書顧歡傳に、老子關に入りて、天竺維衛國に之き、日精に乗りて、國王夫人の口中に入り、已にして降出す、佛道是より興ると記す、本傳に其の終る所を知らずと云ふ、故に其の不稽を論せずして、姑く附記すること此の如し。

老子の學の虛無恬淡を主とすることは、既に之を略叙せり、而して其の所謂虛無恬淡なるものは、全く一切の世智を離れて、嬰兒の舊に復歸するに在るなり、蓋一切の世智は、機巧を作るか故に、動もすれば荆棘邪儉の心を動かして、爭奪を生じ、又或は嫉惡排擠の念を盛にして、醜惡構陷の毒舌を挿ふ、珍寶を見ては之を得んと欲し、名位に對しては己先づ之に居らむことを思ふ、而して人生萬起萬滅の變、其間に出沒消長して、窮極あることなく、五尺の軀體、常に事物人我の勞と爲る、其の根源を探れば、全く嬰兒の心を喪ふか爲めなり、是老子の學の虛無恬淡を主として、人我未分の境を樂まんと欲する所以なり、而して其の世を厭ひ時を憤りて當時の社會を改造せんと欲せしめし意、亦以て之を見るべし、故に其の説く所、時に或は慷慨沉嘆に過ぐるものあり、隨て尋常一様の看を以て其の道を解すること能はずと雖ども、其意を推すときは、深遠幽邃の理を包含して、之を用ゐて益、其の盡きざるを見る、今其の所謂道なるものを按するに、其書開卷第一章に云ふ、

道可道非常道、名可名非常名、無名天地之始、有名萬物之母、故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼、此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門、

と、是其の道とは、即ち世間常言の道を以て道とするにあらすして、大小長短、方圓廣狹の得て限る所にあらす、故に既に名けて仁義禮智と云は、是老子の所謂道にはあらす、無名玄々の處、恍たり、惚たり、其妙存すと雖とも、亦何の名の稱すべきかわらむ、而して道の名、亦附する所無ふして、其道既に在らざるなく、是名の以て名くへからす、道の以て道とすへからざるものを以て、道と爲すものなり、其他種々の形容を以て、道体道用を説けり、試に左の數則を見よ、皆是其道を説くに奇警の言句を以てせるものなり。

谷神不死、是謂之玄牝、玄牝之門、是謂天地根、綿々若存、用之不勤、

有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、唯爲之名曰大、

孔徳之容、唯道是從、道之爲物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物、窈兮冥兮、其中有精、其精甚眞、其中有信、自古及今、其名不去、以閱衆甫、吾何以知衆甫之然哉、以此、

道沖而用之、或不盈、淵兮似萬物之宗、挫其鋭、解其紛、和其光、同其塵、湛兮似或存、吾不知其誰之子、象帝之先、

其の沖と曰ひ淵と曰ひ、恍惚寂寥と曰ふ、皆其の虛無幽玄の意を形容するなり、其の玄牝と云ひ天下母と云ふ、一に雌徳を稱するものなり、而して其能く柔を以て剛を制し、天下の至柔を以て天下の至堅に馳騁するの意、蓋亦此間より起る、要するに上掲數則の如きは、老子の其の道を説くに正而より正當の解釋を下せるものと云ふべく、爾餘の諸章に於て、一正一反、更に矯激の言を放て、恍慨礙俗の意を洩らせしものを見るに、多くは其道を反而より解釋せるものなり、而して老子の書中に於て、痛快鏗節、三嘆の思を爲すもの、毎に此の反面的解釋に在り、讀者試に下の數則を見は、亦必らず吾人と其感を同ふせむ、

天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已、……………是以聖人處無爲之事、行不言之教、

不尙賢使民不爭、不貴難得之貨使民不爲盜、不見可欲使心不亂、

吾所以有大患者、爲吾有身、及吾無身、吾有何患、

大道廢有仁義、智慧出有大偽、六親不和、有孝慈、國家昏亂有忠臣、絕聖棄智、民利百倍、絕

仁義、民復孝慈、絶巧棄利、盜賊無有、

今夫美、樂むべく、善、欲すへきか如くなるも、未だ其美を見ず、其善を知らざるの優れるに如かず、仁義忠孝、亦尙ふへきに似たるも、未だ大道自然に行はれて、仁義忠孝の名、因て立つ所なく、仁義忠孝の行、因て施す所なきの優れるに如かざるなり、而るに末俗機巧の人心を導て、此の境界に至らしめむには、聖を絶ち智を棄て、巧を去り利を棄て、太古の醇樸に歸せしめざるべからず、是老子の矯激抗壯の言多き所以にして、其意最も明白なりとす、老子の書、又兵術制度を藉りて、道の用を解釋せるもの多し、説者或は云ふ、老子専ら兵術制度を云ふと、然れども是亦言を老子に托せむと欲するものに過ぎず、今其數則を擧れば、

治大國若烹小鮮、以道蒞天下、其鬼不神、非其鬼不神、其神不傷人、非其神不傷人、聖人亦不傷之、夫兩不相傷、故德交歸焉、

善爲士者不武、善戰者不怒、善勝敵者不爭、善用兵者爲之下、是謂不爭之德、是謂用兵之力、

用兵有言、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺、是謂行無行、攘無臂、仍無敵、執無兵、禍莫大於輕敵、輕敵幾喪吾寶、故抗兵相加、哀者勝矣、

將欲歛之、必固張之、將欲弱之、必強之、將欲廢之、必固興之、將欲奪之、必固與之、

是謂微明、柔勝剛、弱勝強、魚不可脫於深淵、邦之利器不可示人、

申韓の法を言ひ、孫呉の兵を言ふもの、時に亦老子を祖述するありと雖ども、老子豈に曾て申韓孫呉の其説を窺ふて、慘酷兇暴の種子を樹つるに至るを意はむや、韓非に解老、喻老の篇あり、全く老子を祖述す、孫子兵を言ふ、亦全く主客虚實の意を老子に得るなり、特に右に掲ぐる第四則の如きは、寔に法家、兵家の奉して神髓と爲す所にあらずや、讀て「邦之利器不可示人」と云ふ、至りては、秋霜寒光、悚然として肩に粟するゐるを覺ふ、抑吾人は竊に此に由りて感ずるあり、夫兵は凶事と雖ども、四夷の守、必らず之に頼る、而して我備未だ全からず、士心日に消耗に就き、邦家の利器、動もすれば千里の夷種に窺はることありとすれば、其れ之を何とか云はむ、意ふに老子、厭世の意を抱て、虚無恬淡の道を樂むと雖ども、中心亦必らず自ら止むべからざるものありて、此言を爲す乎從來肉食の徒、家國の旦夜を憂へずして草茅隱澤の士、常に深愛あり嗚呼是何等の兆ぞや。

老子の學意一斑は略、此の如し、而して其の孔子と相異る、孔子は全く世間的にして、老子は全く出世間的なり、故に孔子は飽迄當時の社會を轉して、盛周の制度文物の美觀の如くならしめむとせし

も、老子は全く周もなく殷もなく、更に虞夏の制度もなき、太古醇樸の光景に復歸せしめんと欲せしなり、而して其身を行ふや、孔子は白首、死に至るまで、世道人心を以て念と爲し、苟も一息、天下に存する限りは、其心、天下を忘れざるの進取主義を取りしも、老子は淡然として嗜む所なく、飄然として着する所を見ず、花開き水流るゝ底の無爲自然の化に任して、物外に高舉せり、故に孔子は、其志の一半をも行ふこと能はざりしも、老子は少くとも其道を以て、獨り自ら善くせしことは、復た疑ふへからず、是孔老二聖の學の相異なる所にして、其の性行氣質、亦然らしむるものありなり、故に更に其人物を比較せむに、孔子は猶ほ鳳鳥の如く、老子は猶ほ龍の如きか、夫龍は神物なり、能く天地に上下して、川澤に雨らすも、其形跡は遂に以て見るへからず、鳳鳥は聖瑞なり、政平かに人和すれば、千歳時に來儀することあり、而して其の能く世間の物として、太平を文彩するに於ては、鳳鳥、無かるへからざるも、神龍、豈之に與りて其の頭尾を見さんや、則ち知るへし、孔子は聖人たりと雖ども、亦是人類たるを離れず、老子は仙流なり、其の横目豎鼻は、猶ほ人なりと雖ども、其の心志は、既に久しく人界の物にあらざるを、是二聖の人と爲りの相異なる所にして、亦其の學の相異なる所以なりとす。

老子の弟子に、文子、亢倉子の屬あり、並に書を著はして其道を言ふ、文子の書、道原篇以下十二

篇、殆んど老子道德經の釋傳なり、然れども亦依托に出るものに似たり、亢倉子の今行本は、唐の王士元の僞撰に係るものなり、又關尹子の一書あり、稱して尹喜の撰する所と云ふ、其文峻潔にして頗る愛讀するに堪えたりと雖ども、隋唐以來其の本書佚すること既に久しければ、蓋亦依托に出るものなるへし、或は云ふ今行本は、唐五代間の方士、文章を解する者の爲くる所ならむと、其説最も従ふべきに似たり、今皆闕略に従ひ、直に道家の孟荀たる列莊二子を、次節に叙せむと欲す。

第貳節 列禦寇、莊周、及び其書

列莊は道家の豪傑なり、道家の二子あるは、猶ほ儒家に孟荀あるか如し、然して列の學は以て荀に對すへく、莊の才は以て孟に駕すへし、吾人は既に孟荀二子を以て、儒學中興の祖と稱せり、則ち又列莊二子を稱して老門の宗師と呼ぶに於て、何の躊躇する所かわらむ。

列禦寇は鄭人なり、列は姓なり、禦寇は名なり、鄭の繻公と其時を同ふす、其の事蹟、傳ふる所なし、司馬遷諸子を傳して、墨翟、禽滑釐、慎到、田駢、關尹の徒を附見す、而して禦寇、獨り其列に在らず、故に後世或は其の存在を疑ふて、鴻蒙、列缺の流と爲す者あり、然れども是懷疑の更に過るもののみ、今其書に據りて人と爲りを案するに、『列子居鄭圃四十年、人無識者、國君卿大夫、賅之猶衆庶、隱居以て出ずして其道を樂めり、而して其の貧困なりしは、鄭の相、子陽の之に

粟を遺りしを見て知るべく、其の一技藝に長せしは、射を善くせしことの數、散見するを見て之を知るべし、他は今考ふべからず。

列子の書八篇、四庫全書總目に據れば、蓋其の自撰にあらず、其書皆子列子と稱すれば、必らず其學を傳ふる者の追記する所ならむ、然れども、其の確に秦以前の書たることは復た決して疑ふべからず、或は云ふ、其文明媚、人に近ければ、必らず、後人の會粹して成す所ならむと、今其文を反覆するに、之を莊子の文の艱澁なるに比すれば、較、平易なりと雖ども、其の事を書するの筋勁宏妙なるに至りては、決して後人の筆意にあらず、故に柳子厚も亦嘗て云ふ『列較、莊尤質厚』と、以て此の證を斷すべし。

列子の學は、全く老子に本て、其の清虛無爲の説を承述するものなり、而して其書多く古人を引き、寓言を以て文を行ふ、開卷第一章を天瑞篇と爲す、此篇天理を述べて死生を同視し、萬物の更に起滅する所なきの意を言へり、而して其文變化圓轉、筆端更に曲盡する所を見ず、今試に其の一節を拈くに、

子列子適衛食於道、從者見之百歲憊癯蓬、而指顧謂弟子百豐曰唯予與彼知、而未嘗生、未嘗死也、此過養乎、此過歎乎、種有幾、若龜爲鵝、得水爲鱉、得水土之際、則爲黿、

衣、生於陵屯、則爲陵鳥、陵鳥得澗栖、則爲鳥足、鳥足之根爲蟬、其葉爲胡蝶、胡蝶有也、化而爲蟲、生於窟下、其狀若脫、其名曰鵠、鵠掇千日、化而爲鳥、其名曰乾餘骨、乾餘骨之沫、爲斯彌、斯彌爲食醢、醢生乎食醢、黃軫、食醢黃軫生乎九猷、九猷生乎脊肉、脊肉生乎腐、腐生乎肝、肝化爲地臯、馬血之爲轉燐也、人血之爲野火也、鵠之爲鵠、鵠之爲布穀、布穀久復爲鵠也、燕之爲蛤也、田鼠之爲鵝也、朽瓜之爲魚也、老韭之爲覓也、老狗之爲狻也、魚卵之爲蟲、寔爰之獸、自孕而生曰類、河澤之鳥、視而生曰醜、純雌、其名大腰、純雄其名稱峰、思士不妻而感、思女不夫而孕、後稷生乎巨跡、伊尹生乎空桑、厥昭生乎濕、醜雞生乎酒、羊奚比乎不荀、久竹生青寧、青寧生程、程生馬、馬生人、人久入於機、萬物皆出於機、皆入於機、

と云ふか如き、全く寓言を以て文を行ひ迂僻荒怪、其の窮極する所を見ず、而して之を斷するに「出於機、入於機」の一句を以てす、其の意、畢竟死生化滅、自ら一定の理ありて、人生の必らず死るべからざる所なるを言ひ、以て形骸塵垢、死生榮辱の更に論するに足らざるを稱するものなり、而して列子の學の意、最も此に存す、其他、篇中を案するに、奇想幽思、一にして足らず、而して文筆の宏妙なること、亦能く之に稱して、殆んど人をして卷を釋く能はざらしむ、莊子の文、恍洋自

態なりと雖ども、其の意の原く所、毎に列子の文に在り、特に其意の列子に出るもの多きのみならず、其の文字句法の全く列子を踏襲するもの多きに至りては、轉々嗜然たるものなきと能はず、之を要するに、列子虛泊寥濶の志を懷て、深邃幽玄の思を湛え、以て亂世に居て利禍に遠かる、故に其言亦自ら幽玄清虛、世と競はず、死生を同視して天地を大觀するの旨に歸す、蓋諸子中に在りて、宇宙萬物に亘りて、玄理を云ふの最も精到なるもの、當に列子を以て第一と爲すべし、老子の書、玄理を談する者の奉して以て金版玉冊と爲す所なれども、其文字は、簡單にして大要を説くのみ、莊子の文は詳博なれども、其意は多く散漫にあらされは、踏襲の嫌を免る能はず、是列子の書の能く二子の中間に在りて、文意並ひ勝つと稱せらるゝ所以なり、然れども其の人と爲りの高古なるは、未だ老子に及はず、才力の放恣なるは、亦莊子に遜るあるに似たり、是亦讀者の必らず避るゝからざる所なりとす。

莊周は蒙人なり、蒙は今の安徽省なる蒙城縣にして、古宋に屬せり、或は云ふ、梁に屬せりと、周嘗て蒙の漆園の吏と爲る、梁の惠王、齊の宣王と時を同ふす、又適、孟子と時を並へて居りしも、互に其人ありしを知らざりしか如し、故に二子の書、更に相及はず、以て一奇と爲すべし、楚の威王周の賢なるを聞き、使をして幣を厚ふして之を迎へしめ、許すに相を以てす、周笑て使者に謂て

曰く、千金は重利、卿相は尊位なり、子獨り郊祭の犧牛を見すや、養ふて之に食ましむること數歳衣するに文繡を以てし、以て太廟に入る、是の時に當り、狐豚と爲らんと欲するも、豈得へけむや、子亟に去りて我を汚かすこと勿れ、我寧ろ汚穢の中に游戲して自ら快くし、國を有つ者に羈かるゝことなく、終身仕へず、以て吾志を快ふせむと、遂に應せず。

其學、亦老子の言に本き、事を指し情を類して、書十餘萬言を著はす、大抵率ね寓言なり、漁父、盜跖、胠篋諸篇の如き、皆以て孔子の徒を詆誡するものなり、其言、恍洋自恣、以て已に適す、其書、本と五十三篇ありと云ふ、然れども今存するものは、内、外篇及び雜篇を合せて三十三篇に過ぎず、或は云ふ郭子玄の註せし時、削定せるものなりと、且つ諸篇の文、亦果して全く莊子の手に出でしや、將た後人の竄入せし所これなきやは、古來頗る疑を存する所なり、其文曠恣怪奇、常律を以て論すへからざるも、其の意を興す處、毎に列子の文に在るに似たり、而して才以て之に視して、其の痕迹を留めず、大言小言、奔放脱逸、備に文筆の自在を極めたり、故に若し單に文筆を論せば、諸子中に於て莊子の上に出るものなかるべきも、其學の至境に至りては、吾人未だ其の列子と孰れか優劣するを知らざるなり、其書開卷第一を「逍遙遊」と爲す、是其の小大の辨にして、寓言を以て、巧に物の小大あるは、相對的に出るを云ひ、以て更に絕對的に、廣莫無何有の世界に逍遙すへ

きの意を云へり、而して莊子一生の本領學問、亦此間に於て概見するを得へし、試に此篇を三覆するに、其の

大浸磬天、而不灑、大旱金石流、土山焦、而不熱、是其塵垢粃糠、將猶陶鑄堯舜者也、孰肯以物爲事、

と云ふか如き、何等の警語ぞ、莊子の文の飄逸曠想、人の意表に出るもの毎に此の如し、「逍遙遊」に次ぐに「齊物論」あり、是其の均一の辨にして、萬物を齊ふるを論するもの、蓋亦「逍遙遊」と相待て莊子の學を始終するものなり、其意に以爲らく大智小智、大言小言、皆大小差別の見に拘束するものにして、紛々たる物論の其平を得ざるは、畢竟虛無の境界と冥合せざるか爲めなりと、故に曰く、

天下莫大於秋毫之末、而太山爲小、莫壽乎殤子、而彭祖爲夭、天地與我並生、而萬物與我爲一、

と、又曰く、

大道不稱、大辯不言、大仁不仁、大廉不嗛、大勇不怯、道昭而不道、言辯而不及、仁常而不成、廉清而不信、勇伎而不成、五者因而幾向、方矣、故知止其所不知至矣、孰知不言之辯、不

道之道、若有能知、此之謂天府、

と、而して人生の死生得脱、寵辱是非の念、朝暮に起滅變幻するもの、亦猶夢覺の時あるか如く、其の生を説ふもの果して惑ふにあらざるか、死を恐むもの、亦果して弱年に喪亡して家に歸るを知らざる者の如くならざるか、死生、畢竟何くにか歸す、况んや寵辱是非の細故に於てをや、而して莊周は亦此言を以て此意を出して曰く、

昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喻適志與、不知周也、俄然覺則遽々然周也、不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與、周與胡蝶則必有分矣、此之謂物化、

と、是莊子に於て最も著名なる胡蝶の夢の本文なり、列子にも亦蕉鹿夢の比喻あり、莊子の文意、蓋亦此より出るに似たり、然れども脱胎點化の工に至りては、亦決して之を没すへからず、其他諸篇を案するに、奇論好語、一にして足らず、皆其才思の洶湧、更に盡くる所なきを見るに足るなり、之を要するに列莊の二子、一は猶謙遜隱藏の意多きも、一は放縱不羈、常律を以て衡るへからず、故に一は曾て先儒を詆讖せざりしも、一は放言壯語、堯舜孔子を嘲笑して顧みず、一は猶文を以て其道を載するの具と爲せしか如きも、一は殆んど文を以て戯と爲せしものに似たり、是二子の異同なり、蓋才氣平庸なる者は、其言多くは亦平凡にして、文彩光華ならざるも、其人、素と雄才逸趣

に富み、時に牢騷不平を懷て、抑鬱屈、自ら伸ふるとを得ざる者は、其辭に發するもの、亦必らず抗壯激詭、放恣憤慨に過ぐるありて、古聖前賢を見ることが猶土芥の如く、殊に當世の士大夫に對するに至りては、之を見ることが腐肉を見るか如く、之を罵ること犬豚を驅逐するが如くし、以て其憤懣不平の氣を洩らせしもの、古人に於て往々見る所なり、而して莊子も亦其一入たるを免る能はず、然らすむは、豈何物の狂か好んで背世遠俗の言を爲して、遂に草茅蓬蒿の下に究死せんや、然らば則ち徒に莊周一流の人を目して、放言高談の徒と爲すもの、豈其本意を得るとせむや、吾人は、爲めに一掬の涙を灑て、千歳古人の冤を雪かさるゝからず、

天瑞篇(列子)

子列子曰、天地無全功、聖人無全能、萬物無全用、故天職生覆、地職生載、聖職教化、物職所宜、然則天有所短、地有所長、聖有所否、物有所通、何則生覆者、不能形載、形載者不能教化、教化者不能違所宜、宜定者不出所位、故天地之道、非陰則陽、聖人之教、非仁則義、萬物之宜、非柔則剛、此皆隨所宜、而不能出所位者也、故有生者、有生、生者、有則形者、有形、形者、有生、生者、有色者、有色、色者、有味者、有味、味者、有生、生者、死矣、而生、生者、未嘗終、形之所、形者、實矣、而形、形者、未嘗有、聲之所、聲者、聞矣、而聲、聲者、未

嘗發、色之所、色者、彰矣、而色、色者、未嘗顯、味之所、味者、嘗矣、而味、味者、未嘗呈、皆無爲之職也、能陰能陽、能柔能剛、能短能長、能圓能方、能生能死、能暴能涼、能浮能沈、能宮能商、能出能沒、能玄能黃、能甘能苦、能煎能香、無知也、無能也、而無不知也、而無不能也、

齊物論(莊子)

罔鶴子問乎長梧子曰、吾聞諸夫子、聖人不從事於務、不就利、不違害、不喜求、不緣道、無謂有謂、有謂無謂、而游乎塵垢之外、夫子以爲孟浪之言、而我以爲妙道之行也、吾子以爲奚若、長梧子曰、是黃帝之所聽發也、而丘也、何足以知之、且女亦太早計、見卵而求時夜、見彈而求鸚鵡、予嘗爲女妄言之、女以妄聽之、盡旁日月、挾宇宙、爲其脗合、世其滑滑、以隸相尊、衆人役役、聖人愚菴、參萬物而一成純、萬物盡然、而以是相繼、予惡乎知說生之非、或耶、予惡乎知惡死之非、弱喪而不知歸者耶、麗之姬、艾封人之子也、晉國之始得之也、涕泣沾襟、及其至於王所、與王同筐牀、食芻豢、而後悔其泣也、予惡乎知夫死者不悔其始之嗚乎、生乎、夢飲酒者、且而哭泣、夢哭泣者、且而田獵、方其夢也、不知其夢也、夢之中、又占其夢焉、覺而後知其夢也、且有大大覺、而後知此其大夢也、而愚者自以爲覺、竊竊然知之、君乎牧乎、固哉、丘也與、女曾夢也、予謂女夢亦夢也、是其言也、其名爲吊龍、萬世之後、

而一遇大聖知其解者、是且慕遇之也、

第四章 墨家

墨翟、及び其書

墨家は、墨翟を以て祖と爲す、其學亦古の聖人を稱して、兼愛、節用の旨を説くこと甚し、至れり、藝文志に曰く、『墨家者流蓋出於清廟之守、茅屋采椽、是以貴儉、養三老五更、是以兼愛、選士大射、是以上賢、宗祀嚴父、是以右鬼、順四時而行、是以非命、以孝視天下、是以上同、是其所長也、』と、蓋其學、亦世道を經紀して治化を保持するに在り、而して其勢力、亦儒家と頗頗して、儒墨の稱あるに至る、韓非子、顯學篇に曰く、『世之顯學、儒墨也、儒之所至、孔丘也、墨之所至、墨翟也、』と、即ち是なり、後世揚墨異端の論、盛に儒者の徒に起るに及びて、其學、漸く衰ふ、然れども儒者の言、多くは其弊を見るに厚くして、其利を察するに薄きものなれば、未だ驟かに之を以て儒墨の優劣を定むべからざるなり。

墨翟は宋人なり、宋に仕て太夫と爲る、其の平生の行事は、得て詳にすべからざれども、大抵殆んど孔子と其時を同ふして、稍之に後れたるか如し、而して孟荀列莊諸子に於ては、全く前人たりしこと、諸子の書中、能く墨子に及ぶものあるを見て之を知るべし、之を要するに、墨子は戰國の賢士大夫にして、眼を世道に着けて、救世平治の實務を講せし者たることは、復た必らず之を疑ふべからず。

其書、漢志には七十一篇と稱す、今存するもの五十三篇、篇中子墨子と稱するもの多きを見れば、亦其弟子の撰に係るものならむ、而して其の言ふ所、大抵皆平治の道にして、甚し理に悖らず、兼愛篇は、其學の中堅と稱すべきものにして、墨子一生の本領、亦此に在り、其意以爲らく、天下の亂端は、畢竟人々の自愛自利を主として、相愛せざるに起る、故に之を濟ふには兼愛の理を以てするに如かずと、即ち曰く、

盜愛其室、不愛其異室、故竊異室、以利其室、賊愛其身、不愛人、故賊人以利其身、此何也、皆起不相愛、唯至大夫之相亂家、諸侯之相攻國者亦然、……故聖人以治天下爲事者、惡得不禁惡而勸愛、故天下兼相愛、則治、相惡則亂、

と、而して其の所謂兼相愛し、交、相利するの法は、人の家を見ること其家を見るか如く、人の身を見ること其身を見るか如くせしめんとするに外ならず、後世孟軻之を闢て父を無にするに至ると云ひしは、蓋兼愛の意を推して親疎を別つを知らざるに至らむことを懼れたるに外ならず、然れど

も、當時攻城野戰、動もすれば血を流し、人を殺して、人の國を奪ひ人の財貨を掠めて、自利自愛の欲を恣にするの状況なりしか故に、寧ろ親疏の別を忘るゝに至るも、自利我欲の獐狂心を去りて、愛惠和煦の慈風を扇かしむるに如かず、志士仁人の言を天下に立つる、必らずしも天下萬世の標準たるべきにのみ拘泥すべからず、一世の禍害を見ては、直に其病に應じて之を藥石を施して、其の救濟回起を期するに在るのみ、孟軻元來時勢を知らず、其説を立つるや、頗る迂遠に過ぐるものあり、若し之を後昆に告げて萬世の標準と爲すに於ては、或は貴ぶべきものあるに似たるも、墨子立言の旨を察せず、徒に大聲痛擧して、墨家を闢き得たりとするは、最も其眼識の足らざるを見るに足るなり、故に墨子立言の意を諦觀せば、大に條理ありて決して後世の之を刺駁せしか如くならざるを知らん、其他、墨子治平の意、皆其本を固ふして其用を節し、賢を尙ひ鬼を敬するに在り、而して其の最も厭惡せし所は、戰鬪殺戮、不仁の行に在り、是其學の能く自ら其身を奮にして、其物を利濟すと稱せらるゝ所以なり。

其文暢達にして、文意頗る連續せり、諸子の文、動もすれば或は文意馳騁して、篇々の意、斷續定りなく、其の指歸を得るに苦むもの多きも、墨子の文は、其の艱澁の語少きと同時に、又能く篇章首尾の整頓して、其意の諸篇を聯貫するあるは、最も獨出と稱するに足る、然れども其の重複累贅

多きに至りては、亦其の病處と稱すべきか、之を要するに、其文筆に於ては未だ孟莊諸子と管を執りて翰墨の場に周旋するに足らざるものあるに似たり。

墨子の弟子に、禽滑釐、隨巢、胡非の徒あり、隨巢、胡非の二子、本と書あり、然れども、其本書今復た存せず、世に稱する隨巢子、胡非子等の諸篇は、皆後人の假託に出るものなり、韓非子曰く『自墨子之死也、有相里氏之墨、有相夫氏之墨、有鄧陵氏之墨』と、韓子の墨子を距ること甚、遠しと爲さず、其の所謂相里相夫、鄧陵の諸氏とは、意ふに隨巢、胡非の徒にあらざるか、抑亦別人なるや、今皆考ふべからず、要するに、其學後世甚盛ならずと雖ども、唐の時に、韓愈の稱して儒名にして墨行なる者ありと云へるか如き、其の人に存するもの、未だ全く絶滅に至らざりしを見るなり、是其學の長する所、猶以て後世に自立するに足るあるを以てなり、然らば則ち其長を取りて、其弊を捨るは、治平の道にして、抑亦諸子を讀むの法と云はざるべからず。

親士(墨子)

入國而不存其士、則亡國矣、見賢而不急、則緩其君矣、非賢無急、非士無與慮國、緩賢忘士、而能以其國存者、未嘗有也、昔者文公出走而正天下、桓公去國而霸諸侯、越王句踐遇吳王之醜、而尙攝中國之賢君、三子之能違名成功于天下也、皆於其國抑而大醜也、大

上無敗、其次敗而有以成、此之謂用民、吾聞之、曰、非無安居也、我無安心也、非無足財也、我無足心也、是故君子自難、而易彼、衆人自易而難彼、君子進不取、其志、內究其情、雖難、庸民終無怨心、彼有自信者也、是故爲其所難者、必得其所欲焉、未聞爲其所欲、而免其所惡者也、是故偏臣傷君、諂下傷上、君必有非非之臣、上必有諂諂之下、分議者延延、而支荷者諂諂、焉可以長生保國、臣下重其爵位、而不言、近臣則暗、遠臣則險險、怨結于民心、諂諂在側、善議障塞、則國危矣、桀紂不以其無天下之士邪、殺其身而喪天下、故曰、歸國寶、不若獻賢而進士、金有五錐、此其銛銛者必先挫、有五刀、此其錯錯者必先廢、是以甘井近竭、招木近伐、靈龜近灼、神蛇近暴、是故比干之殲、其抗也、孟賁之殺、其勇也、西施之沈、其美也、吳起之裂、其事也、故彼人者、寡不死其所長、故曰太盛難守也、故雖有賢君、不愛無功之臣、雖有慈父、不愛無益之子、是故不勝其任而處其位、非此位之人也、不勝其爵而處其祿、非此祿之主也、良弓難張、然可以及高入深、良馬難乘、然可以任重致遠、良才難令、然可以致君見尊、是故江河不惡小谷之滿己也、故能大、聖人者事無辭也、物無違也、故能爲天下器、是故江河之水、非一源也、千鈞之裘、非一狐之白也、是故天地不昭昭、大水不漭漭、大火不燎燎、王德不覺覺者、乃千人之長也、其直知矢、其平如砥、不足國矣、

以覆萬物、是故器狹者速涸、逝淺者速竭、境埒者其地不育、王者淳澤不出宮中、則不能流國矣、

第五章 法家

管仲、商鞅、申不害、韓非、及び其書

法家の學は、當時の政刑を論するものにして、其要、法を以て天下を細して、一に之を術に本くるに在り、藝文志に云く「法家者流、蓋出於理官、信賞必罰、以輔禮制」と、而して其の鼻祖たる者を擧げんには、必らず管仲を以て之に擬せざるべからず、世稱して管商申韓の四子を法家の雄と爲す、其他同しく法家の流を酌て、雜ふるに儒墨名道の意を以てする者、亦甚多けれども、今皆之を爰に列せず。

管仲は齊人なり、少時、鮑叔と友とし善し、鮑叔、其の賢なるを知りて善く之を遇す、後之を桓公に薦む、管仲既に用られて齊の政に任す、桓公の諸侯を九合して天下に覇たる、管仲之か謀を爲せばなり、故に管仲常に云ふ、我を生む者は父母なり、我を知る者は鮑子なりと、而して天下亦管仲の賢を多とせすして、鮑叔か善く人を知るを多とせりと云ふ。

管子の書、蓋一人の筆に成るものにあらず、又必らず一時の書にあらず、意ふに其書の過半は、後の好事者の加ふる所にして、大抵後人の附會せるもの、仲の本書より多きことは、四庫總目にも之を論せり、朱熹の如きは、則ち云ふ管子は功業を以て著はるものなれば、恐くは未だ必らずしも書を著はさずと、是頗る臆断に過くと雖ども、管子の書、其死後の事を記するあるを見れば、後人の竄入せしもの、甚多く混することは、決して之を掩ふべからず、而して其の記する所、霸者功利のみにして、猶治化に於て相關せざるものにあらずのみならず、其意能く古今の世變に應じて其常を變し、以て其窮を通せり、是霸術の正に王道衰頽の餘に出る所以にして、世運の趨勢、定に亦然らざるを得ざるものあるなり、其牧民、形勢、修權諸篇の如き、文意並高く、直に以て其學意を概見するに足る、若夫れ竄入附會の文は、今悉く之を辨せず。

商鞅は衛の庶孽公子なり、少くして刑名の學を好む、秦の孝公、令を下して賢者を求むと聞き、秦に入りて孝公の寵臣景監に因り、三たひ孝公に説て其意に中り、大に秦に用らる、是に於て、法令を變して、内は耕織を獎勵し、外は國境を拓き、峻刑酷誨、血を流して法威を立て、遂に以て其國を富強にせり、秦之を商於の十五邑に封し、號して商君と云ふ、孝公卒して後、窘迫せられて、徒屬と邑兵を發す、秦兵之を殺し、車裂して國中に徇ふ、蓋其の天資刻薄、百姓の怨を畜ふこと一日の故

にあらず、遂に此に至る、天道不仁に與せず、鞅の身家を滅す、蓋亦遲し矣。

商子の一書、漢志には商君二十九篇と稱す、其の商子と稱するは隋志より始まる、今存するもの、更法、懲令以下二十四篇、其目ありて其文なきもの二篇、其書亦商鞅の自著にあらずして、恐くは法家者流、鞅の餘論を撮收して以て編を成すものならむ、然れども其文辭は洵に先秦剽勁の氣多く、決して後世偽撰家の筆意にあらず、其學、君子の取らざる所なりと雖ども、其文辭に至りては、亦君子采非の意、宜しく以て之を節取して可なり、讀者若し試に其の懲令、農戰諸篇の文を把翫せば、擧節、三嘆亦必らず唐宋を抛棄して明清に唾下するの思を生ぜむ。

申不害は鄭の賤臣なり、刑名法術を以て韓の昭侯を干す、昭侯以て相と爲し、内は政教を修めて、外は諸侯に應じ、國治り兵彊く、申子の身を終るまで、韓を侵す者あることなし、其學、黃老に本て刑名を主とす、書六篇を著はす、號して申子と云ふ、然れども、其書今傳らず。

韓非は韓の諸公子なり、刑名法術の學を喜む、人と爲り、口吃して道説すること能はず、嘗て李斯と與に荀卿に事ふ、斯自ら以て非に如かすと爲す、非、韓の日に削弱せらるるを見、數、書を以て韓王を諫めしも、韓王用る能はず、是に於て、孤憤、五蠹、内外儲、說難諸篇以下、十餘萬言を著す、後秦急に韓を攻む、韓王始め非を用ゐず、急なるに及びて、乃ち非を秦に使す、秦之を留めて還さず、李

斯、姚賈の徒交、之を毀害して遂に獄に下す、李斯人をして非に藥を遺らしめて之を殺す、嗚呼甚哉、李韓は本と同門の故人なり、而して其能を嫉むや、則ち忽ち機心を發て之を枉殺す、才智術數の徒、多くは冷々然として情誼の何たるを解せず、況んや義方に於てをや、故に其の極盡する所、毎に嫉惡相害して遂に顧みざるに至るもの、概ね此の如し、誰か云ふ同門相輔くと、嗚呼排擠摺陷却て讀書文字の人に存す、豈以て深慨せざるへけむや。

韓非の學、固より刑名法術の旨に外ならず、直に刻覈嚴峻を以て、極致と爲すものなり、試に其書を觀るに、法に據りて恩意を見ず、術に任して恻隱なく、父子夫婦、俱に相信するに足らずと爲すに至りては、四躄毛髮、悚然として猶寒きを覺ゆ、蓋商鞅は法を以て秦を治め、申不害は術を以て韓を治めたりしが、韓非に及ては、申商の旨を並取して之を用んとせり、其書、文氣跌宕、波瀾起伏、章法句法、起結照應等の齊整嚴律なること、亦猶其の學風に類せり、特に其の説難孤憤、備内諸篇等の人情を揣摩し、胸臆を推測して、皮肉痛苦の言を爲すに至りては、老吏獄を斷するか如く、筆勢掀舞して巧緻限りなく、金針密に繼て絲分亂れず、千古以來、達意を主とするの文に在りて、法度の森嚴なるもの、應さに韓子の右に出るものなかるべし、若夫莊周、孟軻等の文、奇は則ち奇にして、美は則ち美なりと雖ども、單に法度を以て之を論せむには、二子も亦當さに一籌を輸すべし、

然れども、韓子の文の篇幅一律にして、絶て變化に乏しきに至りては、古人も亦嘗て之を論せり、故に今復た之に及はず、下に法家諸子の文例を列擧す、

牧民 (管子)

凡有地牧民者、務在四時、守在倉廩、國多財、則遠者來、地辟舉、則民留處、倉廩實、則知禮節、衣食足、則知榮辱、上服度、則六親固、四維張、則君令行、故省刑之要、在禁文巧、守國之度、在飾四維、順民之經、在明鬼神、祇山川、敬宗廟、恭祖舊、不務天時、則財不生、不務地利、則倉廩不盈、野蕪曠、則民乃菅、上無量、則民乃妄、文巧不禁、則民乃淫、不彊兩原、則刑乃繁、不明鬼神、則隕民不悟、不祇山川、則威令不聞、不敬宗廟、則民乃上桀、不恭祖舊、則孝悌不備、四維不張、國乃滅亡、國有四維、一維絶、則傾、二維絶、則危、三維絶、則覆、四維絶、則滅、傾可正也、危可安也、覆可起也、滅不可復措也、何謂四維、一曰禮、二曰義、三曰廉、四曰耻、禮不踰節、義不自進、廉不蔽惡、耻不從枉、故不踰節、則上位安、不自進、則民無巧詐、不蔽惡、則行自全、不從枉、則邪事不生、政之所興、在順民心、政之所廢、在逆民心、民惡憂勞、我佚樂之、民惡貧賤、我富貴之、民惡危墜、我存安之、民惡滅絕、我生育之、能佚樂之、則民爲之憂勞、能富

此之、則民爲之貧賤、能存安之、則民爲之危墜、能生育之、則民爲之滅絕、故刑罰不足以畏其意、殺戮不足以服其心、故刑罰繁、而意不恐、則令不行矣、殺戮衆、而心不服、則上位危矣、故從其四欲、則違者自親、行其四惡、則近者叛之、故知予之爲取者、政之實也、措國于不傾之地、積于不涸之倉、藏于不竭之府、下令于流水之原、使民于不爭之官、明必死之路、開必得之門、不爲不可成、不求不可得、不處不可久、不行不可復、措國於不傾之地者、授有德也、積于不涸之倉者、務五穀也、藏于不竭之府者、養桑麻育六畜也、下令于流水之原者、令順民心也、使民于不爭之官者、使各爲其所長也、明必死之路者、嚴刑罰也、開必得之門者、信慶賞也、不爲不可成者、量民力也、不求不可得者、不彊民以其所惡也、不處不可久者、不偷取一世也、不行不可復者、不欺其民也、故授有德、則國安、務五穀、則食足、養桑麻育六畜、則民富、令順民心、則威令行、使民各爲其所長、則用備、嚴刑罰、則民遠邪、信慶賞、則民輕難、量民力、則無事不成、不彊民以其所惡、則詐僞不生、不偷取一世、則民無怨心、不欺其民、則下親其上、以家爲鄉、鄉不可爲也、以鄉爲國、國不可爲也、以國爲天下、天下不可爲也、以家爲家、以鄉爲鄉、以國爲國、以天下爲天下、母曰不同生、違者不聽、母曰不同鄉、違者不行、母曰不同國、違者不從、如地如天、何私何親、如月如日、唯君之節、御民之轡、在上之所貴、道民之門、在上之所先、召民之路、在上之所好惡、故君求之、則臣得之、君嗜之、則臣食之、君好之、則臣服之、君惡之、則臣匿之、毋蔽汝惡、毋異汝度、賢者將不汝助、言室滿室、言堂滿堂、是謂聖王、城郭溝渠、不足以固守、兵甲疆力、不足以應敵、博地多財、不足以有衆、惟有道者、能備患于未形也、故禍不萌、天下不患無臣、患無君以使之、天下不患無財、患無入以分之、故知時者、可立以爲長、無私者、可置以爲政、審于時而察于用、而能備官者、可奉以爲君也、緩者後于事、吝于財者、失所親、信小人者失士、

聖令 (商子)

無宿治、則邪官不及爲私利於民、而百官之情、不相贊、則農有餘日、邪官不及爲私利於民、則農不做、農不做、而有餘日、則草必壅矣、嘗粟而稅、則上一、而民平、上一則信、信則臣不敢爲邪、民平則慎、慎則難變、上信而官不敢爲邪、民慎而難變、則下不非、上中不苦官、下不非上、中不苦官、則壯民疾、農不變、壯民疾、農不變、則少民學之不休、少民學之不休、則草必壅矣、無以外權爵位與官、則民不貴、學問、又不賤農民、不貴

無得反庸、車牛與重、設必當民、然則往來疾、則業不敗、農、業不敗、則草必
聖矣、無得為罪人、請於吏而饒食之、則姦民無主、姦民無主則為姦不勉、農民不傷、
姦民無樸、則農民不敗、農民不敗、則草必聖矣、

孤憤 (韓非子)

智術之士、必違見而明察、不明察、不能燭私、能法之士、必強毅而勁直、不勁直、不能矯
姦、人臣循令而從事、案法而治官、非謂重人也、重人也者、無令而擅為、虧法以利私、
耗國以便家、力能得其君、此所謂重人也、智術之士、明察聽用、且燭重人之陰情、能法之
士、勁直聽用、且矯重人之姦行、故智術能法之士用、則貴重之臣、必在細之外矣、是智法之士
與當塗之人、不可兩存之仇也、當塗之人擅事要、則外內為之用矣、是以諸侯不因、則事
不應、故敵國為之訟、百官不因、則業不進、故羣臣為之用、郎中不因、則不得近主、故
左右為之匿、學士不因、則獲祿薄、禮卑、故學士為之談也、此四助者、邪臣之所以自飾也、重人
不能忠主而進其仇、人主不能越四助而燭察其臣、故人主愈弊、而大臣愈重、凡當塗者之
與人主也、希不信愛也、又且習故、若夫即主心、同好惡、固其所自進也、官爵貴重、朋黨又
衆、而一國為之訟、則法術之士、欲于上者、非有所信愛之親、習故之澤也、又將以法術

之言、矯人主阿辟之心、是與人主相反也、處勢卑賤、無黨孤特、夫以疏遠與近愛信爭、
其數不勝也、以新旅與習故爭、其數不勝也、以反主意與同好爭、其數不勝也、以
輕賤與貴重爭、其數不勝也、以一口與一國爭、其數不勝也、法術之士、操五不勝之勢、
以歲數、而又不見、當塗之人、乘五勝之資、而且暮獨說于前、故法術之士、奚道得進、
而人主奚時得悟乎、故資必不勝、而勢不兩存、法術之士、焉得不危、其可以罪過、隱者、公
法而誅之、其不可被以罪過者、以私劍而窮之、是明法術而逆主上者、不僂于吏
誅、必死于私劍矣、朋黨比周、以弊主、言曲以便私者、必信于重人也、故其可以功伐
借者、以官爵貴之、其可借以美名者、以外權重之、是以弊主上、而趨于私門者、
不顯于官爵、必重于外權矣、今人主不合參驗、而行誅、不待見功而爵祿、故法術之士、
安能蒙死亡而進其說、姦邪之臣、安肯乘利而退其身、故主上愈卑、私門益尊、夫越雖國富
兵強、中國之主、皆知無益于已也、曰非吾所得制也、今有國者、雖地廣人衆、然而人主
壅蔽、大臣專權、是國為越也、智不類越、而不知不類其國、不察其類者也、人主所以
謂齊亡者、非地與城亡也、呂氏弗制、而田氏用之、所以謂晉亡者、亦非地與城亡
也、姬氏不制、而六卿專之也、今大臣執柄獨斷、而上弗知收、是人主不明也、與死人同

病者、不可生也、與亡國同事者、不可存也、今觀跡于齊晉、欲國安存、不可得也、凡法術之難行也、不獨萬乘、千乘亦然、人主之左右、不必智也、人主于人、有所智而聽之、因與左右論其言、是與愚人論智也、人主之左右、不必賢也、人主于人、有所賢而禮之、因與左右論其行、是與不肖論賢也、智者決策于愚人、賢士程行于不肖、則賢智之士羞、而人主之論悖矣、人臣之欲得官者、其修士且以精潔固身、其智士且以治辯進業、其修士不能以貨賂事人、恃其精潔、而更不能以枉法爲治、則修智之士、不事左右、不聽請謁矣、人主之左右、行非伯夷也、求索不得、貨賂不至、則精辯之功息、而毀隨之言起矣、治亂之功、制于近習、精潔之行、決于毀譽、則修智之吏廢、而人主之明塞矣、不以功伐決智行、不以參伍審罪過、而聽左右近習之言、則無能之士在廷、而愚汚之吏處官矣、萬乘之患、大臣太重、千乘之患、左右太信、此人主之所公患也、且人臣有大罪、人主有大夫、臣主之利與相異者也、何以明之哉、曰主利在有能而任官、臣利在無能而得事、主利在有勞而爵祿、臣利在無功而富貴、主利在豪傑使能、臣利在明黨用私、是以國地削、而私家富、主上卑、而大臣重、故主失勢、而臣得國、主更稱蕃臣、而相室剖符、此人臣之所以驕主便私也、故當世之重臣、主變勢而得固寵者、十無二三、是其故何也、人臣之罪

大也、臣有大罪者、其行欺主也、其罪當死亡也、智士者、遠見而畏于死亡、必不從重臣矣、賢士者、修廉而羞與姦臣欺其主、必不從重臣矣、是當塗者之徒屬、非愚而不知忠者、必汚而不避姦者也、大臣挾愚汚之人、上與之欺主、下與之收利、侵漁朋黨、比周相與、一口惑主、取法以亂士民、使國家危削、主上勞辱、此大罪也、臣有大罪、而主弗禁、此大失也、使其主有大失于上、臣有大罪于下、索國之不亡者、不可得也、

第六章 名家

公孫龍、尹文、及び其書

名家は、蓋古の禮官より出つ、古は名位同しからされは、禮も亦數を異にせり、故に名家の學は、直に名に拘て實を賈め、以て其治を爲さむと欲するものなり、而して其の嚴駁峭峻なる處、法家に似て、殆んど兄弟の如き觀を爲せり、故に古來多く連稱して刑名の學と云ふ。

名家の雄を、公孫龍、尹文と爲す、公孫龍は趙人なり、或は云ふ、字は子石、孔子の門人なりと、名實の散亂せると疾み、資材の長する所に因り、物を假り譬を取て、其の強辯を繼にせり、其書、本と十

四篇ありと云へども、今存するものは、跡府、白馬、指物、通變、堅白、名實等の六篇なりとす、其說隱微
俟、辭を設けて人を五里霧中に迷弄するに過ぎずと雖ども、其文の博辨、雄辯なるに至りては、洵に
以て當時の妙品と爲すに足る、而して特に其の白馬、指物、堅白諸篇の如きに至りては、最も其の綱
長の技を恣にするものなり、指物論に、

指也者、天下之所無也、物也者、天下之所_レ有也、以_レ天下之所_レ有、爲_レ天下之所_レ無未_レ可、天
下無_レ指、而物不可_レ謂_レ指也、不可_レ謂_レ指者非_レ指也、非_レ指者、物莫_レ非_レ指也、天下無_レ指、而
物不可_レ謂_レ指者、非_レ有_レ非_レ指也、非_レ有_レ非_レ指者、物莫_レ非_レ指也、物莫_レ非_レ指者、而指非_レ指
也、

と云ふか如き、憑虛架空、殆んど人をして其意を解するに苦ましむ、莊子更に嘲弄一番して云く、
指を以て指の指に非らざるを喻へんよりは、指に非ざるを以て指の指に非ざるを喻へんに若かすと、
又其の堅白論の如き、堅、白、石の三を擧げ、諦觀播弄して、

視_レ不得_レ其所_レ堅、而得_レ其所_レ白者、無_レ堅也、拊_レ不得_レ其所_レ白、而得_レ其所_レ堅、得_レ其所_レ堅也、無_レ
白也、

と云ふか如き、殆んど噴飯に堪えざるものなれども、突如として忽ち人を幻霧深沓の間に彷徨せし

むるの趣向あるに至りては、最も把翫すべきに堪えたり、而して所謂堅白異同の辨なるもの、實に
比に起源せり、公孫子の學風、略、毎に此の如し、王鳳州嘗て縱放強辨、儼然たる戰國の習なりと云
へるもの亦以て好評と稱すし。

尹文は公孫龍の弟子なり、齊の宣王の時に、稷下に遊ぶ、一説に云ふ、龍の前に在りと、今其の孰れ
か是なるを知らず、其書、治道を指陳して資老申韓の旨に出入す、故に故人謂ふ、道家より名家に至
り、名家より以て法家に至ると、然れども、大要、亦名家の範圍を出る能はず、其言に曰く、

大道無_レ形、稱器有_レ名、名也者、正_レ形者也、形正由_レ名、則名不可_レ差、故仲尼云必也正_レ名乎、
名不正則言不_レ順也、

と、蓋亦名家の意たるを知る、而して其の更に、
有_レ形者必有_レ名、有_レ名者未_レ必有_レ形、形而不_レ名、未_レ必失_レ其方圓白黑之實、名而不_レ可_レ不_レ稱、
名以_レ檢_レ其差、故亦有_レ名以_レ檢_レ形、形以_レ定_レ名、名以_レ定_レ事、事以_レ檢_レ名、察_レ其所_レ以_レ然、則形名之
與_レ事物、無_レ所_レ隱_レ其理一矣、

と云ふか如き、最も名實の遺意たるを見るなり、唯尹文の文、之を公孫子に比すれば、循々として明暢
なれば、讀誦、最も人に近しと爲す、意に亦或は後世の依托に出るにあらざるか、頗る疑を貽さ

るを得ず。

白馬論 (公孫龍子)

白馬非馬可乎、曰、可、曰、何哉、曰、馬者所以命形也、白者所以命色也、命色者非命形也、故曰白馬非馬、曰、有白馬不可謂無馬也、不可謂無馬者非馬也、有白馬爲有馬、白之非馬、何也、曰、求馬黃黑馬皆可致、求白馬黃黑馬不可致、使白馬乃馬也、是所求一也、所求二者、白者不異馬也、所求不異、如黃黑馬有可有不可、何也、可與不可、其相非明、故黃黑馬一也、而可以應有馬、而不可以應有白馬、是白馬之非馬審矣、曰、以馬之有色爲非馬、天下非有無色之馬也、天下無馬可乎、曰、馬固有有色、故有白馬、使馬無色、有馬如已耳、安取白馬、故白者非馬也、白馬者、馬與白也、馬與白馬也、故曰白馬非馬也、曰、馬未與白爲馬、白未與馬爲白、合馬與白復名白馬、是相與、以不相與、爲名未可、故曰白馬非馬未可、曰、以有白馬爲非馬、謂有白馬爲有黃馬可乎、曰、未可、曰、以有馬爲異有黃馬、是異黃馬於馬也、異黃馬於馬、是以黃馬爲非馬、以黃馬爲非馬、而以白馬爲有馬、此飛者入池、而棺槨異處、此天下之悖言亂辭也、曰、有白馬不可謂無馬者、離白之謂也、不離者有白馬、不可謂有馬也、故所以爲有馬者、獨以馬爲

有馬耳、非有白馬爲有馬、故其爲有馬也、不可以謂馬、馬也、曰、白者不定、所白忘之而可也、白馬者、言白定、所白也、定所白者非白也、馬者無去取於色、故黃黑皆所以應白馬者、有去取於色、黃黑馬皆所以以色去、故唯白馬獨可以應耳、無去者非有去也、故曰白馬非馬、

第七章 兵家

孫武、吳起、尉繚、及其書

兵家は、古の司馬の職に出で、國の軍備を掌る者なり、戰國の際、雄長並争して、人の國を攻め、人の城を圍むこと益多きに及び、愈其の實地の操縦に習熟し、隨て刺撃攻戰の法を論する者、亦益多く、孫武吳起の徒、身諸侯の軍師として、親しく兵旅の任に當り、又能く之を筆にして一家の言を立てたり、是に於てか、兵家の學始て世に盛なるを致せり、今則ち此等の諸人を爰に列叙す。

孫武は齊人なり、兵法を以て吳王闔閭に事して、其將と爲り、名を諸侯に顯はす、其書、藝文志に據れば、本と八十二篇ありしと云へども、今存するものは、始計以下の十三篇なりとす、或は云ふ、魏武、其の粹を取り、定めて十三篇と爲すと、然れども、司馬遷の史記の文、明かに吳王の言を

録して『子之十三篇、吾盡觀之矣』と記するを見れば、藝文志、誤謬を傳へたるか、抑又後世の附會する所なるか、未だ以て之を知るへからず、其文、精華峻潔にして、議論曲折、文章の妙技を盡せり、顧雍嘗て孫子を評して云く『莊妙於用虛、左妙於用實、兼之者孫子之論兵也』と、蓋孫子の文、惟武人の玉冊たるのみならずして、文士の最も當きに意を用ふべき文字たるなり。

吳起 は衛人なり、嘗て曾子に學事す、其母死せども家に歸らず、曾子之を薄しとして起と絶つ、起乃ち魯に之て兵法を學ひ、妻を殺して魯の將たることを求む、然れども、遂けずして魏に之て文侯に事へ、遂に其將と爲りて功あり、後楚に奔りて悼王の相と爲る、王死するに及び、宗室大臣、亂を作して起を攻め、遂に之を射殺す。

吳起の書、本と四十八篇ありしと云へども、今存するもの六篇に過ぎず、其書亦機權法制の説を立るものなり、然れども立言稍正に近し、古人云ふ、孫吳の書を比較するに、起の書は正に幾く、武の書は奇に一なりと、蓋其の國制、軍治を論するに、亦能く道徳仁義の旨に本て、教ふるに禮を以てし、厲すに義を以てするもの、猶其の『在徳不在險』の意を概見するに足る、然れども、其の文筆を論せば、整修は則ちこれありと雖ども、精華奇變に至りては、遠く孫武の下に在るを免れず。

尉繚の事蹟は詳ならず、或は云ふ魏人なりと、劉向別録に商君の學を爲すと云ふ、漢志雜家に其書

二十九篇と稱し、又兵家に三十一篇と稱す、今存するもの天官篇以下二十四篇、總て兵を論す、其文雄奇にして且つ法あり、其兵制、賞罰を言ふもの、鑿々として節に中り、攻城、守權の説、宛々として聽くべく、自ら戰國策士の口吻たるに愧ぢず、今下に三書の文例を掲出す。

軍形(孫子)

昔之善戰者、先爲不可勝、以待敵之可勝、不可勝在己、可勝在敵、故善戰者、能爲不可勝、不能使敵之必可勝、故曰勝可知、而不可爲、不可勝者守也、可勝者攻也、守則不足、攻則有餘、善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上、故能自保、而全勝也、見勝不過衆人所知、非善之善者也、戰勝而天下曰善非善之善者也、故舉秋毫、不爲多力、見日月、不爲明目、聞雷霆、不爲聰耳、古之所謂善戰者、勝於易、勝者也、故善戰者之勝也、無智名、無勇功、故其善戰勝不忒、不忒者、其所措勝、勝已敗者也、故善戰者、立於不敗之地、而不失敵之敗也、是故勝兵先勝、而後求戰、敗兵先戰、而後求勝、善用兵者、修道而保法、故能爲勝敗之政、兵法、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝、地生、度、度生、量、量生、數、數生、稱、稱生、勝、故勝兵若以鎰稱銖、敗兵若以銖稱鎰、勝者之戰、若決積水於千仞之谿、者形也。

料敵（吳子）

武侯謂吳起曰：今秦脅吾西、楚帶吾南、趙衝吾北、齊臨吾東、燕絕吾後、韓據吾前、六國之兵四守、勢甚不便、愛此如何、起對曰：夫安國家之道、先戒為寶、今君已戒、禍其遠矣、臣請論六國之俗、夫齊陣重、而不堅、秦陣散、而自闕、楚陣整、而不久、燕陣守而不走、三晉陣治而不用、夫齊性剛、其國富、君臣驕奢、而簡於細民、其政寬、而祿不均、一陣兩心、前重後輕、故重而不堅、擊此之道、必三分之、獵其左右、脅而從之、其陣可壞、秦性強、其地險、其政嚴、其賞罰信、其人不讓、皆有闕心、故散而自戰、擊此之道、必先示之以利、而引去之、士貪於得而離其將、乘乖獵散、設伏投機、其將可取、楚性弱、其地廣、其政騷、其民疲、故整而不久、擊此之道、襲亂其屯、先奪其氣、輕進速退、弊而勞之、勿與爭戰、其軍可敗、燕性慤、其民謹、好勇義、寡詐謀、故守而不走、擊此之道、觸而迫之、凌而遠之、馳而後之、則上疑而下懼、謹我車騎、必避之路、其將可虜、三晉者中國也、其性和、其政平、民疲於戰、習於兵、輕其將、薄其祿、士無死志、故治而不用、擊此之道、阻陣而壓之、衆來則拒之、去則追之、以倦其師、此其勢也、然則一軍之中、必有虎賁之士、力輕扛鼎、足輕戎馬、舉旗斬將、必有能者、若此之等、選而別之、愛而貴之、是謂軍命、其有工用五兵、材

力健疾、志在吞敵者、必加其爵列、可以決勝、厚其父母妻子、勸賞畏罰此堅陣之士、可與持久、能審料此、可以擊倍、武侯曰善、

制談（尉繚子）

凡兵制必先定、制先定則士不亂、士不亂則刑乃明、金鼓所指、則百人盡闕、陷行亂陣、則千人盡闕、覆軍殺將、則萬人齊刃、天下莫能當其戰矣、古者士有什伍、車有偏列、鼓鳴旗麾、先登者、未嘗非多力國士也、先死者、亦未嘗非多力國士也、損敵一人、而損我百人、此資敵而損我甚焉、世將不能禁、征役分軍而逃歸、或臨戰自北、則逃傷甚焉、世將不能禁、殺人於百步之外者、弓矢也、殺人於五十步之內者、矛戟也、將已歿、而士卒相戮、拗矢折矛、抱戟利後、發戰有此數者、內自敗也、世將不能禁、士失什伍、車失偏列、奇兵捐將而走、大眾亦走、世將不能禁、夫將能禁此四者、則高山陵之、深水絕之、堅陣犯之、不能禁此四者、猶亡舟楫、絕江河、不可得也、民非樂死而惡生也、號令明、法制審、故能使之前、明賞於前、決罰於後、是以發能中利、動則有功、今百人一卒、千人一司馬、萬人一將、以少誅衆、以弱誅強、試聽臣言其術、足使三軍之衆誅一人、無失刑、父不敢舍子、子不敢舍父、况國人乎、一賊仗劍擊於市、萬人無不避之者、臣聞非一人之獨勇、萬人皆不肯

也、何則必死與、必生、固不侔也、聽臣之術、足使三軍之衆爲一死賊、莫能當其前、莫能隨其後、而能獨出獨入焉、獨出獨入者、王霸之兵也、有提十萬之衆、而天下莫敢當者、誰、曰桓公也、有提七萬之衆、而天下莫敢當者、誰、曰吳起也、有提三萬之衆、而天下莫敢當者、誰、曰武子也、今天下諸國士所率、無不及二十萬之衆者、然不能濟功名者、不明乎禁舍開塞也、明其制、一人勝之、則十人亦以勝之也、十人勝之、則百千萬人亦以勝之也、故曰、便吾器用、養吾武勇、發之如鳥擊、如水赴千仞之谿、今國被患者以重幣出聘、以愛子出質、以地界出割、得天下助、卒名爲十萬、其實不過數萬爾、其兵來者無不謂其將、曰無爲人下先戰、其實不可得而戰也、量吾境內之民、無伍莫能正矣、經制十萬之衆、而主必能使之、衣吾衣、食吾食、戰不勝、守不固者、非吾民之罪、內自致也、天下諸國助我戰、猶其驥騁之駃、彼驚馬騁與角逐、何能紹吾氣哉、吾用天下之用爲、用吾制天下之制爲、制、修吾號令、明吾刑賞、使天下非農無所得食、非戰無所得得、使民揚臂爭出農戰、而天下無敵矣、故曰發號令、令信行國內、民言有可以勝敵者、毋許其空言、必試其能戰也、視人之地有之、分人之民而畜之、必能內有其賢者也、不能內有其賢、而欲有天下、必覆軍殺將、如此雖戰勝、而國益弱、得地而國益貧、由國中制弊矣、

第八章 雜家

鄧析、慎到、鶡冠、鬼谷等の諸書

雜家の學は、其の主とする所を一にせず、儒、墨、名、法の意を取り、合せて之を兼ね、以て衆説を貫穿して自家の見を參するもの、是雜家の長する所なり、蓋周末百氏の争ひ鳴るや、九流並ひ列して、其の旗幟甚、鮮明なりとす、而して雜家の學は、殆んど草に依らす木に附かざるの地位に在りて、巧に諸家の間に入らせしものに外ならず、今其の最も録々たる者を列叙すること下の如し。

鄧析 は鄭人にして子産と其時を同ふせり、刑名を好み兩可の説を操りて無窮の辭を設け、數子産の法を難して之を屈す、嘗て竹刑を作る、竹刑は簡法なり、魯の定公の九年に、鄭國、鄧析を誅して、其竹刑を用ふ。

鄧析子、無厚、轉辭の二篇あり、其文、節次相屬せず、亦撮拾の本にあらざるなきやは、古人も既に之を疑へり、其の大旨、亦法を察して威を立て、名に循て實を敷するに在り、蓋刑名家に於て最も近しと爲す、故に四庫全書には、鄧析を法家に列す。

慎到 は趙人なり、慎子二十四篇、漢志之を法家に列す、今存するもの止、五篇のみ、周氏涉筆に云ふ、稷下の言を能くする者、慎到の如きは、最も繆妄を屏去し、枝葉を剪削す、道に本て情に附し、法

を主として上に資む、田駢、尹文の徒の能く及ぶ所にあらざり、西庫全書總目に、慎子の學、釋氏に近し、其書大旨、物理の當然に因り、各一法を定めて之を守らんと欲し、法の外に求めざるも亦法の中に究にせすと云ふ、之を要するに、亦法家に於て最も近きものなり。

騶冠子 は、楚人なり、其の姓名を知らず、深山の中に居り、騶羽を以て冠を爲り、隱居、出でずして書を著す、號して騶冠子と云ふ、其學刑名を雜ふと雖ども、大旨道德に原本す、其文博辨にして宏肆なり、然れども今存する所の騶冠子、果して古の騶冠の書にして、後人の偽撰にあらざるや、否やは、尤も疑を存する所にして、柳子厚は、其書を讀みて盡く淺陋の言と爲し、以て好事者の偽撰たるべきを稱せり、韓退之は三たひ其の學問篇を讀みて、其不遇を悲めりと云ふ、意ふに二氏の讀みし所、其書を異にするか、抑今の傳ふる所、亦二氏の書と相異らざるか、今皆考ふべからず。

鬼谷子 は楚人なり、隱居して智を韜む、其の鬼谷に居るを以て、人呼て鬼谷先生と云ふ、蘇秦、張儀の徒、嘗て之に師事す、其書、漢志に錄せずして隋志に始て見ゆ、唐志には以て蘇秦の書と爲す、意ふに六朝間の依托に出るものか、然れども、其文の奇變詭偉なる、又果して六朝人の能くする所なるか、頗る疑ふに堪へたり、若夫掉闔揣摩の術は、宋景濂の所謂小夫蛇鼠の智にして、君子の唾法して取らざる所と爲すなり、吾人故に其術を惡んで特り其文を愛す。

以上列記せしもの、外に、晏子春秋、呂氏春秋等及び其他諸子の假托偽撰に出るもの甚多し、今一之を叙せずして、皆省略に従ふ。

無厚篇(鄧析子)

夫負_レ重者、患_レ塗遠、據_レ貴者憂_レ民離、負_レ重塗遠者、身疲而無_レ功、在_レ上離_レ民者、雖_レ勞而不_レ治、故智者量_レ塗而後負、明君視_レ民而出_レ政、獵_レ罷虎者、不_レ于_レ外國、釣_レ鯨鯢者、不_レ居_レ滯池、何則困非_レ罷虎之窟也、池非_レ鯨鯢之泉也、楚之不_レ汧流、陳之不_レ東塵、長盧之不_レ士、呂子之蒙耻、夫遊而不_レ見敬、不恭也、居而不_レ見愛、不仁也、言而不_レ見用、不信也、求而不能_レ得、無始也、謀而不_レ見喜、無理也、計而不_レ見從、遺道也、因_レ勢而發_レ譽、則行等而名殊、人齊而得_レ時、則力敵而功倍、其所以然_レ者、乘勢之在外、推_レ辨說、非_レ所_レ聽也、虛言向、非_レ所_レ應也、無益亂、非_レ舉也、故談者別_レ殊類、使_レ不_レ相害、序_レ異端、使_レ不_レ相亂、論_レ志通_レ意、非_レ務相乖也、若飾_レ詞以相亂、匿_レ詞以相亂移、非_レ古之辯也、慮不_レ先定、不_レ可_レ以應卒、兵不_レ關習、不_レ可_レ以當敵、廟算千里、帷幄之奇、百戰百勝、黃帝之師、死生自命、貧富自時、怨_レ天折_レ者、不_レ知_レ命也、怨_レ貧賤_レ者、不_レ知_レ時也、故臨_レ難不_レ懼、知_レ天命也、貧窮無_レ憾、達_レ時序也、凶饑之歲、父死_レ于室、子死_レ于戶、而不_レ相怨者、無_レ所_レ願也、同舟渡_レ海、中流遇_レ風、救_レ忠

若一、所愛同也。張羅而吹、唱和不差者、其利等也、故體痛者、口不能不呼、心悅者、顏不能不笑、實疲者以舉千鈞、實元者以及走兔、驅逸足于庭、求捷于檻、斯逆理而求之、猶倒裝而索領、事有遠而親、近而疎、就而不用、去而反求、風此四行、明主大愛也、夫水濁、則無掉尾之魚、政苛則無逸樂之士、故令煩則民詐、政擾則民不定、不治其本、而務其末、譬如拯溺、錘之以石、救火、投之以薪、

反應 (鬼谷子)

古之大化者、乃與無形俱生、反以觀往、覆以驗來、反以知古、覆以知今、反以知彼、覆以知己、動靜虛實之理、不合來今、反古而求之、事有反而得覆者、聖人之意也、不可不察、人言者動也、已默者靜也、因其言、聽其辭、言有不合者、反而求之、其應必出、言有象、事有比、其有象比、以觀其次、象者象其事、比者比其辭也、以無形求有聲、其鈞、語合事、得人實也、其張置網而取獸也、多張其會、而司之、道合其事、彼自由之、此釣人之網也、常持其網、驅之、其言無比、乃為之變、以象動之、以報其心、見其情、隨而收之已、反往彼覆、來言有象比、因而定基、重之覆之、反之覆之、萬事不失其辭、聖人所誘、愚智、事皆不疑、古善反應者、乃變鬼神以得其情、其變當也、而收之審也、收之不審、得情不

明、定基不審、變象比、必有反辭以還聽之、欲聞其聲、反嘿、欲張反臉、欲高反下、欲取反與、欲開情者、象而比之以收其辭、同聲相呼、實理同歸、或因此、或因彼、或以事上、或以收下、此聽真偽、知同異、得其情詐也、動作言嘿、與此出入、喜怒由此以見其式、皆以先定為之法則、以反求覆、觀其所托、故用此者、已欲平靜、以聽其辭、察其事、論萬物、別雄雌、雖非其事、見微知類、若探人而居其內、量其能、射其意也、反應不失、如騰蛇之所指、若羿之引矢、故知之始、已自知而後知人也、其相知也、如比目之魚、見形也、若光之與影也、其察言也、不失若磁石之取鍼、舌之取燔骨、其與人也微、其見情也疾、如陰與陽、如陽與陰、如圓與方、如方與圓、未見形、則以道之、既形、方以事之、進退左右、以是司之、已不先定、收人不正、事用不巧、是謂忘情、失道已審、先定以收人、策而無形容、莫見其門、是謂天神、

第九章 賦家

屈原、宋玉及び其賦

蘇文志に云く、「不歌而誦、謂之賦、登高能賦、可以為大夫、言感物造端、材知深美、可與圖

事、故可_レ以爲_二列大夫也_一』と、蓋昔時周の盛時に當りては、諸侯卿大夫以下、皆微言を以て相感し、詩を誦して其志を諭せしか、其の衰ふるに及て、聘問歌咏の事、列國に行はれず、詩を學ぶの士は逸して布衣に在り、而して賢人志を失ふの賦、由りて作るあり、楚人屈原、忠を含み潔を履みて、世に容れられず、耿介の志、遣る所なく、竟に之を辭に發せり、而して其の懷傷憂怫の言、竟に賦牀の門を開けり、原の弟子、宋玉亦能く師の意を推し、賦章を作爲して、遺響を嗣きしかは、賦牀竟に全く成る、而して二子皆楚人を以て楚俗方言を用ひたりしか故に、世に又之を楚辭と稱せり。

屈原 は名を平と云ふ、楚の同姓なり、楚の懷王の左徒と爲る、博聞強志、治亂に明かに辭令に嫻ふ、入りては王と國事を圖議して號令を出し、出ては賓客に接遇して諸侯に應對す、王甚く之に任す、上官大夫之と列を同ふし、寵を争ふて心に其の能を害す、懷王、屈原に憲令を造爲せしむ、屈原草稿を屬して未だ定めず、上官大夫見て之を奪はむとせしに、屈原與へず、因りて讒に遇ひ王に疎せらる、屈原以爲らく、王聽の聰ならざるは、讒諛の明を蔽へはなり、方正の容れられざるは、邪曲の公を害すればなりと、故に憂愁幽息して離騷を作る、屈原既に紉けられたるも、楚國を隱顧し、王室を懷ふて、忘ること能はず、江濱に至りて澤畔に行吟す、顔色憔悴し形容枯槁す、竟に「懷沙賦」を作り、石を懷て自ら汨羅に投して死す、屈原既に死するの後、楚に宋玉、唐勒、景差の徒あり、

皆辭を好て賦を作る、並に屈原の辭令を宗とす。

屈原の賦、離騷、九歌、天問、九章、遠遊、卜居、漁父等の諸篇あり、離騷は屈原既に紉に遇ひ、忠貞の志、愨る所を知らず、憂心煩亂、猶ほ上は唐虞三后の制を述へ、下は桀紂羿澆の敗を序て、君の一たひ覺悟して正道に反りて、己を召還せむことを冀ふの意を見すものなり、而して其結構、全く詩に依りて興を取り、類を引き譬を設く、故に善鳥、香草と云ふか如きは、以て忠貞に配し、惡禽、臭物は以て讒佞に、靈修、美人は以て君に比し、宓妃、佚女は賢臣に譬へ、虬龍、鸞鳳は君子に託し、飄風、雲霓を小人と爲せり、其詞は温にして雅、其義は皎として明かなり、故に讀む者其の文采を嘉して、其の清高を慕ひ、以て其の不遇を哀み、其志を闕きざるはなしと云ふ。

九歌、九章、天問以下の作、皆一として愁思怫鬱、憤懣無聊の餘に出でざるものなく、其人の境遇性情は竟に此等の諸篇を造作せしめたり、今夫君子忠貞の志を懷て、身を立て道を行ふに方り、姦邪讒佞欺負の徒、交之を傷害して、其毒を逞ふせむに、豈何人か憂心忡々として之を病まさらむや、楚辭の起る最も楚人忠孝の至を見るに足るなり、故に司馬遷之を稱して云ふ『國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂、若_二離騷者、可_レ謂_レ兼之矣_一』と、蓋是騷賦の直に詩の後を繼て、其の苗裔と稱せらる所以なり、若夫篇々に於ける文字上の批評は、今之に及はず。

宋玉 は屈原の弟子なり、字は子淵、楚人なり、仕て其の大夫と爲る、九辨、招魂等の諸賦を作る、九辨は、其の師の忠にして放逐せられしを閔惜して作るものなり、而して其辭悲秋に藉りて感と興し、幽凄悲傷の情、殆んど絶えんと欲す、故に世傳て秋を傷むの宋玉と云ふもの、蓋九辨の辭に因ると云ふ、招魂も亦其師を哀て作るものにして、其意、以爲らく屈子の愁恨、山澤に散漫し、魂魄放佚して、厥命亦將に落ちんとす、故に其の魂を招き、其精神を復へして、其年壽を延さしめんと欲すと、蓋亦懷王を諷諫し、其の覺悟して之を還さむことを欲するものなり、其辭九辨の剴切なるに及はずと雖ども、荒怪、奇多きに至りては、亦直に離騷の衣鉢を傳ふるものと云ふべし。

楚辭の賦は、全く上記の屈子師弟間に發達せるものにして、後世響を嗣て其音を摸する者、甚衆く、漢代に至りて、賈誼、淮南、劉向の徒、各其藩籬に傍ふて、作爲する所あり、王逸、遂に諸作を稟集して、楚辭章句を作る、而して賦體亦分れて二と爲る、事は下編漢代の部に出づ、今左に騷賦の例として屈原の懷沙(九章五)及び宋玉の九辨(四)を掲出す、

懷 沙

滔滔孟夏兮、草木莽々、傷懷永哀兮、汨徂南土、陶兮香々、孔靜幽鬱結紆軫兮、離慙而長鞠、撫情效志兮、侘屈以自抑、刑方以爲圓兮、常度未替、易初本勛兮、君子所鄙、章畫志墨兮、

前圖未改、内厚質正兮、大人所盛、巧僮不斲兮、孰察其撥正、玄文處幽兮、隙腹謂之不章、離婁微睇兮、譬以爲無明、變白而爲黑兮、倒上以爲下、風皇在茲兮、鷄鶩翔舞、同糝玉石兮、一概而相量、夫惟黨人之鄙固兮、羌不知余之所臧、任重載盛兮、陷滯而不濟、塊塊握瑜兮、窮不得所、示、邑犬群吠兮、吠所怪也、誹駿疑傑兮、固庸能也、文質疏內兮、衆不知余之異采、材樸委積兮、莫知余之所有、重仁襲義兮、謹厚以爲豐、重華不可遇兮、孰知余之從容、古固有不能並兮、豈知其故也、湯禹久遠兮、邈不可慕也、懲違改忿兮、抑心而自彊、離慙而不遷兮、願志之有像、進路北次兮、日昧昧其將暮、舒憂娛哀兮、限之以大故、亂曰、浩浩沅湘兮、分流汨兮、修路幽蔽兮、道遠忽兮、曾險恒悲兮、永歎慨兮、世既莫吾知兮、人心不可謂兮、懷情抱質兮、獨無匹兮、伯樂既沒兮、驥將焉程兮、人生有命兮、各有其所、錯兮、定心廣志、余何畏懼兮、傷爰哀、永歎咽兮、世溷不吾知、心不可謂兮、知死不可讓、願勿愛兮、明以告君子、吾將以爲類兮、

九 辨

竊悲夫蕙華之曾敷兮、紛旖旎乎都房、何曾華之無實兮、從風雨而飛颺、以爲君獨服此蕙兮、羌無以異於衆芳、閔奇思之不通兮、將去君而高翔、心闕憐之慘悽兮、願一見而有明、重無

怨而生離兮、中結軫而增傷、豈不憐陶而思君兮。君之門以九重、猛犬猶々而迎吠兮、關梁閉而不通、皇天淫溢而秋霖兮、后土何時而得漑、塊獨守此無澤兮、仰浮雲而永歎、何時俗之工巧兮、背細墨而改錯、却騏驎而不乘兮、策鸞駘而取路、當世豈無騏驎兮、誠莫之能善御、見執轡者非其人兮、故踟躕而遠去、鳧馬皆喙夫梁藻兮、風愈飄翔而高舉、圓鑿而方柄兮、吾固知其鉏鋸而難入、衆鳥皆有其所登棲兮、鳳獨遠々而無所集、願銜枚而無言兮、曾微君之渥洽、太公九十乃顯榮兮、誠未遇其匹合、謂騏驎兮安蹄、謂鳳皇兮安棲、變古易俗兮世衰、今之相舉肥、騏驎伏匿而不見夸、鳳皇高飛而不下、烏獸猶知喪德兮、何云賢士之不處、騏驎不驟進而求服兮、鳳亦不貪饕而妄食、君棄遠而不察兮、雖願忠其焉得、欲寂漠而絕端兮、竊不敢忘初之厚德、獨悲愁其傷人兮、馮憐々其何極、

第三篇 漢代の文學

第一章 總論

漢家四百五十餘年の業、高祖寛仁を以て之を前に創め、光武英傑の姿を抱て之を後に興せり、而して其の施設せし所は、自ら一代の人心を驅りて、政術法度の中に入らしめたるなり、然れども高祖の時に當りてや、撥亂反正の功、漸く成り、秦鹿既に其手に落ちしも、馬上、天下を得たるの餘勇は、動もすれば酒を被り儒を罵りて、昔年の故態を露すことあり、且又當時の所謂公卿大臣たる者は、皆尅々たる武夫にして、嘗て高祖に従ひ龍蛇變幻して、干戈矢石の場に縱横せしもののみなれば、或は箕坐して酒を飲む者あり、或は劍を抜て功を争ふ者ありて、朝廷の上、全く禮法儀式の節制あるを見ず、是に於てか叔孫通と云ふ者あり、高祖に説て曰く、儒者は與に進取し難きも、與に成を守るべし、臣願くは魯の諸生を徴して、臣の弟子と與に朝儀を起さむと、乃ち頗る古禮と秦の儀とを準酌して之を雜就す、七年長樂宮成りて群臣皆朝す、謁者禮を治む、諸侯王以下次を以て奉賀し、皆振恐肅敬せざるは莫く、其の酒を行き爵を獻するに當り、敢て誼諱して禮を失する者なし、高祖嘆して曰く、吾迺ち今日にして皇帝の貴を知ると、是漢家の禮法、始めて通に順て制定せられ

たるなり、然れども文教は猶ほ未だ全く興らず、陸賈と云ふ者あり、客を以て高祖に從て天下を定む、是に於て時々進んで詩書を稱説す、高祖毎に之を罵て曰く、乃公馬上に居て天下を得たり、安んぞ詩書を事とせんやと、賈も亦云く、馬上に居て天下を得たるも、馬上を以て之を治むへんやと、乃ち古今の成敗存亡せし所以の微を述て、書十二篇を奏す、高祖善と稱し、其書を號して新書と云ふ、是實に漢代に於ける文學の萌芽の始て其先を開きしものなり、而して漢家の業、蓋亦之に資せし所、決して少しと爲さざるなり。

是の時に當り、項楚既に亡ひて、四海始て一に定まりしも、秦の書を焚き儒を坑にせし後を承けたれば、圖書は盡く散亡し、書生は變して説客と爲りて、復た意を文學に致す者あるとなく、其の墜塞荒廢に歸せしこと、固に怪むに足らず、且新朝創業の際なれば、漢家の法章も未だ全く定る所あらず、其の生民に大害なきものは、一に秦の舊に由りしかは、挾書の律の如きも未だ之を除くに及はず、其の之を除きしは惠帝の四年にして、實に漢興て後、十二年を経過せし時に在るなり、此の如きの狀なるのみならず、惠帝没して牝鷄晨を司り、劉氏の祚、絶えざると變の如く中原の鹿、幾んど呂氏の羹と爲らむとせしに、幸にして宗室功臣の力、能く其種にあらざるものを鋤去し得たりと雖ども、何の暇ありてか復た文苑の開拓に餘力あらむや、孝文孝景の際に及んで、本を厚ふする

の政を行ひ、務めて民の痼疾を養ふて之と休息せんと欲せしかは、朝野漸く富實して、煙火萬里に亘り、文教亦稍興れり、然れども、當時黃老刑名の學、行はれ、賈誼の才の如き者ありしと雖ども、竟に大に任用せらるゝと能はず、隨て魯古禮文の事に至りては猶多く闕けたり、孝武位に即くに及び、趙綰、王臧の屬、儒學に明かに、帝も亦之に嚮ひ、幾たひか天下に籌咨して民間の俊茂を擧げたり、所謂賢良方正文學の士を招きしもの即ち是なり、是に於てか公孫弘は布衣より擢拔せられて丞相に至り、董仲舒は一代の宿儒を以て重く其對策に取られて、直に之を政治上に適用せらるゝに及へり、其言に曰く、

春秋大一統者、天地之常經、古今之通誼也、今師異道、人異論、百家殊方、指意不同、是以上亡以持一統、法制數變、下不知所守、臣愚以爲諸不在六藝之科、孔子之術者、皆絕其

其道、勿使並進、邪辟之說滅息、然後統紀可一、而法度可明、民知所從矣、
 と是明かに李斯の焚書の議に反駁し來るものにして、其文藝語氣の末に至るまで、何ぞ斯を離れざるの甚しき、試に斯の『今諸生不師今、而學古以非當世……如此弗禁、則主勢降乎上、黨與成乎下、禁之便、臣請史官非秦記、皆燒之、非博士官所職、天下有藏詩書百家語者、皆詣守尉雜燒之』と云ふものに對照すれば、思更に其半に過ぐるものあらむ、而して仲舒は此の

如く異學禁制の意見を提出せしと同時に、又大に儒學を振興せんと欲し、其方法として學士養成の策を立てたり、

夫不_レ素_レ養_レ士、而欲_レ求_レ賢、譬猶_レ不_レ琢_レ玉而求_レ文采_レ也、故養_レ士之大者、莫_レ大_レ乎大學、大學者賢士之所_レ關也、教化之本原也、今以_レ一郡一國之衆、對亡_レ應_レ書者、是王道往々而絕也、臣願陛下興_レ大學、置_レ明師、以養_レ天下之士、數考問以盡_レ其材、則英俊宜可_レ得矣、

是有名なる仲舒か天人策、命意の歸着する所にして、其の取捨如何は、應さに政治上に一大影響を及ぼすべきものたるを論を換たす、然るに武帝は大に其策に取る所あり、卓然として百家を罷黜して六經を表章し、學校を設けて五經、博士、弟子員を置き、茂才孝廉を擧げて以て之に職を命せり、然して後、天下の人、始て學に向ふことを知り、漢家の號令文章、煥焉として述ふべきに至れり、是偏に漢代に於ける文學の淵源せし所にして、素より武帝の學に向へるか爲めなりと雖とも、其端を啓きしものは、之を仲舒の對策に歸せざるべからず、而して其の能く斷々乎として之を執行せし所以のもの、未だ嘗て當時の宰相田蚡等の儒術を好んで、黃老の旨を賤したるに由らすんはならず、然らば則ち仲舒か對策の關係する所、決して淺少にあらざるなり、然れども若し更に之を細觀せば、其對策は局量褊狹の摸型を文學上に貽せしものと云はざるべからず、何となれば凡學術の進歩活

動するは、異論雜說の互に辯難攻取して相上下するの間に於て之を見るものなるに、仲舒は一代の儒宗として其學を天下に普及せしめむと欲するの餘、竟に制度を以て異學を禁遏し異主義の徒を撲滅せんと欲せしかば、其極、遂に思想、考察の活動を失はざるを得ず、儒學獨り其の宗を擅にせしも、異端雜說の對峙するものなければ、隨て比較、選擇、競争等の其間に起ることなく、活動の氣、絶えて、枯槁の色、來るは、蓋亦當然の理なりとす、是に於てか、學者の胸中、徒に禮文度數の沈滯するものあるも、變通應時の活識に乏しく、夢に周公、孔子を見るの篤志家なきにあらざるも、曾て肉身の聖賢に相見せず、未流漸く狭く、遂に復た周秦の盛を見ると能はざるに終れり、是豈に仲舒の嘗て夢にたも想到りし所ならむや、之を要するに、仲舒は一世を擧て儒學一統の世を爲さむと欲し、武帝は天下を打て人心一統の天下を造らむと欲したるなり、蓋一は守成の明主にして、他は儒學の功臣なり、故に其の主とする所、互に相同しからず、其の見る所、各相異なりしにも拘らず、兩者の意思は、竟に合躰して其の實行を見るに及へり、是漢家の制度の覇術を雜ふる所にして、其の文學の性質を知るに於て、最注意すべき要點なりとす。

是の時に方り、漢興りて既に百年に及はんとし、其の文物典章、亦蔚然として興るあり、之に加ふるに、文景以來、富厚の治、方に久しく、朝野安寧にして太平を娛み、四方の交通は盛に開けて、

西域、南越の路、亦通し、珍禽異獸は驛路に相望み、柏梁、承露の觀は以て太平榮華の氣象を顯はして、漢家の盛運、方に極る、是に於てか之を謳歌するの辭賦、新聲も亦隨て興るあり、韻文、散文の作者、又多く此の際に輩出す、是に於てか歴史家には司馬遷あり、辭章には鄒陽、枚乘、司馬相如の徒ありて各其盛を鳴らせり、而して漢代文學の全盛、亦此時に極る、是より先き、六經の厄に遭ふや、老儒宿學、或は口授傳承して纒かに其餘脈を維きしか、是に至りて詩を云ふもの、魯に於ては申陪公、齊に於ては轅固生、燕に於ては韓太傅あり、尙書を云ふ者は濟南の伏生、禮を云ふ者は魯の高堂生、易を云ふ者は菑川の田生等あり、而して春秋を言ふ者は齊魯に於て胡毋生あり、趙に於て董仲舒あり、後五經博士を立つるに及んで、易に施雠、孟喜、梁丘賀、京房の學あり、書に歐陽生、大小夏侯氏の學、及び古文尙書の學あり、而して詩に魯詩、齊詩、韓詩、毛詩ありて皆學官に立つ、禮は則ち大小戴徳、及び慶普の三家あり、後又逸禮を加ふ、而して春秋には嚴彭祖、顏安樂の學あり、後又穀梁左氏の學を立つ、此等の諸學、皆一家の專門を以て師授傳承し、之を守るごと城郭の如く、之を傳ふること國策の如く、敢て自意を出して尺寸の出入を爲すことなく、以て一意、古經を守れり、是寔に漢儒崇學の意にして、後世より之を視れば、其の經々として古に拘泥して、曾て變通を知らざりしは、殆んど一笑すべきか如くなるも、當時焚燼の餘を承け簡冊は逃亡し、學者は凋竄して、六經の亡ひざることを縷の如くなりしかば、汲々として殘經を遺老に訪ひ、斷簡を壁中に索めて、其他に及はざりしこと、洵に己むを得ざるに出るなり、若し當時の學者にして、各自意を出して經を説き、浮辭を以て相尙ひたらしむには、六經の文、改竄し盡せること亦既に久しく、古聖賢の辭容言動、其れ復た何に順てか之を徵せむ、然らば則ち漢儒の六經に功あると、亦決して之を没すべからざるなり。

漢儒二生の事業、凡へて殘經を拾綴し、斷簡を補綴するに在りしこと、此の如くなりしかば、政府も亦廣く獻書の路を開て、天下の殘簡零冊を致さんと欲し、武帝の時に、藏書の策を建て、寫書の官を置き、上は六經より下は諸子百家の傳説に及ぶまで、皆秘府に充たしめたり、是に於て其郡國に在りては、河間の獻王徳、淮南王安等の如き、最も學を好みて儒を招き、書を集むると亦甚々富めりと稱す、然るに獻王の得し所の書中には、古文を以て書かれたる先秦の舊書に係る周官、尙書、禮記、孟子、老子等より七十子の徒の論著せしものありと云へば、其の當時に在りて最も珍書たりしこと復た疑ふべからず、而して王は其結果として、毛生等と共に周官、及び諸子の樂を云ひしものを采集して樂記を作れり、淮南王、亦南面百城の雄に跨り、冊書萬卷の富を擁し、其賓客と共に淮南鴻烈を著はして、頗る道徳の意を述べたり、此の如くなりしか故に、隨て偽書假托の類、亦間

出して、瓊玖眞璽の辨し難きものあるに至れるは、亦己むを得ざるの次第なりとす、成帝の時に及び、秘府の書、頗る散亡せしかは、謁者陳農をして又遺書を天下に求めしめ、光祿大夫劉向に詔して、經傳諸子詩賦を校せしめ、又步兵校尉任宏に兵書を、太夫令尹咸に數術を、侍醫李柱國に方技を校せしめたり、而して一書畢る毎に、向輒ち其編目を疏條し、其指意を撮録して之を奏せり、向卒するに及び、帝復た向か子の侍中奉車都尉劉歆に命じて父の業を卒えしむ、歆是に於て其七略を奏す、而して其目は輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、兵書略、術數略、方技略等にして、實に當時に於ける圖書の分類目錄たるものなり、而して其の總數は大凡三萬三千九百九十卷に上れりと云ふ、歆か所謂外は則ち太常、太史、博士の藏あり、内は則ち延閣、廣內、秘室の府ありて之を藏すと云ふ蓋是なり、然れども其後陵夷遂巡して遂に振はす、王莽の亂に及んで、秘府の簡冊、又焚燒せられて、殆んど遺る所なく、光武中興して、文雅を好み、明帝亦經術を重んじて、散逸を拾緝し、闕文を採求せしかは、石室、蘭臺、復た經籍の充積するを見る、是に於て、班固、傅毅等に命じて之を校せしめたり、是の時、天竺の佛法、始て渡來して、佛經、亦多く傳はれり、章帝の時、諸儒を白虎觀に會して五經の異同を議せしめしことあり、白虎通の撰、是の時に成るも、學風、漸く競はす、之を譬ふるに、湘邊の蘆荻の秋風に戦くか如く、枯幹猶存するも、生意、絶ゆること既に久しく、早晚必らず其の

零折朽倒を見るに至らすんはあらず、然れども燈火の將に滅せんとして其光益、明かに、紅楓の將に落ちんとして其色愈、加るか如く、桓靈の際に及ては、太學の書生三萬人に至ると云ふ、然れども此輩概ね皆浮華にして其實なく、徒に規定の科目を踐んで射策仕進の資と爲さんと欲し、其の汲々として之れ日も足らざる所以のものは、官途利祿の地を爲すに過ぎざるのみ、胸中無一物の陋を顧みずして、空しく學名の下に庸俗を囁嚇せんと欲するのみ、是に於てか一旦其地を得るに及ては、或は勢利に倚りて非義を行ふ者あり、或は佞智姦才を繼にして排擠を謀る者あり、其の然らざるものは多くは、一飽の以て其志を滿たし易く、或は酒に耽りて其腹を爛す者あり、或は色に荒んで其性を斫る者あり、而して家國の興廢消長に至りては曾て相關せざるもの、如く、轉人をして漢家何の必要ありてか、特に餽粟を給して、此の無羞の學生を養成せしかを疑はしむ、故に歴史家之を評して云く『諸生皆斗筭小人、君子耻之』と。

是の時に當り、漢家の制度漸く地に墜ち、宦官の徒は朝廷の上に跋扈して、清節名流の士は擲りに黨錮の禍に罹り、亡國の徵、既に兆せり、是に於てか、黃巾の賊蜂起して、所在に掠奪し、董卓、逆を爲して日月光無く、天下鼎沸、復た意を文學に致す者あることなく、卓か都を遷すに及ては、吏民擾亂して、辟雍、東觀、蘭臺、石室、宣明、鴻都、諸藏の典籍文章、皆其の爲めに割散せられて、大

なるは連ねて帷蓋と爲し、小なるは制して滕蓐と爲し、旁午紛糾兵馬の蹂躪に任せ、長安の亂に至り、一時に焚蕩して餘殘あるとなく、劉氏の命運、亦全く漸熾殘滅に歸し、竟に三國鼎立の天下と爲れり、抑東漢節義の士を尙ひ、李膺、陳蕃の流の如き、固に一代の名士たるも、天の厭ふ所は、人力の及ふへきにあらす、數君子の徒をして大厦の傾覆するを支えしむると能はず、空しく千載未雪の冤を鐵窓幽闇の中に吞ましめたるも、亦是非もなき次第なりとす、而して數君子黨錮の禍は、寔に魏晉の清談家を生ぜし所以の遠因たるへきものにして、其文學上に於ける關係は亦決して小少にあらざるなり。

今夫兩漢文學の異同を瞥見せむに、前漢は固に經術の士に富み、董仲舒、劉向、楊雄の如きは其最餘々たる者なりしと雖も其の醇儒と稱すへきは、蓋仲舒一人なりとす、然れども之を東漢の徒に馬融、鄭玄等一二の訓詁家あるのみに比すれば、猶以て多とするに足るものあり、蓋西漢の學者は求むる所、其意に在り、而して東漢は其句に在り、西漢は猶能く深厚忠樸の風あるも、東漢は澆薄頹廢、更に氣節の見るへきものなし、西漢は猶能く古聖賢の音容を想見せし述あるも、東漢は却て章句訓詁を以て其歸極と爲するに似たり、是兩漢學風の重なる異同にして、正さに風氣代降、聖を去ること愈、遠きを見るなり、殊に其文章に在りては、賈誼の論策を以て一世を傾動せしか如き、司馬相如の

辭賦を以て當時に馳騁せしか如き、又將た司馬子長の喜笑怒罵の筆を屬して紀傳體の歴史を創作せしか如きは、洵に漢代四百餘年間に在りてのみ特に餘々たるにあらす、魏晉六朝唐宋明清を通して、一人の能く其藩籬を窺ふ者あるを見ざるもの、豈前漢の一大光譽にあらすや、此等諸公の業は、寔に自家の鑄爐より熔出せし眞個の原造的文學と爲すへきものなれども、後漢に在りては、幾百の作者多くは剽竊摸擬の病に罹り、班固以下殆んど其職を免る能はず則ち惡んそ以て前人を追ふに足らむや、然れども摸擬の端は揚子雲に開く、其法言、太玄何ぞ古聖に擬するの甚しき、故に山陽顧氏嘗て之を評して曰く『摸擬防於子雲、剽竊防於孟堅、此二人本不可齒作者』と、其の作者に齒すへからずとは、稍酷なるに似たるも、摸擬剽竊の職に至りては、必ず二人の甘受せざるへからざる所なり、之を要するに、兩漢の文章に於ける、西漢は莊重にして簡古なるに在り、東漢は典麗にして贍整なるに在り、而して其の實質にして樸意饒きは、西漢の直に先秦に接する所以にして、東漢の較る其消息に遠きは、適以て世運の轉化を見るに足るなり、古人云ふ、文は東漢に衰ふと、洵に虚言にあらざるなり、唯諸葛亮の出師表一篇の如きは、簡嚴雄整、時代を以て限るへからず、顧氏此篇の存するありて、東漢の散文轉、其の寂寞ならざるを覺ふるなり。

吾人は下章に於て、左の類別によりて之を四章に分て、聊其韻文、及び散文に關する消息如何を窺

はむと欲す。

- 第一 議論體の文
- 第二 敘事體、即ち歴史、傳記の文
- 第三 詔勅、上書、及び書牘の文
- 第四 韻文

以上第一より第三に至るまでは散文にして、第四は韻文の體を爲すものなり、然れども支那の文章は、自ら歐西の文章と異なる所あるか故に、此の如く類別せしと雖ども、亦精密に區別すべからざるものあり、蓋敘事中に議論あるものは史なり、議論中に敘事あるものは子なり、而して子史の文は、支那の文學に於て、最も價值あるものなれば、吾人の類別は唯其大體に従ふのみ。

第二章 議論體の文

漢に二大散文家あり、一は敘事を以て其長を見はし、一は議論を以て其才を擅にせり、而して共に皆漢文の絶品なり、今姑く敘事家を措て、爰に其論文家を敘せむと欲す、是を誰と爲す、曰く洛陽の少年、賈誼是なり。

賈誼は洛陽の人なり、年少にして能く詩書を誦し、文を屬するを以て、郡中に聞ふ、河南の守、吳公と云ふ者、其の秀才なるを聞き、召て門下に置き、甚之を幸愛す、文帝初て立て、河南の吳公が治平、天下第一たりと聞き、徵して廷尉と爲す、廷尉乃ち言ふ、賈生年少にして頗る諸子百家の書に通ずと、文帝召して博士と爲す、是の時、誼年二十餘、博士中に於て最年少なりとす、然れども、詔令の議、下る毎に諸老先生言ふ能はざるもの、誼盡く之か對を爲す、諸先生是に於て、誼を以て能と爲す、帝之を説ひ、超遷して、一歳の中に太中大夫に至る、夫れ誼、才ありと雖ども、吳公の能く其才を愛して、之を推舉することなくんは、豈何に由りて驟かに天子の大夫と爲るを得む、山阿水涯、茅店孤驛の下、奇才異能を懷く者、何ぞ限らん、而して遂に狐狸麋鹿と群を爲し、草木風塵と同一化する者、古今皆是なり、嗚呼世果して才無きか、抑才を知らざるか、又將た其才を知るも能く用ひざるか、何ぞ其れ宜しく聞くべしして、之を聞かざるや、意ふに世の才を愛すと稱する者、率ね其才を愛せざる者なり、何となれば、其才を知て之を用ひざるは、才を棄るものなり、其才を愛して之を成さしめざるは、才を殺すものなり、才を殺し才を棄る者、惡んを以て人才を愛すと云はむや、然らば則ち賈生の吳公に於けるか如き、豈之を盲龜の浮木に逢ふに譬へざるべしむや、誼既に大夫と爲り、以爲らく漢興て二十餘年、天下方に和洽す、是の時に當りて、當さに正朔を改めて、服色を

易へ、法度を制して禮樂を興すへしと、乃ち悉く其の儀法を草具す、是に於て、帝大に誼を任用して將に公卿の位に置んとせしかば、能を害するの徒、交之を害し、誼を短りて云く、洛陽の年少、權を擅にして、諸事を紛亂せむと欲すと、群小蚘集して、讒毒の入る所、衆口金を鑠し、誼の才識を以てして、唯に以て諒とせられざるのみならず、帝も亦惑ふて之を疎んず、乃ち誼を以て長沙王の太傅と爲す、誼既に貶謫に遇ひ、意甚、自得せず、湘水を渡るに及び、賦を作て屈原を弔す、詞意抑鬱俗を疾むこと甚し、蓋原を弔して因て以て自ら諒すなり、夫屈原、忠を懷て、讒邪の毒に罹り、疾痛慘怛、汨羅不歸の鬼と爲りてより、既に數百年、誼の遭ふ所の境遇、殆んど其の然るを期せずして然るものあり、潯目の光景、讒諛志を得て鷓鴣翔翔す、豈以て弔屈の文なかるへけむや、誼既に長沙に在ること三年、其地卑濕、自ら以爲らく、年壽必らず長きを得すと、偶、鵬鳥あり、飛て其室に入り、坐隅に止る、乃ち賦を作て自ら廣む、後歲餘にして、復た徵されて京師に到りしも、帝未だ治國の要を問はずして、却て鬼神の事を問ひ、半夜其席の前むを知らざるに至る、居ること頃ありて、梁の懷王の太傅と爲る、懷王は帝の愛少子にして、書を好むか故に、誼に其の傅たらしめしなり、居ると數年、懷王騎獵して馬より墮て死す、誼自ら其の傅と爲りて無狀なりしを傷み、哭泣すること歲餘にして亦死す、時に年三十三。

誼の文、最も鴻製金玉の稱あるものを、治安策、過秦論の諸篇と爲す、俱に其新書の中に載す、新書十卷、多くは其本傳に載する所の文を取り、其章段を割裂し、其次序を顛倒して、標題を加ふるもの、故に其一大文字たる治安策の如きも、割裂分刪して、頗る贅亂を極む、然れども其の文心の靈活なる、跌宕排闥、激昂痛切にして、所謂痛哭流涕長大息すへきもの、之を筆墨の間に想見するに足る、又其の秦を論するや、立論雄偉にして、詞句勁俊、直に叙事を以て議論と爲し、千里到頭、積水を萬仞の谿に決するか如く、事を論するの文、以て之に尙ふるなかるへし、之を要するに誼の文の特質たる、雄深樸茂なるに在り、而して之を出すに才氣を以てし、之を貫くに識力を以てす、故に或は江河の澄滌して、其涯を測り難きか如きものあり、或は風霆の變化して、其迹を見ることなきが如きものあり、又或は雲霞の卷舒晦映して、千態萬狀なるか如きものありて、其の論する所鑿々として治亂興廢の故に達し、禮樂刑政の原を究む、蓋議論駢の文、當さに誼を以て西漢第一と爲すへし。

誼と幾んど其時を同ふして、稍、之に後れて、鼂錯と云ふ者あり、亦誼の流なり、然れども、其性情は誼の涙多きか如くならず、而して文筆、亦多く誼に遜る、錯は潁川の人なり、申商の刑名を學ひ、文學を以て太常掌故と爲る、人と爲り峭直にして刻深なり、孝文の時、天下尙書を治むる者な

し、獨り濟南の伏生と云ふ者は、故の秦の博士にして能く、尙書を治すと聞く、然れども、年既に九十餘、老て徴すべからず、乃ち錯を遣りて、尙書を伏生の所に受けしむ、所謂今文尙書、即ち是なり、後太子の家令と爲り、其辯を以て太子に幸せらる、太子の家、錯を號して智囊と云ふ、是に於て、數、上書して諸侯の土地を削て、其權勢を殺くこと、及び法令の更定すべきことを言ふ、文帝聽かず、然れども其材を奇とし、遷して中大夫と爲す、是の時に當り太子は錯の計策を善とすれども、袁盎以下の諸大功臣、多くは錯を好まず、既にして、景帝、位に即き、錯を以て内史と爲す、錯常に數、間を請ひ事を言ふ、寵幸、九卿を傾く、而して法令も亦其の更定する所のもの多し、丞相以下、心に之を便なりとせず、以て陰に之を中傷せむことを謀る、而して錯未だ覺らず、又遷りて御史大夫と爲り、諸侯の地を削らむことを請ふに及び、丞相竇嬰、之を争ひ、遂に隙あり、而して諸侯の錯を疾むこと蛇蝎の如く、吳楚七國果して反し、皆錯を誅するを以て名と爲す、竇嬰、袁盎交、進て帝に説く、錯遂に朝衣を衣て東市に斬らる、校尉鄧公と云ふ者あり、帝に白して云く、龍錯、諸侯の強大にして制すべからざるを思ふか故に、地を削り以て京師を尊ふせむと欲せり、是實に萬世の利なり、而して計畫、始て行はれて、卒に大戮を受く、是内は以て忠臣の口を杜ぎ、外は以て諸侯の爲めに仇を報するなりと、帝默然たり、良久して曰く、吾も亦之を恨むと、嗚呼奸邪

路に當る、誰か忠士の心を諒せむ、誣欺の徒、毎に名才を傷る、彼の讒人を執て猛虎に投與せずんは、千載誰か盡忠の士を知らむ、龍錯の如き者、蓋亦悲むべき哉。

錯の政治上に於ける行爲は、略、此の如し、而して其文章の存するもの、多くは當時の政務を疏陳するものに係る、錯の文、規律森嚴を以て勝つ、之を長沙に比すれば、光緒精采、固より及はざること違きも、其行文の嚴整精熟なるに至りては、寧ろ過るあるも及はずと爲さざるなり、蓋文章は人の性情に根するものなれば、二子の性情の異同は、則ち二子の文の異同を爲す所以にして、特に錯の文の以て其の人と爲りに類するあるを見る、要するに、西漢の論文家中、賈誼の二子は、識力を以て其長を爲し、董仲舒、淮南王、揚雄諸子は、學力を以て其長を爲せり、是前者の文の時務を論する多くして、後者の理致を説く多き所以なりとす、且夫西漢の奏疏、多くは平直にして曲折に乏しく、轉人をして睡眠を催さしめんと欲すれども、賈誼の二子に至りては、活潑宏論、筆力亦之に稱ふて、殆んど其奏章なるかを忘るゝものあり、吾人故に姑く二子を以て之を併稱すと云ふ、

賈誼過秦論

秦孝公據_二殽函之固_一、擁_二雍州之地_一、君臣固守、以窺_二周室_一、有_二席卷天下_一、包_二舉宇內_一、囊括四海之意、并_二吞八荒之心_一、當_二是時_一、商君佐_二之_一、內立_二法度_一、務_二耕織_一、修_二守戰之具_一、外連_二衡而闘

諸侯、於是秦人拱手而取西河之外、孝公既沒、惠文武昭襄業、因遺策、南兼漢中、西舉巴蜀、東割存腴之地、北收要害之郡、諸侯恐懼、會盟而謀弱秦、不愛珍器重寶肥美之地、以收天下之士、合從締交、和與爲一、當是時、齊有孟嘗、趙有平原、楚有春申、魏有信陵、此四君者、皆明智而忠信、寬厚而愛人、尊賢而重士、約從離衡、并韓魏、趙齊楚宋衛中山之衆、於是六國之士、有寧越、徐尚、蘇秦、杜赫之屬、爲之謀、齊明、周最、陳軫、召滑、樓緩、翟景、蘇厲、樂毅之徒、通其意、吳起、孫臏、帶佗、兒良、王廖、田忌、廉頗、趙奢之朋、制其兵、嘗以什倍之地百萬之衆、叩關而攻秦、秦人開關而延敵、九國之士遂巡遁逃、而不敢進、秦無亡矢遺鏃之費、而天下諸侯已困矣、於是從散約解爭割地而賂秦、秦有餘力而制其弊、追亡逐北、伏尸百萬、流血漂櫓、因利乘便、宰割天下、分裂河山、強國請伏、弱國入朝、施及孝文王、莊襄王、享國日淺、國家無事、及至始皇、奮六世之餘烈、振長策、而御宇內、吞二周、而亡諸侯、履至尊、而制六合、執敲朴以鞭笞天下、威振四海、南取百粵之地、以爲桂林象郡、百粵之君、俛首係頸、委命下吏、乃使蒙恬北築長城、而守滌雁、却匈奴七百餘里、胡人不敢南下而牧馬、士不敢彎弓而報怨、於是廢先王之道、燔百家之言、以愚黔首、墮名城、殺豪俊、收天下之兵、聚之咸陽、銷鋒鏃、鑄以爲金人

十二、以弱天下之民、然後踐華爲城、因河爲池、據億丈之城、臨不測之谿、以爲固、其將勁弩、守要害之處、信臣精卒、陳利兵而誰何、天下已定、始皇之心、自以爲關中之固、金城千里、子孫帝王萬世之業也、始皇既歿、餘威震於殊俗、然而陳涉、張敖、細腰之子、氓隸之人、而遷徙之徒也、材能不及中人、非有仲尼墨翟之賢、陶朱倚頓之富、蹶足行伍之間、而崛起阡陌之中、率罷散之卒、將數百之衆、而轉攻秦、斬木爲兵、揭竿爲旗、天下雲集響應、贏糧而景從、山東豪俊、遂並起而亡秦族矣、且夫天下非小弱也、雍州之地、崤函之固、自若也、陳涉之位、不尊於齊楚燕趙韓魏宋衛中山之君也、鉏耰棘矜、不銛於鉞戟長鋏也、適戍之衆、非抗於九國之師也、深謀遠慮、行軍用兵之道、非及曩時之士也、然而成敗異變、功業相反也、試使山東之國、與陳涉度長策、大比權量、力則不可同年而語矣、然秦以區々之地、致萬乘之權、招八州、而朝同列、百有餘年矣、然後以六合爲家、崤函爲宮、一夫作難、而七廟墮、身死人手、爲天下笑者、何也、仁義不施而攻守之勢異也、

通錯論貴粟

聖王在上、而民不凍餓者、非能耕而食之、織而衣之也、爲開其資財之道也、故堯禹有九年之水、湯有七年旱、而國亡損瘠者、以蓄積多、而備先具也、今海內爲一、土地人民之衆、